南陽市埋蔵文化財調査報告書第５集

蒲生田山古墳群
総合公園内遺跡群

発掘調査報告書

2012年3月

山形県南陽市教育委員会

南陽市埋蔵文化財調査報告書第五集
蒲生田山古墳群・総合公園内遺跡群発掘調査報告書
山形県南陽市教育委員会

蒲生田山古墳群
総合公園内遺跡群

発掘調査報告書

南陽市埋蔵文化財調査報告書第５集

平成２４年３月

山形県南陽市教育委員会

蒲生田山古墳群全景　奥から 3 号墳、4 号墳、2 号墳（南西より）

蒲生田山古墳群全景　左から 3 号墳・4 号墳・2 号墳（西より）

蒲生田山 3 号墳出土　土師器底部穿孔壺

序

本書は、南陽市教育委員会が実施した平成2年の蒲生田山古墳群と昭和61年の総合公園内遺跡群の発掘調査の成果をまとめたものです。

蒲生田山古墳群・総合公園内遺跡群は、山形県南部の米沢盆地の東北部に位置する南陽市に所在します。本市は、「菊とぶどうといで湯の里」として親しまれており、菊やぶどうを代表とする県内でも有数の果樹栽培の盛んなまちとして知られています。また、宮内熊野大社や赤湯温泉など歴史ある観光のまちでもあります。

本市には、国指定史跡の稲荷森古墳、縄文時代の遺跡として知られている大野平遺跡をはじめ数多くの遺跡があります。

このたび、ハイジアパーク南陽建設事業、総合運動公園整備事業に伴う発掘調査の報告書刊行により、出土した遺物・遺構などから当時の生活を知るうえで貴重な成果を得ることができ、本書がこの貴重な財産を後世に受け継ぐための一助となるよう期待しております。今後とも各種開発事業との調整を図りながら埋蔵文化財の保護に努めてまいる所存でおりますので、みなさまからの更なるご理解を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査及び報告書作成にあたってご協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

南陽市教育委員会

教育長　　猪　野　忠

本書は、ハイジアパーク南陽建設事業に係る「蒲生田山古墳群」および総合運動公園整備事業に係る「総合公園内遺跡群」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は、南陽市教育委員会が実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、南陽市教育委員会が保管する。

調査要項

遺跡名	①蒲生田山古墳群（かもうだやまこふんぐん） ②総合公園内遺跡群（牛ケ首（うしがくび）、石ケ窪（いしがくぼ）、雨沼（あめぬま）、蕗畑遺跡（ふきっぱた））（そうごうこうえんないいせきぐん）
遺跡番号	①平成元年度登録 ②昭和 61 年度登録
所在地	①山形県南陽市上野（わの） ②山形県南陽市竹原（たけはら）
調査主体	南陽市教育委員会
調査実施機関	南陽市教育委員会社会教育課
調査期間	①平成２年５月９日～平成２年９月８日 ②昭和６１年１０月６日～平成元年６月５日

調査担当者

昭和６１年度	社会教育課長	粟野忠雄	社会教育課次長	二瓶精蔵、渡部昌久
	文化係長	渡部昌久	主任	須藤房雄
	学芸員	吉野一郎		
昭和６２年度	社会教育課長	粟野忠雄	社会教育課次長	渡部昌久
	文化係長	菅野　章	学芸員	吉野一郎
昭和６３年度	社会教育課長	渡部昌久	社会教育課次長	熊坂善行
	文化係長	菅野　章	主任	大道寺祝子
	学芸員	吉野一郎		
平成　元年度	社会教育課長	渡部昌久	社会教育課次長	米　秀一
	文化係長	菅野　章	学芸員	吉野一郎
平成　２年度	社会教育課長	渡部昌久	社会教育課次長	恩地佑助
	文化係長	吉野一郎	主事	角田朋行

報告書作成担当者

平成２３年度	スポーツ文化課長	尾形真人 (4 月～９月) 江口和浩 (10 月～３月)	スポーツ文化課長補佐 （兼埋蔵文化財調査推進係長）	熊坂正規
	埋蔵文化財調査推進係	鈴木義三	嘱託	吉田江美子、山田　渚

調査指導	山形県教育庁文化課	佐藤鎭雄
調査協力	南陽市商工観光課	
	南陽市都市計画課	

凡　例

1　本書の執筆は、鈴木義三（蒲生田山古墳群第Ⅰ章、総合公園内遺跡群第Ⅰ章）、佐藤鎭雄（蒲生田山古墳群Ⅱ章、総合公園内遺跡群第Ⅱ章）、吉田江美子（蒲生田山古墳群第Ⅲ章）、山田　渚（総合公園内遺跡群第Ⅰ章、第Ⅲ章）が担当した。

2　遺構図に付す高さは海抜高で表す。方位は磁北を示す。

3　本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

ＳＤ・・・溝跡　　ＳＫ・・・土坑　　ＳＸ・・・性格不明遺構　　ＳＴ・・・竪穴住居跡

ＲＰ・・・登録土器　　Ｐ・・・・土器

4　遺構実測図の縮尺は各図に示し、各々スケールを付した。遺物実測図は 1/3 で採録している。

5　写真図版は任意の縮尺で採録した。

6　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

7　発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（敬称略）

佐藤鎭雄　　佐藤庄一　　大塚初重　　辻　秀人　　武田昭子　　北野博司　　米村祥央

秦　昭繁　　黒坂雅人　　角田朋行　　島貫幹子

8　委託業務は下記のとおりである。

蒲生田山古墳群

地形測量業務　　株式会社マエダ

鉄器保存処理　　昭和女子大学・武田昭子

総合公園内遺跡群

ＢＭ設置及びグリット杭設置業務（昭和 61）　有限会社マエダ測量設計事務所

グリッド杭設置業務（平成元）　有限会社マエダ測量設計事務所

目　次

蒲生田山古墳群…… 1
Ⅰ　調査の経緯…… 2
　1　調査に至る経過…… 2
　2　調査の概要…… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境…… 4
　1　地理的環境…… 4
　2　歴史的環境…… 5
Ⅲ　遺跡の概要…… 8
　1　基本層序…… 8
　2　検出遺構…… 8
　3　出土遺物…… 26
　4　まとめ…… 30
総合公園内遺跡群…… 33
Ⅰ　調査の経緯…… 34
　1　調査に至る経過…… 34
　2　調査の概要…… 35
Ⅱ　遺跡の立地と環境…… 36
　1　地理的環境…… 36
　2　歴史的環境…… 36
Ⅲ　遺跡の概要…… 40
　1　検出遺構と出土遺物…… 40
　2　まとめ…… 83

図　版

第 1 図　遺跡位置図 …… 7
第 2 図　基本層序 …… 8
第 3 図　2 号墳・3 号墳・4 号墳配置図 …… 9
第 4 図　3 号墳地形図 …… 10
第 5 図　3 号墳平面図 …… 11
第 6 図　3 号墳断面図 (1)…… 12
第 7 図　3 号墳断面図 (2)…… 13
第 8 図　3 号墳断面図 (3)…… 14
第 9 図　3 号墳断面図 (4)…… 15
第 10 図　3 号墳遺物分布図 …… 16
第 11 図　4 号墳地形図 …… 18
第 12 図　4 号墳平面図 …… 19
第 13 図　4 号墳断面図 (1)…… 20
第 14 図　4 号墳断面図 (2)…… 21
第 15 図　4 号墳断面図 (3)…… 22
第 16 図　4 号墳遺物分布図・遺物出土図 …… 23
第 17 図　2 号墳地形図・試掘断面図 …… 24
第 18 図　1 号墳地形図・石室実測図 …… 25
第 19 図　遺物実測図　3 号墳周壕 …… 27
第 20 図　遺物実測図　4 号墳周壕・3 号墳鉄製品 …… 28
第 21 図　宮内熊野大社蔵　土師器壺 …… 31
第 22 図　遺跡位置図 …… 39
第 23 図　石ヶ窪 A 遺跡　調査範囲図・トレンチ配置図 …… 40
第 24 図　総合公園内遺跡群　遺跡配置図 …… 41
第 25 図　雨沼遺跡　マウンド位置図・トレンチ配置図 …… 42
第 26 図　蕗畑遺跡　マウンド位置図・トレンチ配置図 …… 43
第 27 図　牛ヶ首 A 遺跡　A 区遺構配置図 …… 44
第 28 図　牛ヶ首 A 遺跡　A 区土坑 …… 45
第 29 図　牛ヶ首 A 遺跡　A 区土坑・溝 …… 46
第 30 図　牛ヶ首 A 遺跡　B 区遺構配置図・土坑・溝 …… 47
第 31 図　牛ヶ首 A 遺跡　B 区柱穴 …… 48
第 32 図　牛ヶ首 A 遺跡　C 区遺構配置図・土坑 …… 49
第 33 図　牛ヶ首 B 遺跡　遺構配置図・塚状遺構断面図 …… 50
第 34 図　遺物実測図　牛ヶ首 A 遺跡 (1) …… 51
第 35 図　遺物実測図　牛ヶ首 A 遺跡 (2) …… 52
第 36 図　石ヶ窪 A 遺跡　土坑 …… 53
第 37 図　石ヶ窪 A 遺跡　土坑・炉 …… 54
第 38 図　石ヶ窪 A 遺跡　炉 …… 55
第 39 図　石ヶ窪 A 遺跡東区　遺構配置図・性格不明遺構 56
第 40 図　石ヶ窪 B 遺跡　遺構配置図 …… 57
第 41 図　遺物実測図　石ヶ窪遺跡 (1) …… 58
第 42 図　遺物実測図　石ヶ窪遺跡 (2) …… 59

第 43 図　遺物実測図　石ケ窪遺跡 (3) ……60
第 44 図　遺物実測図　石ケ窪遺跡 (4) ……61
第 45 図　遺物実測図　石ケ窪遺跡 (5) ……62
第 46 図　遺物実測図　石ケ窪遺跡 (6) ……63
第 47 図　雨沼遺跡　遺構配置図　遺物実測図 ……64
第 48 図　蕗畑遺跡　A区遺構配置図・基本層序 ……65
第 49 図　蕗畑遺跡　A区土坑 ……66
第 50 図　蕗畑遺跡　A区土坑・柱穴 ……67
第 51 図　蕗畑遺跡　B区遺構配置図・基本層序 ……68
第 52 図　蕗畑遺跡　B区竪穴住居 ST1(1) ……69
第 53 図　蕗畑遺跡 B区　竪穴住居 ST1(2) ……70
第 54 図　蕗畑遺跡 B区　性格不明遺構 SX1(1) ……71
第 55 図　蕗畑遺跡 B区　性格不明遺構 SX1(2) ……72
第 56 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (1) ……73
第 57 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (2) ……74
第 58 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (3) ……75
第 59 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (4) ……76
第 60 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (5) ……77
第 61 図　梨郷平野古窯 1 号窯出土須恵器 ……85

表

表 1　遺跡位置図 …… 6
表 2　蒲生田山古墳群　遺物観察表 ……29
表 3　遺跡位置図 ……38
表 4　牛ケ首遺跡　遺物観察表 ……78
表 5　雨沼遺跡　遺物観察表 ……78
表 6　石ケ窪遺跡　土器観察表 ……79
表 7　石ケ窪遺跡　石器観察表 ……80
表 8　蕗畑遺跡　土器観察表 ……81
表 9　蕗畑遺跡　石器観察表 ……82

写真図版

巻頭写真 1　蒲生田山古墳群全景（空撮写真）
巻頭写真 2　蒲生田山 3 号墳出土
土師器底部穿孔壺
写真図版 1　蒲生田山古墳群　調査前全景
写真図版 2　蒲生田山 2 号墳・3 号墳・4 号墳全景
写真図版 3 ～ 4　蒲生田山 3 号墳　調査状況
写真図版 5 ～ 7　蒲生田山 4 号墳　調査状況
写真図版 8 ・ 9　牛ケ首 A 遺跡　調査状況
写真図版 10　牛ケ首 B ・石ケ窪 A 遺跡　調査状況
写真図版 11　石ケ窪 A ・ B ・雨沼遺跡　調査状況
写真図版 12　雨沼遺跡　調査状況
写真図版 13　蕗畑遺跡　A区調査状況
写真図版 14　蕗畑遺跡　B区調査状況
写真図版 15 ～ 17　蒲生田山古墳群　壺・底部穿孔壺
写真図版 18　蒲生田山 3 号墳出土出土土器
写真図版 19　蒲生田山 4 号墳出土出土土器
写真図版 20　蒲生田山 3 号墳出土鉄製品
写真図版 21　牛ケ首遺跡　土師器・須恵器
写真図版 22　牛ケ首遺跡　甕・石器
写真図版 23　牛ケ首遺跡　須恵器・土師器・縄文土器
写真図版 24　石ケ窪遺跡　縄文土器深鉢
写真図版 25 ～ 29　石ケ窪遺跡　縄文土器・土師器
写真図版 30　石ケ窪遺跡　玦状耳飾・臼玉
写真図版 31　石ケ窪遺跡　箆状石器
写真図版 32　石ケ窪遺跡　石匙・石鏃・石錐
写真図版 33　石ケ窪遺跡　箆状石器
写真図版 34　石ケ窪遺跡　石匙
写真図版 35　石ケ窪遺跡　箆状石器
写真図版 36　石ケ窪遺跡　尖頭器・石鏃
写真図版 37　石ケ窪遺跡　打製石器
写真図版 38　石ケ窪遺跡　石皿・磨石
写真図版 39　石ケ窪遺跡　磨製石器・凹石
写真図版 40　石ケ窪遺跡　凹石
写真図版 41　石ケ窪遺跡　磨製石斧・敲石

写真図版 42　石ヶ窪遺跡　打製石器
写真図版 43　雨沼遺跡　縄文土器・土師器
写真図版 44　蕗畑遺跡　縄文土器
写真図版 45　蕗畑遺跡　土師器・須恵器
写真図版 46　蕗畑遺跡　須恵器・墨書土器・転用硯
写真図版 47　蕗畑遺跡　須恵器・土師器
写真図版 48　蕗畑遺跡　須恵器・土師器・縄文土器
写真図版 49　蕗畑遺跡　縄文土器
写真図版 50　蕗畑遺跡　縄文土器・砥石
写真図版 51　蕗畑遺跡　篦状石器
写真図版 52　蕗畑遺跡　削器・篦状石器・石鏃
写真図版 53　蕗畑遺跡　打製石器
写真図版 54・55　蕗畑遺跡　凹石
写真図版 56　蕗畑遺跡　凹石・敲石

蒲生田山古墳群

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

蒲生田山古墳群は、南陽市中心部の北側の上野地区に所在し、吉野川扇状地の扇頂部北東の裾野にある小起伏山地上に立地する。

本調査は、ふるさと創生事業の一環として計画された南陽市の保養施設「ハイジアパーク」建設事業に伴う緊急発掘調査として実施された。この計画に基づき、南陽市教育委員会と建設関連各課とで協議を行い、遺跡の保護を図ることを目的に、平成元年に建設予定地において事業計画区域内の遺跡の有無とその範囲を確認する表面踏査を実施した。その結果、これまでに確認されていた1号墳に加え2号墳を古墳として確認し、3号墳・4号墳・5号墳を新たに古墳と推定した。

平成元年9月から開発計画との調整を図るため、計画地の用地取得後にトレンチ調査を行い、遺構や遺物の広がり等を把握する試掘調査を実施した。

試掘調査では、事業計画区域内に10本のトレンチと63ヶ所の試掘ピットを設定して試掘をした後、層序の記録および遺構検出面の精査を行った。その結果古墳に伴うとみられる周壕のプランと底部穿孔壺の破片が見つかり、3号墳・4号墳・5号墳が古墳であると確認した。

この試掘調査の結果を受け、平成2年5月より緊急発掘調査を実施した。この際事業区域内にある3号墳・4号墳・5号墳を記録保存のための調査対象とし、2号墳については現状保存とし調査対象から外した。

2　調査の概要

調査に先立ち、平成2年6月に関係課による調整会議で、発掘調査に関する調整打ち合わせを行った。また、同6月には山形県教育委員会とも発掘調査に係る保護措置に関する打ち合わせを行った。

調査範囲として、2000㎡の調査区を設定し、事業用地確認、調査区設定、重機による表土除去、遺構検出を行った。遺跡範囲内に設定したグリッド標記は古墳番号と、横軸で北西から南東へ、縦軸は南西から北東に昇順する算用数字にて行った。座標値と番号を登録した。その後順次墳丘の確認と周壕の断面精査と実測図作成等の諸記録を行い完掘した。遺構平面図は平板により実測を行った。

現地での調査は、当初5月9日から6月30日までの日程により開始したが、完了日は9月10日まで延期した。平成2年5月9日に現地にて鍬入れ式、テント設営及び機材搬入、調査前写真撮影、トレンチ掘削を開始した。翌日からも4号墳の重機による表土剥離作業と作業員による荒堀を行い全体の形状を把握するための作業が続いた。この日から3号墳も同時に表土剥離を開始した。5月18日に5号墳表土剥離後の写真撮影を行い、ベルト断面図を記録した。この段階で前方後円墳と思われる形状が確認された。以降断面図記録やトレンチによる断面確認、前方部墳丘の確認作業を続けた。22日にベルト3の周壕の底より底部穿孔壺が出土し、翌日にもＴＴ6掘下げ時に土器片が出土した。24日から主体部確認のための墳頂部ベルト除去作業と周壕プラン確認のため、周壕ベルト設定を行った。25日に後方部のベルト両側から周壕の掘り下げを開始した。5号墳の周壕掘り下げは6月下旬まで行い、この間後方部やくびれ部より多くの土器片が出土した。以後5号墳ではベルト断面図作成、主体部検出作業、ベルト断面の記録・除去作業、土器の記録（レベル・点取り）・取上げ作業、遺構記録、写真撮影を行った。また、6月21日より3号墳・4号墳の周壕掘り下げを開始した。掘り下げ作業は続き、8月2日に前方部西側（くびれ部付近）より二重口縁壺が出土した。また調査途中に円墳と方墳の2基と思われていた3号墳と4号墳が1基の前方後方墳であることも判明した。8月6日には3号墳・4号墳の周壕掘り下げはほぼ終了した。前方部先端からも土器が出土した。以後、3号墳・4号墳においてもベルトの記録・土層注記、写真・図化作業、除去作業、周壕内土器の取り上げ・記録・写真撮影を行った。また8月9日より4号墳の平面図作成、さらに21日に委託業者の地形測量も開始し

た。8 月 22 日に 3 号墳・4 号墳前方部墳頂部、墳丘及び周壕においても簡易金属探知機による金属探査を行ったが遺物等は見つからなかった。さらに、翌 23 日に農道として使用中であったため発掘出来なかった 3 号墳・4 号・5 号墳東側において追加のトレンチ調査を行った。その結果土師器片と鉄製品が出土した。また、5 号墳の東側では周壕が崖に開口していることが判明した。

27 日からタワーを設置しての写真撮影、ラジコンヘリによる空中写真撮影、3 号墳・4 号墳の平面図作成を行い 9 月 10 日に本調査を終了した。

調査終了後、前記の通り 3 号墳と 4 号墳を「3 号墳」、5 号墳を「4 号墳」と、それまで使用された「蒲生田古墳群」の遺跡名を「蒲生田山古墳群」に改称した。以後の報告では改称した名称で記述する。

蒲生田山 3 号墳から見た南陽市内

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的景観

蒲生田山古墳群は、南陽市上野地内にある。赤湯駅から北東へ1.5 ｋｍに位置し、標高は280.0 ～ 290.0 ｍを測る。

遺跡が所在する南陽市は、山形県南部置賜地方米沢盆地の北端にあたり、東西15 ｋｍ、南北24 ｋｍの三角形状の市域をなす。周囲を山々に囲まれた米沢盆地の北部に位置し、東に奥羽山脈、南に山形県の母なる川である最上川の源流のある吾妻連峰、南西に飯豊連峰、北西に朝日連峰を望む。面積は約160 ｋ㎡で、このうち北部の山地が70%を占める。南部に広がる平野部は30%である。北部の山地は、出羽山地の南部を占める白鷹山山系丘陵の南側にあたり、「北に丘陵、南に沃野」と表現される地形である。北の丘陵地帯から南の沃野に貫流する吉野川は、白鷹山(標高994 ｍの休火山)に流れを発し、南流し、宮内扇状地の扇頂部にあたる宮内で平地部に出る。かつては宮内から沖郷に向かって南流し、西の漆山に流れ出る織機川など共に大きな合成扇状地を形成し、沖郷最南端の宮崎付近で最上川(松川)に合流していた。近世初期に水田開発のため、吉野川本流を堰とし、宮内から赤湯方面に流れる支流を拡幅して、現在では赤湯地区を流れ、赤湯地区南部の大谷地を経て高畠町屋代川と合流して最上川に合流している。

大谷地は、もともとは地球史の新生代第三紀中新生約1,100万年前頃の火山性陥没地形に由来する。赤湯地区の山際から南側一帯に広がる大谷地を含んで、南は高畠町糠野目地区北部、西は宮内地区南部・沖郷地区にまで広がる広大なカルデラ状をなしていた。当初は湖であったが、10万年前頃からの氷河期にしだいに土砂で埋まり、1万年前頃には近世段階の大谷地に縮小していったという(菅井敬一郎1990)。また、蒲生田山古墳群のある蒲生田山丘陵に南接する吉野川沿いの内原段丘は氷河時代最終氷期の3.5万年前頃に形成された段丘である(前掲菅井敬一郎1990)。したがって、蒲生田山古墳群が形成し始める頃は現在とほぼ変わりない地形であったとみられる。

気候は米沢盆地全体が盆地特有の内陸型気候を示し、平均風速は低いが寒暖の差があり、積雪も比較的多く年間の降水量も1500㎜前後を測る。しかし、吉野川本流のあった沖郷地区東部から赤湯地区にかけては米沢盆地で一番降雪量が少なく、夏季の6月から8月にかけては盆地内でも一番高温となる。同様な傾向は米沢市北部、高畠町西部の最上川東部でもみられる。そのためか、弥生時代以降の遺跡が密集し、中世には伊達家領内で最も農業生産力が高かった。

蒲生田山古墳群は、白鷹山系鷹戸山(標高618 ｍ)の南に広がる丘陵・秋葉山(標高561 ｍ)の南に突き出た丘陵先端に立地する。この丘陵の下方に広がる段丘は内原段丘である。近世になって新田開発が行われると段丘が吉野川よりかなり高いため、水不足をきたし丘陵先端周辺の谷を利用した唐沢溜池・内原大堤・山居沢堤・上野堤などができた。

蒲生田山古墳群のある丘陵の西側は宮内地区の内原で宮内側からの開拓地域である。蒲生田山古墳群のある丘陵から東部・南部一帯は沖郷地区蒲生田（宮内新田）で吉野川をはさんで蒲生田分である。蒲生田の東南部は赤湯地区三間通で内原段丘東南部およびその東の二色根山の北側も三間通分となっている。

蒲生田山の多くは蒲生田分であるが、蒲生田山でもあるにも関わらず、蒲生田山古墳群のある丘陵は上野分となっている。上野は近世の蒲生田村の一部で、上蒲生田の村民が開拓し蒲生田村上野と呼ばれていたが、明治になって沖郷村に属さず、赤湯町に属するようになり、分村したのである。蒲生田山のうち上蒲生田分が上野分となって大字上野(わの)が出現した。

蒲生田山古墳群のある丘陵は、東には山居沢山、東南に上野山、南南東に二色根山があって赤湯地区の東半分は見えないが、赤湯地区の西半分・沖郷地区・宮内地区の南半分が眺望され、遠くに米沢盆地の多くが見える眺望の良いところである。南に赤湯地区長岡の稲荷森古墳がよく見える。

また、東部～東南部の山居沢山・上野山・二色根山にはかつて「赤湯古墳群」と呼ばれた終末期古墳群が存在し、蒲生田山もその西の一角を占めていた。この古墳群の立地する丘陵一帯は大谷地成因に関わる凝灰岩の山である。

2　歴史的景観

本遺跡周辺では、南陽市を中心に現在 260 ヶ所余りの遺跡が確認されている。周辺の主要遺跡や関連遺跡について時代毎に概観し、この地域における歴史的な背景をみてみよう。

旧石器時代

当該期の遺跡は希少であり、南陽市では長岡山遺跡が立地する長岡山から後期旧石器時代に属するとみられるナイフ形石器が採集されている (佐々木洋治氏による)。

縄文時代

草創期の遺跡が３ヶ所ある。一つは長岡山遺跡で、エンドスクレィパーが１点採集されている (佐々木洋治氏による)。もう一ヶ所は北町遺跡である。平成８年の下水道工事による発見で、石匙や石槍など 100 数十点に及ぶ石器類が採集され、高畠町日向洞窟遺跡などと同時期の開地遺跡があったことが判明している (佐藤鎭雄・秦昭繁 2010)。さらに大谷地に面した松沢でも草創期特有の有溝砥石が発見されている (山内清男 1974)。

早期以降の縄文遺跡は山間部から平地部まで広く分布して数も大変多い。次に主な遺跡をあげる。

漆山を流れる織機川上流に位置する大野平遺跡では、早期中葉・後葉と前期末葉の竪穴住居が４棟検出されており、関東の田戸下層式に併行する沈線文土器は「須刈田式」として、山形県早期の標式土器となっている。

また、大谷地内部唯一の湧水湖・白竜湖を望む大沢山山麓丘陵先端にある月ノ木Ｂ遺跡でも早期中葉から前期前葉にかけての土器・石器類が多量に出土している。

さらに、吉野川等の沖積作用で偶然人類が居住できる空間ができた大谷地内部の、南陽市赤湯と高畠町深沼の境にある高畠町押出遺跡は前期中葉の短期間に営まれた低湿地集落遺跡で、40 棟余の打込柱平地住居が検出され、多量の土器・石器と共に漆製品、クッキー状炭化物などが発見された。特に彩漆土器やクッキー状炭化物・押出型ポイントなどは著名で、国指定重要文化財となっている。

弥生時代

宮内扇状地扇端部の旧吉野川沿いの沖郷地区萩生田遺跡から弥生時代中期の土器と石包丁が採集されているが、さらに１ｋｍ下流の沖郷地区島貫の百刈田遺跡でも発掘調査により十数基の弥生時代墓跡が発見され、中期後葉の土器や稲籾資料が採集されている。水田稲作を行う集落が近辺に展開していたことなどが判明している。また、萩生田西方 1.3 ｋｍの漆山地区池黒にある庚壇遺跡でも発掘調査により弥生時代後期の竪穴住居が発見され、宮内扇状地扇端部では織機川沿いでも弥生時代集落が展開していたことがわかった。

古墳時代

４世紀後半に築かれた赤湯地区長岡の稲荷森古墳は、全長 96 ｍ、後円部径 62 ｍ、後円部高 9.6 ｍと東北有数の規模を誇る前方後円墳である。発掘調査により東隣の長岡山丘陵には小型の方形周溝墓を含む集落があったとみられている。稲荷森古墳の北 1.2 ｋｍ、赤湯地区三間通に諏訪前遺跡があり、発掘調査によって４世紀後半の集落の存在が明らかにされている。

また、稲荷森古墳の西方 1.5 ｋｍ、沖郷地区萩生田南部の大塚遺跡では方墳および方形周溝墓十余基が発掘調査によって確認されており、周辺に４世紀代の集落が存在していることがわかった。５世紀代になっても郡山の沢田遺跡や島貫の百刈田遺跡などで発掘調査によって集落の存在が確認され分布調査の結果も合わせると、沖郷地区郡山・萩生田・中落合・島貫周辺の広大な地域に古墳時代の集落群が存在したことが浮上してきている。

奈良・平安時代

７世紀後半の奈良時代前期 (飛鳥期) になると米沢盆地の最上川東部・北部に律令政権勢力が進出し、優嵜曇評が設置されるが、それに伴い官衙や終末期古墳も築造されるようになる。沖郷地区沢田遺跡では発掘調査により７世紀末～８世紀初頭の竪穴住居が２棟検出されて

いる。

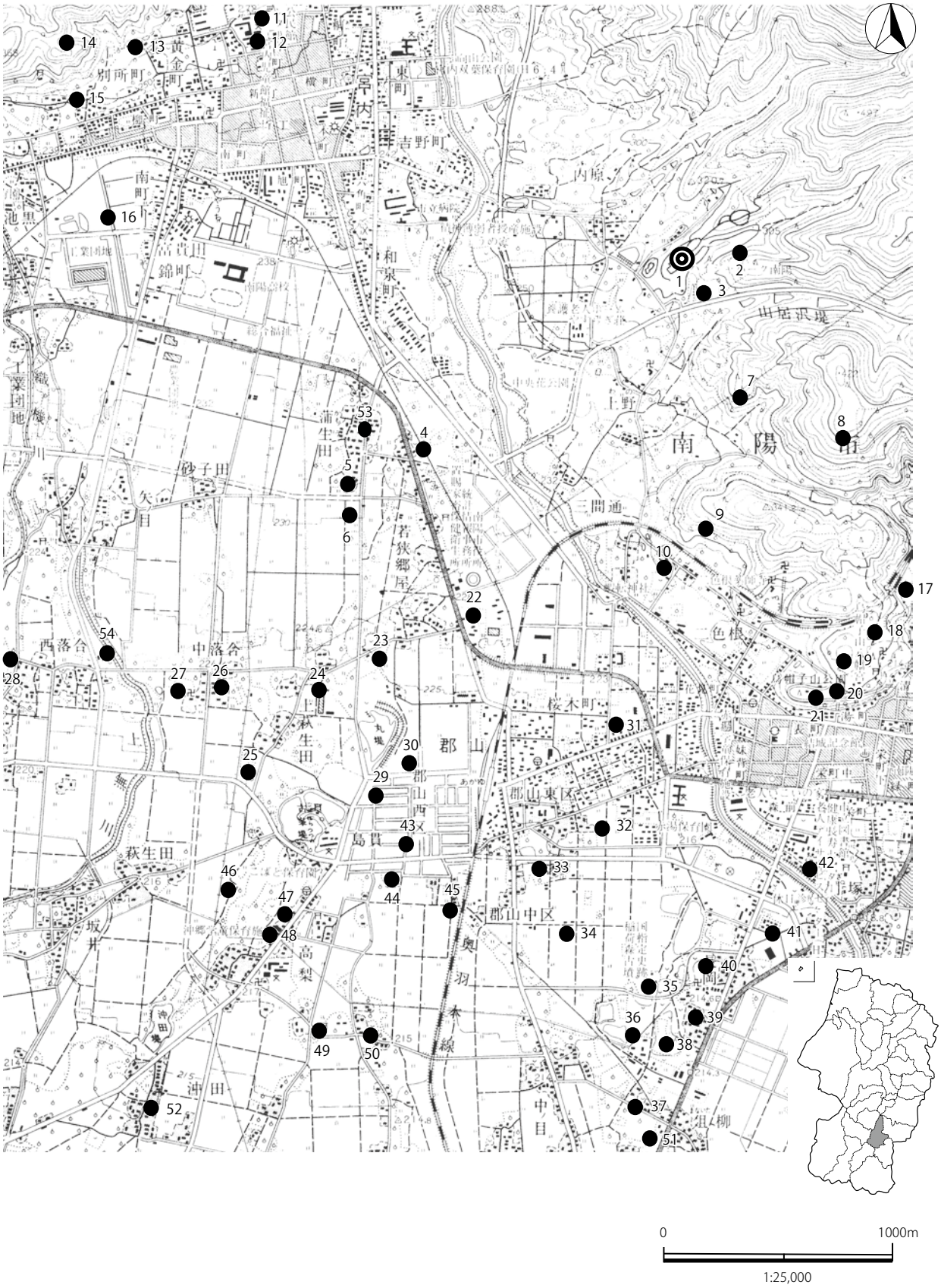
沢田遺跡のある沖郷地区郡山周辺には同時期の土器も散見され、8世紀後半には広大な条里制が敷かれ、中落合遺跡では区画施設を有する官衙風の建物群も検出されている。和銅5年(712)の出羽国建国と共に設置された置賜郡の郡衙が8世紀後半から9世紀には郡山周辺に移転された(佐藤鎭雄 2010)が、このような背景の下に二色根古墳群や狸沢山古墳群、山居沢山古墳群、蒲生田山古墳群の終末期古墳が築造されたとみえ、蒲生田山には10余基の古墳があった。現在は1号墳のみが残っている。平安時代の遺跡も市域に数多く分布し、やがて登場する北条荘のムラムラの原形ができたものとみられる。

引用・参考文献

菅井敬一郎 1990『南陽市史上巻』南陽市史編纂委員会
佐藤鎭雄　1990『南陽市史上巻』南陽市史編纂委員会
佐藤鎭雄　1987『南陽市史考古資料編』南陽市史編纂委員会
山内清男　1974「矢柄研磨器について」『日本考古学選集』21 築地書館
佐藤鎭雄・秦昭繁 2010「環大谷地遺跡群の探究」うきたむ考古第14号
佐藤庄一ほか 1990『押出遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第150集
佐藤鎭雄 2008『出羽国ができるころ』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐藤鎭雄 2010『平安初頭の南出羽考古学』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐藤鎭雄 2004「稲荷森古墳」『出羽の古墳時代』高志書院
錦 三郎 1968『赤湯町史』赤湯町史編さん委員会

表1　遺跡位置図

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	蒲生田山古墳群	古墳	古墳～奈良	28	下八ツ口	散布地	縄文
2	山居沢山A	散布地	平安	29	島貫	集落跡	古墳～平安
3	山居沢山B	散布地	平安	30	沢田	集落跡	弥生・古墳・平安
4	観音堂	散布地	奈良～平安	31	諏訪前	集落跡	縄文・古墳・平安
5	蒲生田館南	館跡	中世	32	東六角	集落跡	縄文・古墳・平安
6	当時作	散布地	縄文・奈良～平安	33	矢ノ目館	館跡	中世
7	狸山沢古墳群	古墳	奈良	34	早稲田	散布地	奈良
8	上野山古墳	古墳	奈良	35	稲荷森古墳	古墳	古墳
9	二色根古墳群	古墳	奈良	36	長岡西田	散布地	縄文
10	横沢	散布地	縄文・奈良	37	内城館	館跡	中世
11	宮内熊野大社敷地内	散布地	縄文・平安	38	長岡南森	散布地	縄文・古墳
12	宮内小学校敷地内	散布地	縄文・平安	39	長岡山東	散布地	縄文・平安
13	別所A	散布地	平安	40	長岡山	集落跡	縄文・古墳
14	別所B	散布地	縄文	41	太子堂	散布地	平安
15	別所山経塚	経塚	中世	42	椚塚館ノ山	館跡	中世
16	富貴田	集落跡	縄文・奈良	43	郡山中堀	散布地	奈良
17	北町	散布地	縄文	44	沢口	集落跡	奈良～平安
18	稲荷前	散布地	縄文	45	間々ノ上	散布地	奈良
19	上ノ山	散布地	縄文	46	大塚	古墳	古墳
20	烏帽子山経塚	経塚	中世	47	西中上	集落跡	奈良～平安
21	烏帽子山古墳	古墳	奈良	48	将監屋敷	散布地	奈良平安
22	唐越	散布地	奈良～平安	49	前小屋	散布地	縄文
23	西田	散布地	平安	50	百刈田	集落跡	縄・弥・古・奈～平
24	萩生田	集落跡	奈良～平安	51	鵜の木館	館跡	中世
25	梅ノ木	散布地	奈良～平安	52	沖田館	館跡	中世
26	中落合館	館跡	中世	53	蒲生田館	館跡	中世
27	中落合	集落跡	奈良～平安	54	檜原	集落跡	奈・平・中世



第１図　遺跡位置図（国土地理院発行２万５千分の１地形図「赤湯」使用）

Ⅲ　遺跡の概要

1　基本層序

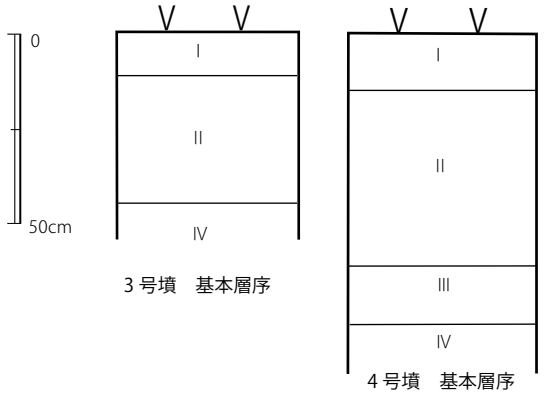
本調査に先行して行われた試掘において基本層序を記録した。

蒲生田山古墳群は蒲生田山丘陵上にあり、調査区内は葡萄畑などに使用されていたために、削平・かく乱が顕著である。地表から地山面まで 30 ～ 60 ㎝ほどである。Ⅰ層は耕作土の表土、Ⅱ層は耕作のための整地層、Ⅳ層が地山層である。Ⅲ層は古墳築造後の崩落土または風化土で、近代の開墾前に堆積した自然堆積土層とみられる。Ⅲ層についてはトレンチにより確認の有無があり、これはおそらく開墾の際に削平された影響であろう。

2　検出遺構

発掘調査を行った結果、調査区内から 3 号墳と 4 号墳の 2 基の前方後方墳を確認した。また調査区外に位置する 2 号墳についてもトレンチ調査及び地形図記録を行った。なお 1 号墳については今回の調査以前にすでに地形図および石室の調査記録が行われている。[註 1）]

当初、3 号墳は隣接しあう円墳と方墳の 2 基と考えられていたため「3 号墳」「4 号墳」、そして 4 号墳を「5 号墳」と称していたが、本調査終了後 3 号墳、4 号墳へ改称した。



3 号墳　基本層序
Ⅰ　表土（耕作土）
Ⅱ　10YR3/2 黒褐色砂質粘土（整地層）
Ⅳ　10YR6/6 明黄褐色粘土（地山）

4 号墳　基本層序
Ⅰ　表土（耕作土）
Ⅱ　10YR3/4 暗黄褐色砂質粘土 (整地層)
Ⅲ　5YR54/6 赤褐色砂質粘土
Ⅳ　5YR5/8 赤褐色粘土 (地山)

第 2 図　基本層序

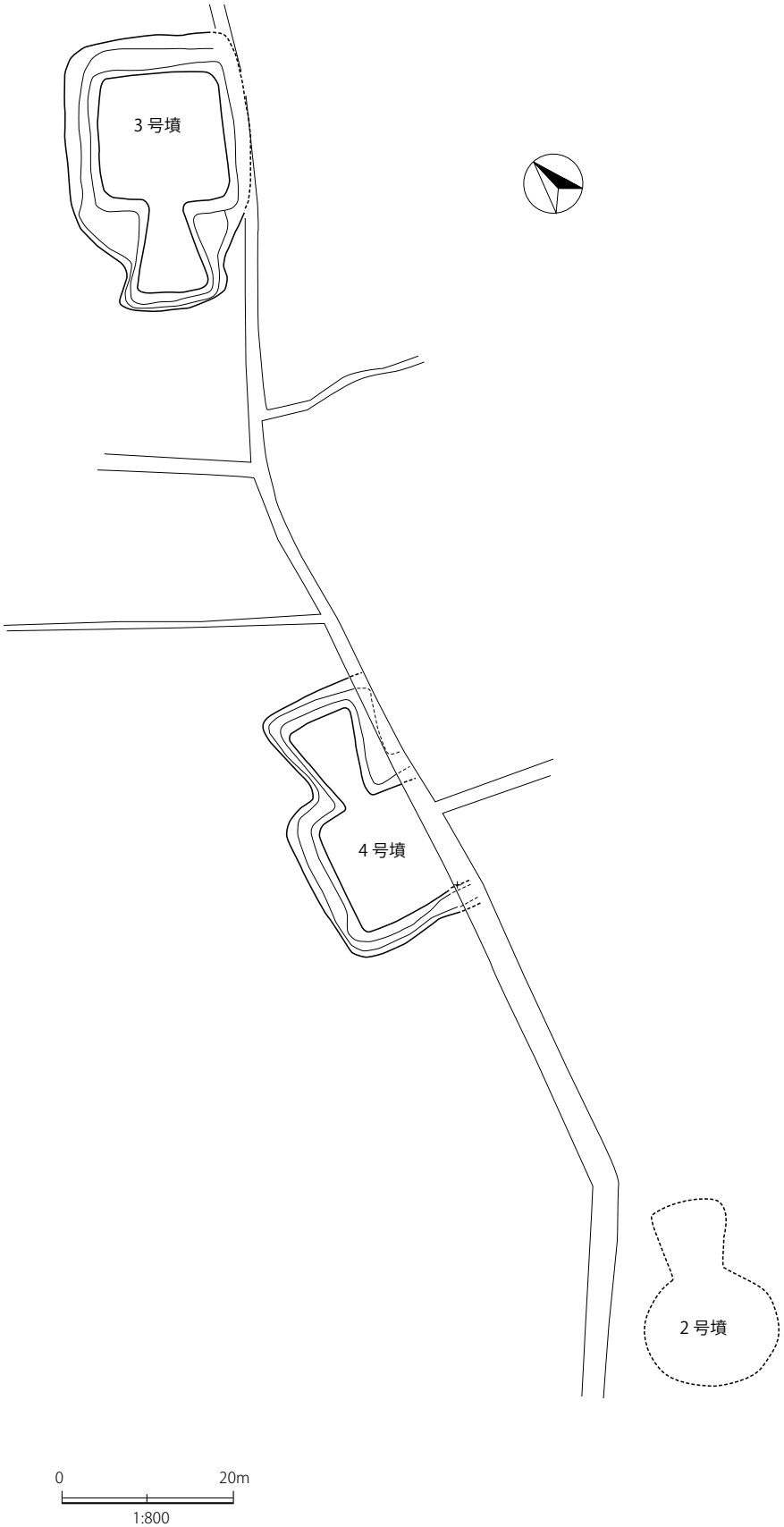
3 号墳（第 4 図～第 10 図）

試掘段階まで 3 号墳は円墳と方墳の 2 基と認識されていたものの、本調査により 1 基の前方後方墳であることが確認された。

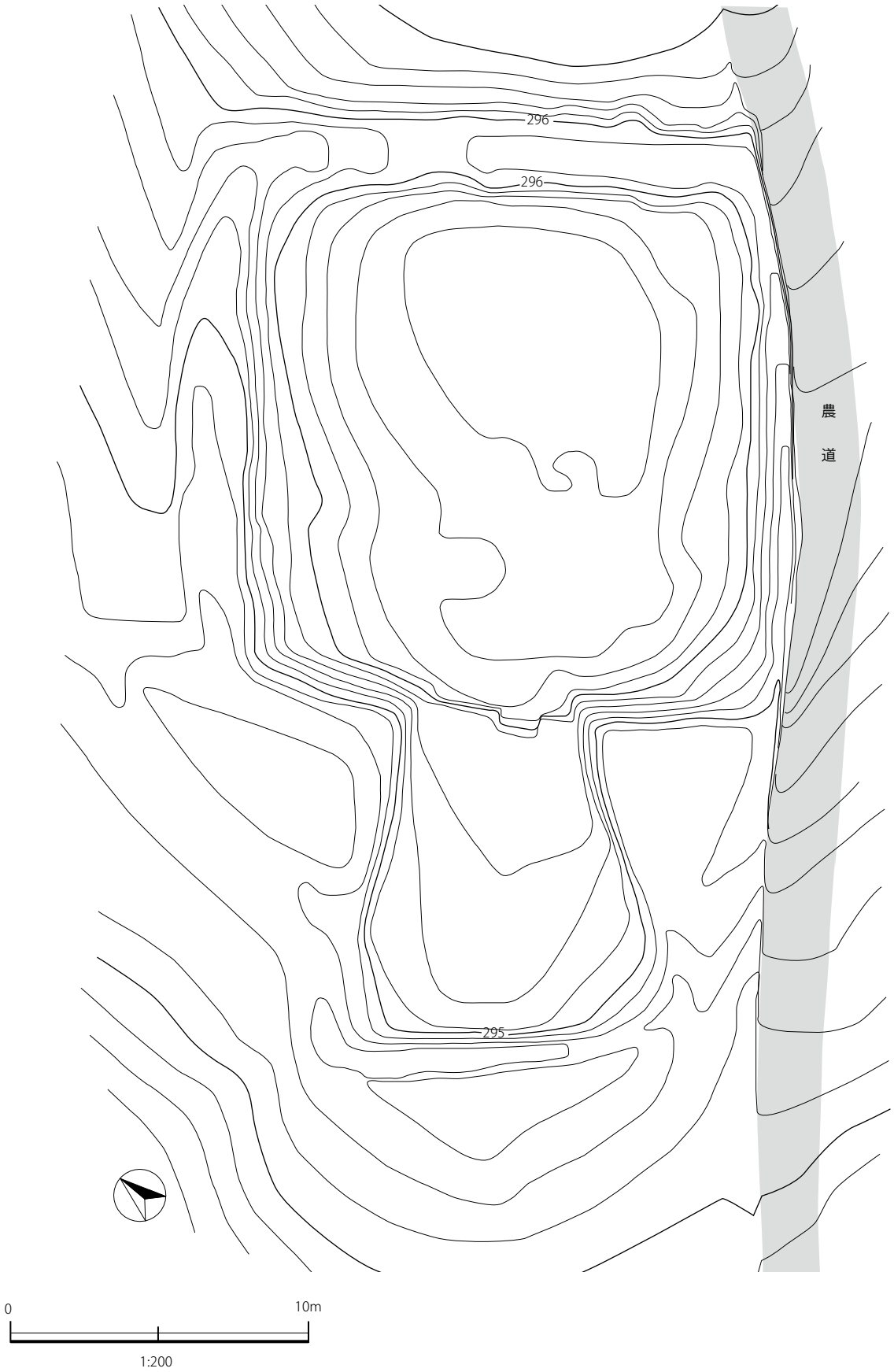
3 号墳は蒲生田山の尾根筋、標高約 295 mの位置に存在する。墳丘基底部は全長 28.8 m、前方部長さ 11.2 m幅 10.1 m、後方部長さ 17.6 m幅約 17.2 m、前方部：後方部の長さの比率は 38.8：61.2 である。前方部を山麓方向南西に向け、主軸方位はＮ - 120° - Wを向く。墳丘のプランについて後方部はほぼ正方形、前方部は角がやや北東方向へ広がる台形である。周壕は墳丘を全周していることが確認された。上端幅は 1.1 ～ 6.0 m、下端幅 0.5 ～ 5.0 m、深さ 0.4 ～ 1.4 m。周壕は均一のつくりではなく、くびれ部分が最も広がりを見せる。それに対し前方部前辺は細くなり、前方部南角については非常に壕が浅くなり目立たなくなる。この浅い部分に関してはブリッジの可能性も考えられる。また、後方部を囲む溝の上端幅が平均して 3 m程度であるのに対し、前方部付近は 1 m強程度である。壕の形状について、後方部分に関しては深い逆台形を呈し底面は比較的平坦であるのに比べ、前方部は緩やかな弧状であり浅い。壕の覆土について、開墾時以前の埋土層は地山土起源の細砂によるレンズ状の緩やかな自然堆積とみられる。

墳丘の高さは、地山から計測して、前方部は 0.7 m、後方部で 1.2 m、盛土層が著しく削平されていた。元地権者の証言によると「葡萄畑開墾時に 5 尺（約 1.5 m）まで人力で掘削、整地した」ということから、墳丘はこの調査時にはすでに消失していたものと思われる。

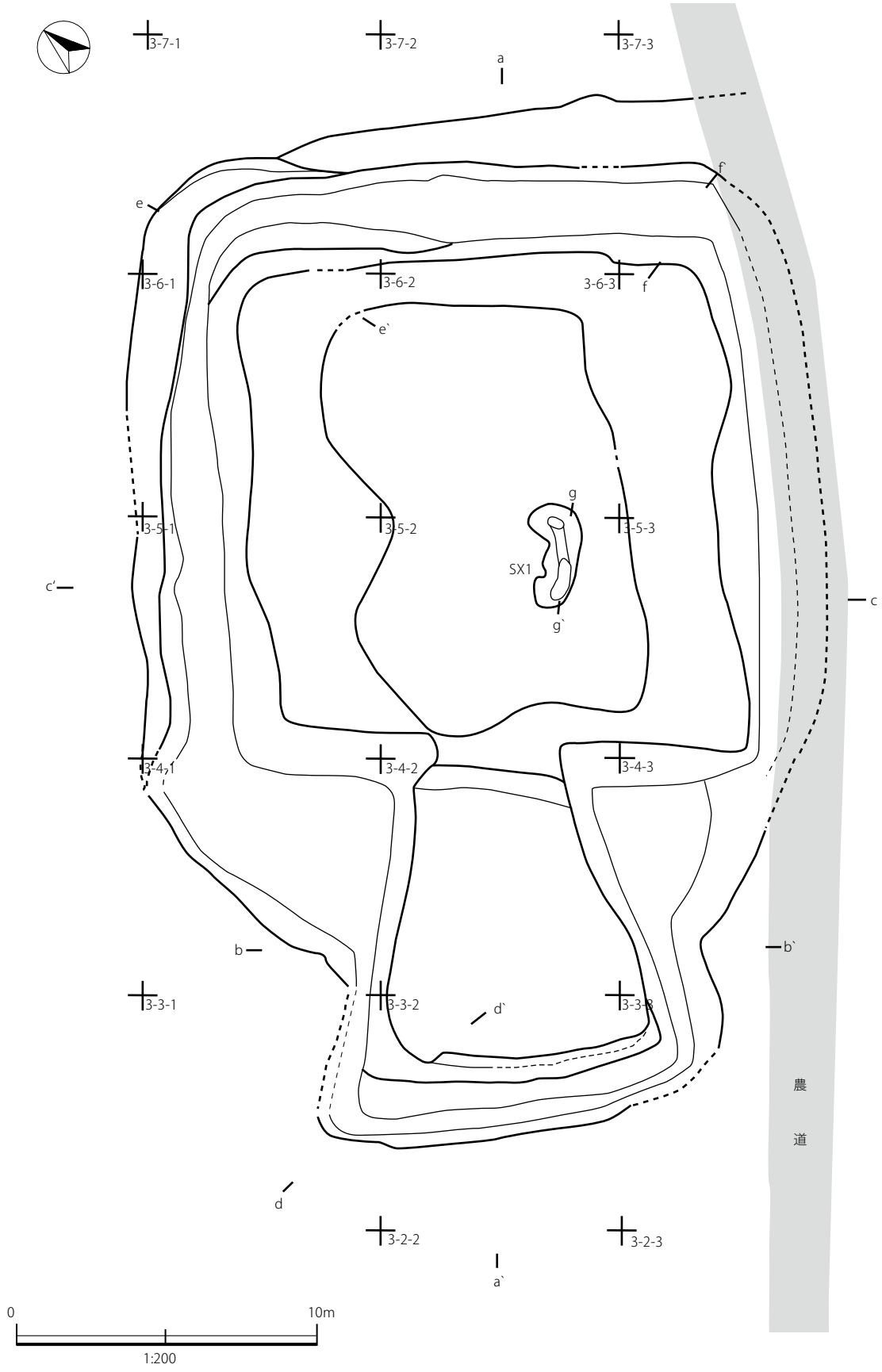
遺物は南西側の周壕内くびれ部分に遺物が集中し、特に土師器の底部穿孔壺底部と、土師器壺または底部穿孔壺口縁部分が目立つ。そして前方部周壕からの出土がそ



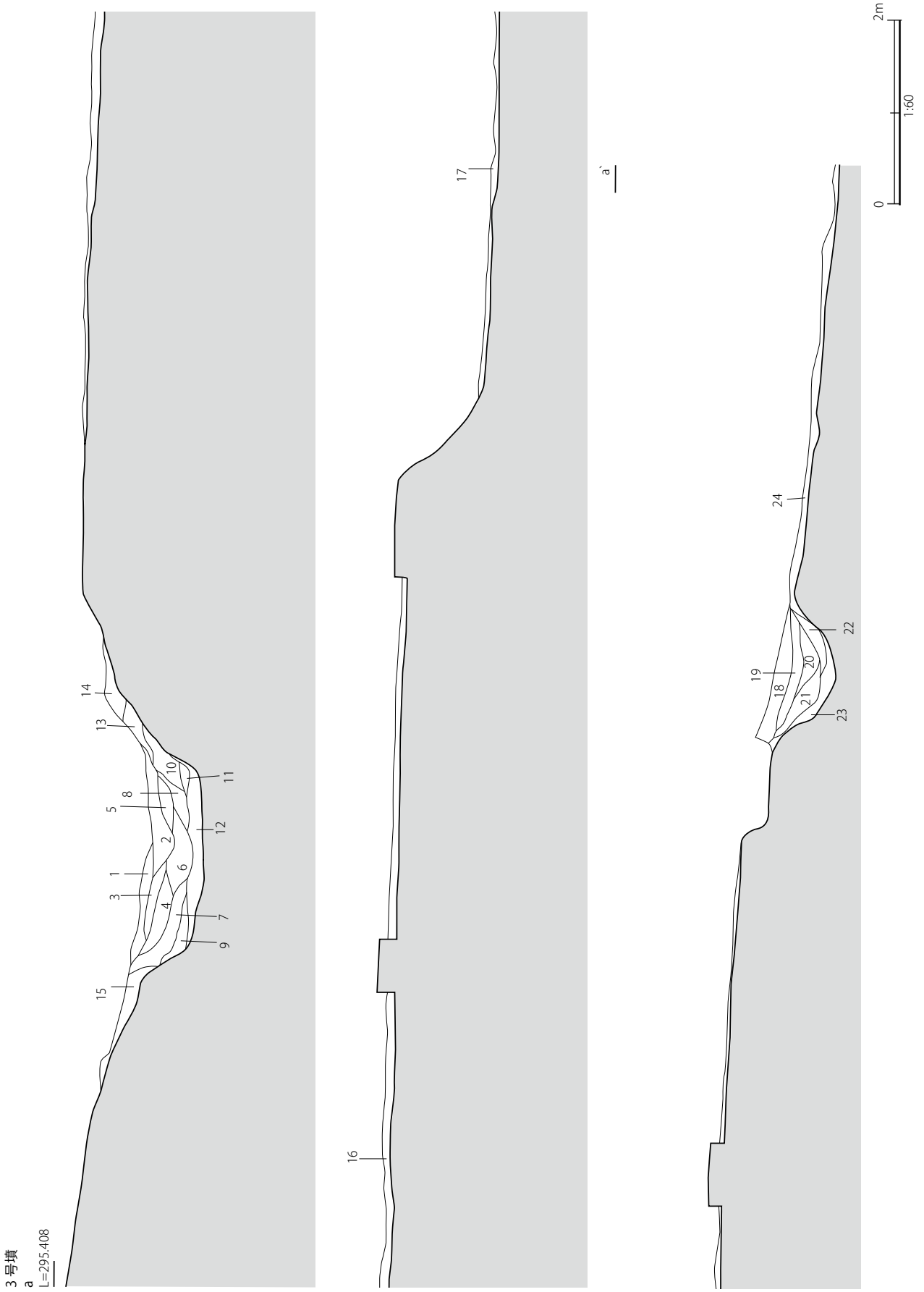
第 3 図　蒲生田山古墳群 2 号墳・3 号墳・4 号墳配置図



第 4 図　3 号墳地形図


3-7-1
3-7-2
3-7-3
a
f`
e
3-6-1
3-6-2
3-6-3
f
e`
g
3-5-1
3-5-2
3-5-3
SX1
g`
c`
c
3-4-1
3-4-2
3-4-3
b
b`
3-3-1
3-3-2
d`
3-3-3
農
道
d
3-2-2
3-2-3
a`
0
10m
1:200

第 5 図　3 号墳平面図

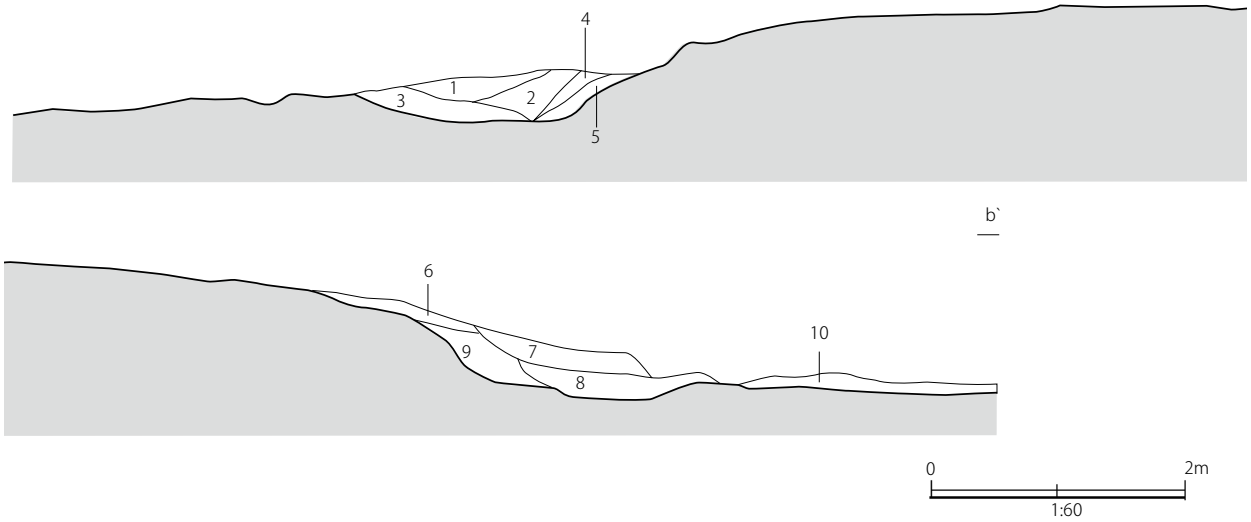

3号墳
a
L=295.408
a'
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
0
1:60
2m

第 6 図　3 号墳断面図 (1)

3 号墳
a-a`

1	10YR5/8 黄褐色粘土	細砂混入
2	10YR4/4 褐色粘土	小礫、細砂混入
3	10YR4/4 褐色色粘土	細砂混入
4	10YR5/6 黄褐色粘土	細砂混入
5	10YR4/6 褐色粘土	小礫、細砂混入
6	10YR5/6 黄褐色粘土	細砂混入
7	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
8	10YR5/6 黄褐色粘土	細砂混入
9	10YR5/8 黄褐色粘土	細砂混入
10	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
11	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
12	10YR6/6 明黄褐色粘土	細砂混入
13	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
14	7.5YR5/6 明褐色粘土	小礫、細砂混入
15	10YR6/6 明黄褐色粘土	細砂混入
16	7.5YR5/8 明褐色粘土	細砂混入
17	7.5 YR5/8 明褐色粘土	10YR7/6 明黄褐色粘土まだらに混入 細砂混入
18	7.5 YR5/8 明褐色粘土	小礫、細砂混入
19	7.5YR5/8 明褐色粘土	細砂混入
20	10YR5/6 黄褐色粘土	細砂混入
21	7.5 YR5/8 明褐色粘土	小礫、細砂混入
22	7.5YR5/8 明褐色粘土	細砂混入
23	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
24	7.5YR6/8 橙色粘土	小礫、細砂混入

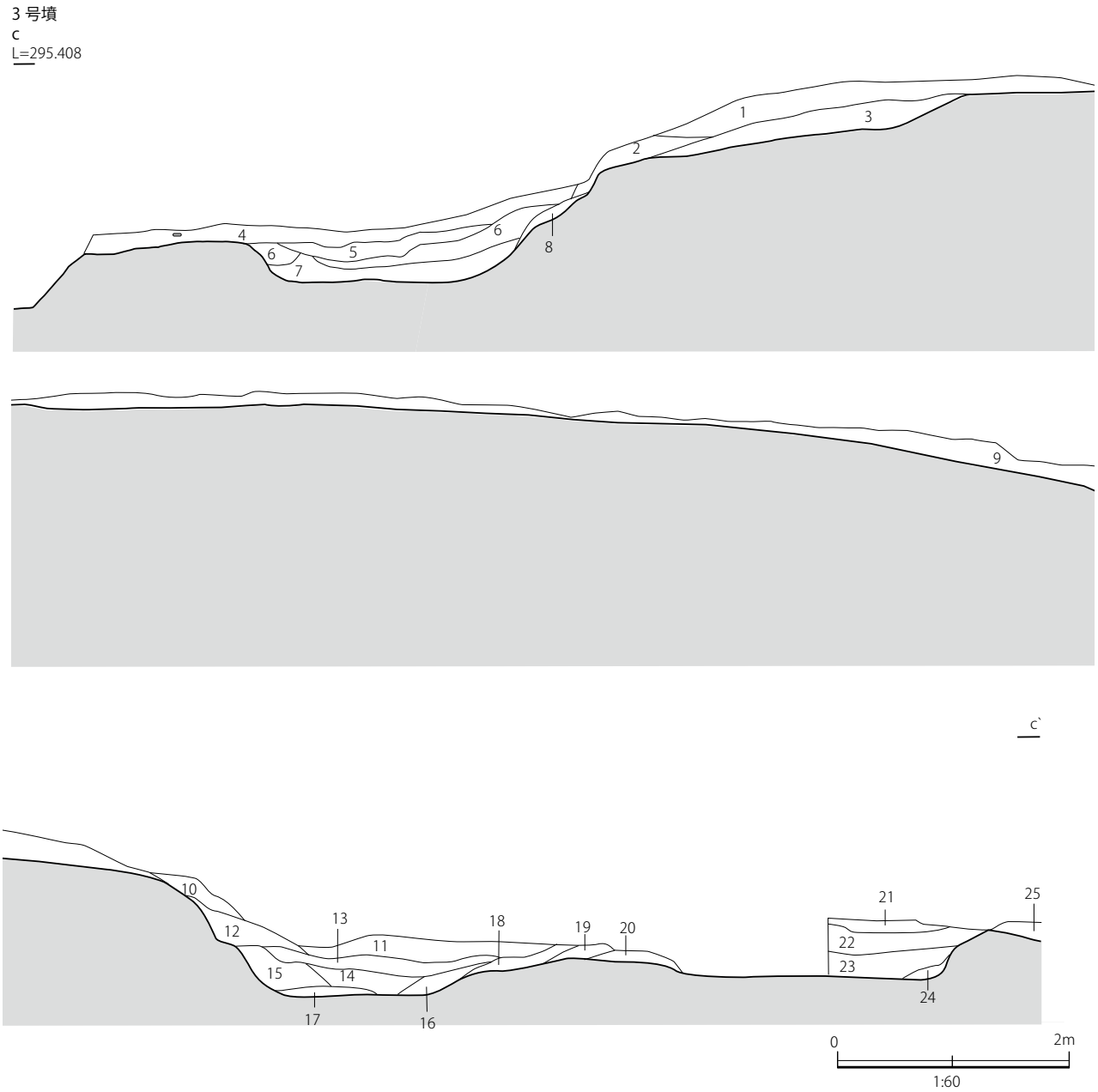
3 号墳
b
L=295.313



3 号墳
b-b`

1	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
2	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
3	10YR5/4 にぶい黄褐色	細砂混入 黒色土混入
4	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
5	7.5YR5/8 明褐色粘土	細砂混入
6	7.5YR5/8 明褐色粘土	細砂混入
7	7.5YR5/8 明褐色粘土	細砂混入
8	10YR4/6 褐色粘土	細砂混入
9	7.5YR5/6 明褐色粘土	細砂混入
10	7.5YR5/8 明褐色粘土	細砂混入

第 7 図　3 号墳断面図（2）

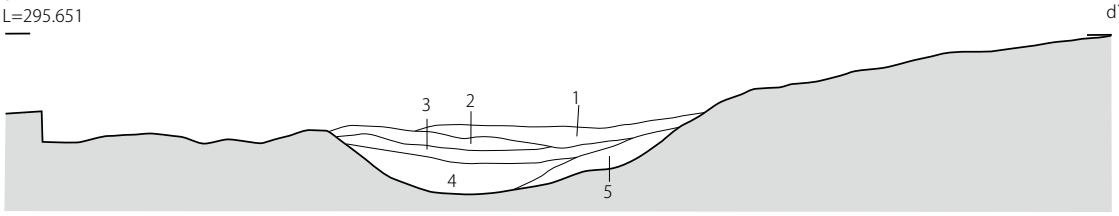


3 号墳
c － c‘

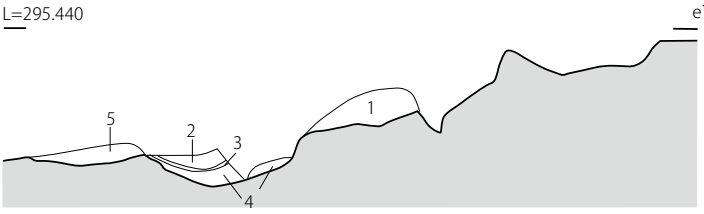
1　10YR5/6 黄褐色粘土　細砂混入
2　7.5YR5/6 明褐色粘土　細砂混入
3　7.5YR5/8 明褐色粘土　細砂混入
4　10YR4/6 褐色粘土　細砂混入
5　10YR3/3 暗褐色粘土　細砂混入
6　10YR8/6 黄橙色粘土　細砂混入
7　10YR5/8 黄褐色粘土　細砂混入
8　10YR8/6 黄橙色粘土　細砂混入
9　10YR5/6 黄褐色細砂　礫混入
10　7.5YR5/6 明褐色粘土　細砂混入
11　10YR5/6 黄褐色粘土　細砂混入
12　10YR4/6 褐色細砂　緑色土微量混入
13　10YR4/6 褐色細砂　赤色土微量混入
14　10YR4/3 にぶい黄褐色　小礫、細砂多量混入
15　10YR5/6 黄褐色粘土　細砂混入
16　10YR4/6 褐色粘土　細砂混入
17　10YR5/8 黄褐色粘土　細砂混入　礫多量混入
18　10YR4/6 褐色粘土　細砂混入　緑色土微量混入
19　10YR5/6 黄褐色粘土　細砂混入
20　10YR5/8 黄褐色粘土　細砂混入
21　2.5YR6/4 にぶい橙色粘土　細砂混入
22　2.5YR3/1 暗赤灰色粘土　細砂混入
23　10YR5/6 黄褐色粘土　細砂混入
24　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫、10YR5/6 黄褐色粘土 細砂混入
25　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 10YR5/6 黄褐色粘土　細砂混入

第 8 図　3 号墳断面図 (3)

3 号墳
d
L=295.651



3 号墳
e
L=295.440



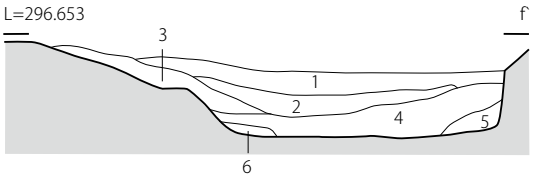
3 号墳
d-d`

1	10YR4/3 にぶい黄褐色粘土	中砂混入
2	10YR5/4 にぶい黄褐色粘土	中砂混入
3	10YR4/6 褐色粘土	中砂混入
4	10YR4/4 明黄褐色粘土	中砂混入
5	10YR5/6 黄褐色粘土	中砂混入

3 号墳
e-e`

1	7.5YR5/8 明赤褐色粘土	細砂混入
2	10YR4/6 褐色粘土	細砂混入
3	10YR6/6 明黄褐色粘土	細砂混入
4	7.5YR5/6 黄褐色粘土	細砂混入
5	7.5YR5/8 明褐色粘土	細砂混入

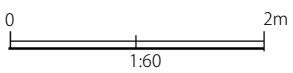
3 号墳
f
L=296.653



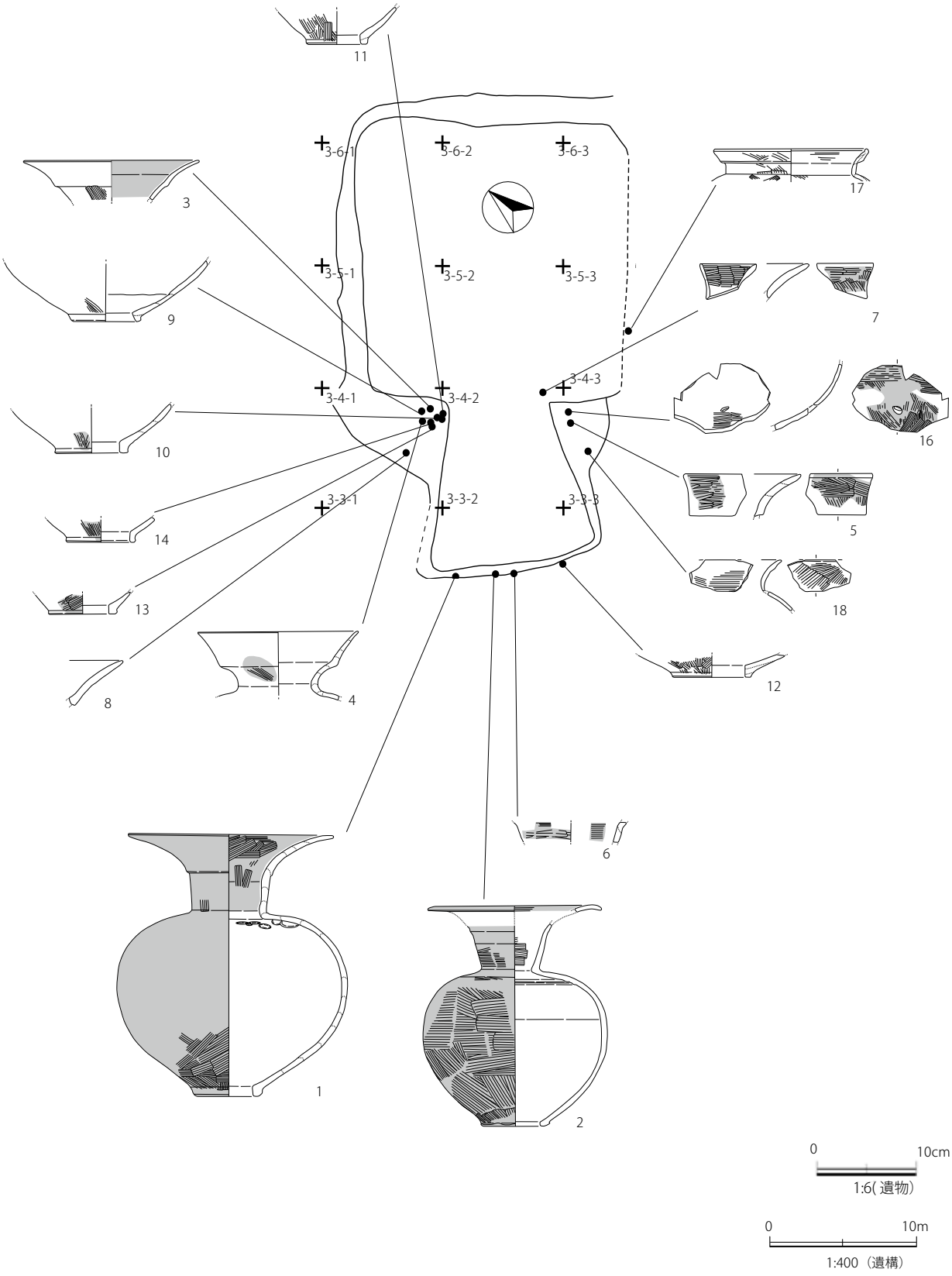
3 号墳
f-f`

1	10YR5/6 黄褐色粘土	細砂混入
2	10YR4/4 褐色色粘土	細砂混入
3	10YR6/6 明黄褐色粘土	細砂混入
4	10YR6/6 明黄褐色粘土	10YR4/4 褐色粘土混入　細砂混入
5	10YR6/6 明黄褐色粘土	細砂混入　粘性強い
6	10YR7/6 明黄褐色粘土	細砂混入 約 5 ㎝大の礫混入

3 号墳　SX1
g
L=296.805



第 9 図　3 号墳断面図 (4)



第 10 図　3 号墳遺物分布図

のほとんどである。

ＳＸ１は３号墳後方部やや南寄りにある浅い不整形の土坑である。遺構の底にごくわずかな粘土層が堆積していた。しかし位置的に主体部付近に存在することから、墓坑の可能性も考えられる。遺物の出土はなかった。

４号墳 （第 11 図～第 16 図）

４号墳は蒲生田山尾根筋の標高 287 m、３号墳とは直線距離にして約 48 m南側、山の下手に位置する。墳丘基底部は全長 29.0 m、前方部長さ 11.5 m幅 11.0 m、後方部長さ 17.5 m幅 16.8 m、前方部：後方部の長さの比率は 39.6：60.4 である。前方部を山頂方向北に向け、主軸方位は N - 32° - E を向く。墳丘のプランについて、後方部はほぼ正方形、前方部は角がやや北西方向へ広がる台形を呈している。農道下の追加発掘調査の結果と合わせると、周壕は前方部については全周しているものの後方部では東側崖面で断絶している。おそらく周壕を掘らずに崖面を利用したと思われる。周壕のプランは３号墳とは違い墳丘に沿った形状で形成している。上端幅は 1.2 ～ 4.5 m、下端幅 0.5 ～ 4.5 m、深さ 0.4 ～ 1.2 m、やはり壕は後方部で広がりをみせるものの前方部前辺が細くなる。また後方墳の壕の形状について後方部分に関しては３号墳と同様底面は比較的平坦であるのに比べ前方部は緩弧状であり浅い。壕の覆土は、開墾時以前の埋土層は地山土起源の粘土によるレンズ状の緩やかな自然堆積とみられる。

墳丘については、３号墳と同様調査時はすでに葡萄栽培のための開墾削平と支柱埋設による著しいかく乱を受け、周壕内外の高低差はほぼない。しかし、３号墳と同様に４号墳にも墳丘は存在したものと思われる。

４号墳の特筆すべき点として、西側くびれ部周壕内の高まりに土坑があり、その中央に土師器壺第 20 図 19 が配置されているのが確認されている（第 16 図　土師器壺出土状況図）。また後方部西側から土師器底部穿孔壺破片などが多く出土している。

２号墳（第 17 図）

現状保存とされたため、10 m× 1 mのトレンチ１ヶ所による確認調査と地形調査を行った。

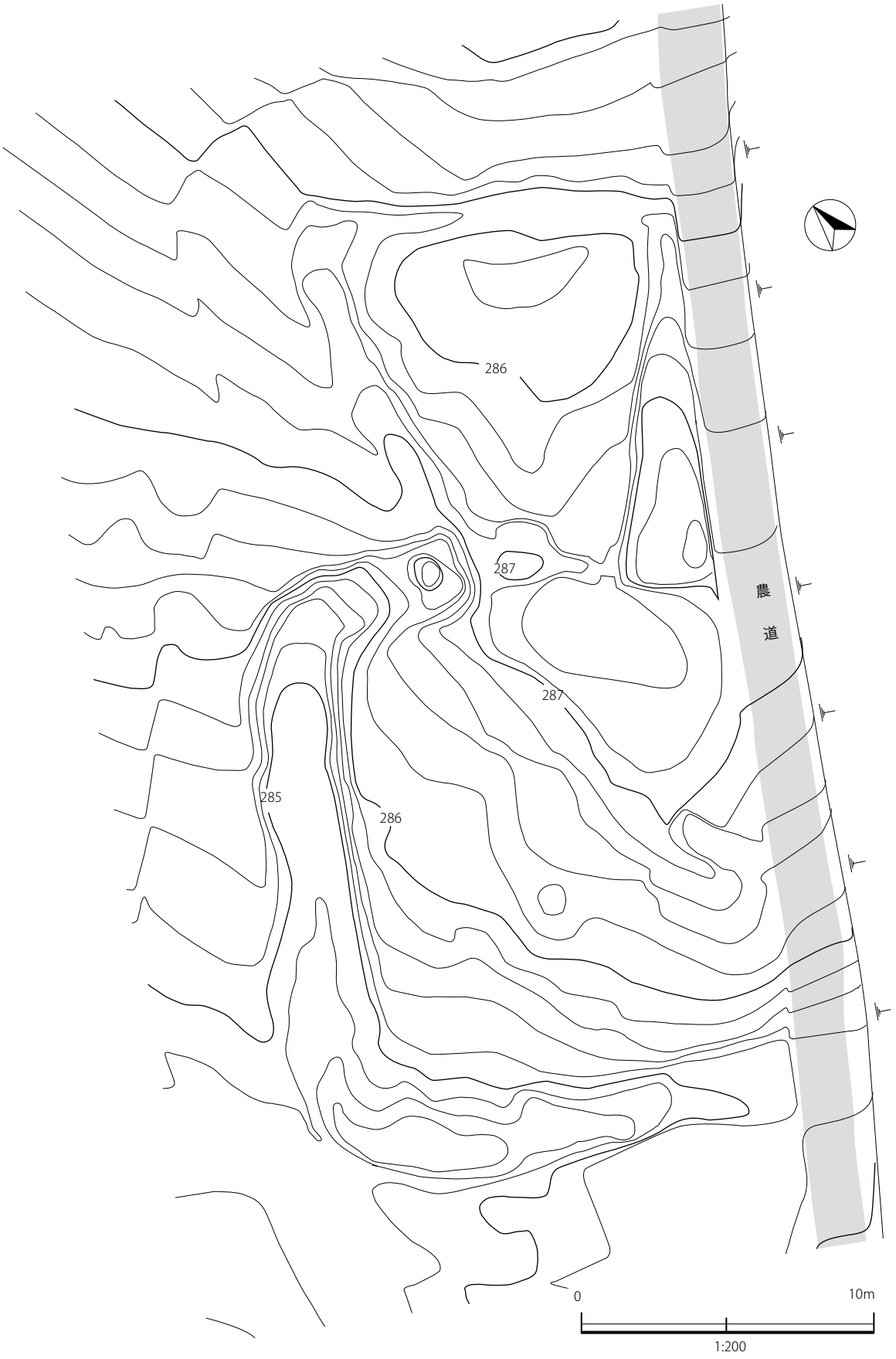
２号墳は蒲生田山の尾根標高 280 m、４号墳から直線距離にして約 40 m南方向の位置に現存し、その墳頂付近に山ノ神神社の祠などの石塔が数基安置されている。全長 27.0 m、前方部長さ 10.4 m幅 9.5 m、後方部長さ 16.6 m幅 16.2 mの前方後円墳とみられるが、著しく改変等を受けている痕跡があり、その形状は不明確な部分も多い。主軸方位は N - 46° - E を向く。

周壕について、トレンチ調査により墳丘北西側前方部端に並行する幅 1.1 m、深さ 0.08 ～ 0.1 mのごく浅い弧状の溝が確認された。覆土は地山からの自然堆積で、遺物は出土しなかったが、２号墳の周壕の一部とみられる。また地形図より墳丘西側に溝状の地形がみられることから墳丘北西から西にかけて周壕は存在し、東側に関しては崖に面していることから周壕は存在しなかった模様である。なおこの調査では、遺物は出土しなかった。

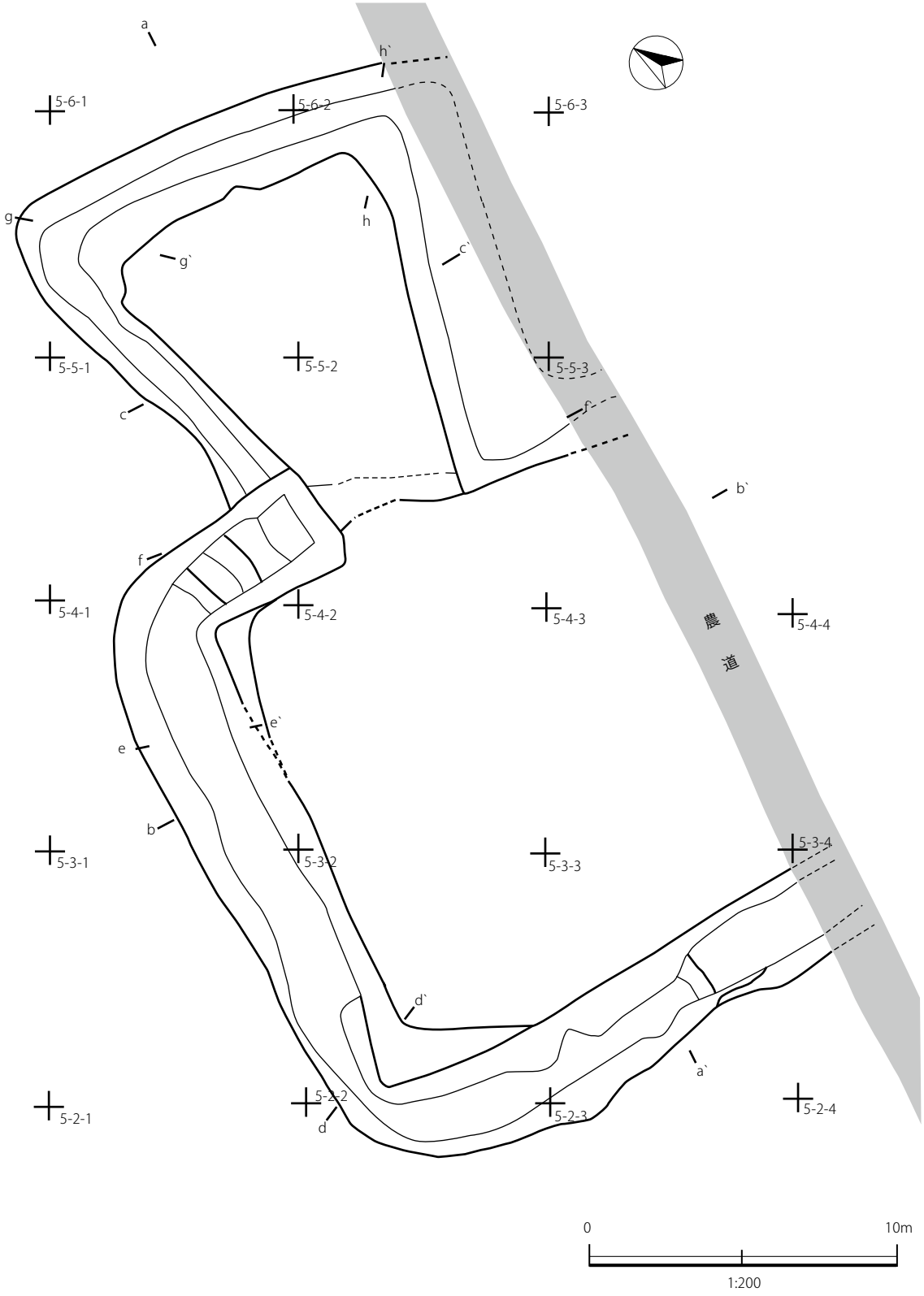
１号墳（第 18 図）

調査区外に現存する古墳で「エゾ穴」と呼ばれていた。３号墳から北東方向に約 40 m、標高 287 mに位置する。長径 8.4 m短径８m、高さ３mの山寄せ式円墳である。横穴式石室を主体部とし、石室は長さ 200 ㎝、幅 117 ㎝、高さ 155 ㎝、石材は凝灰岩を使用、奥壁は大割石の２段積み、側壁は平割石を積み上げている。古墳終末期、８世紀代の古墳である（佐藤ほか 1987）。現在は南陽市指定文化財として現状保存されている。

１号墳



第 11 図　4 号墳地形図

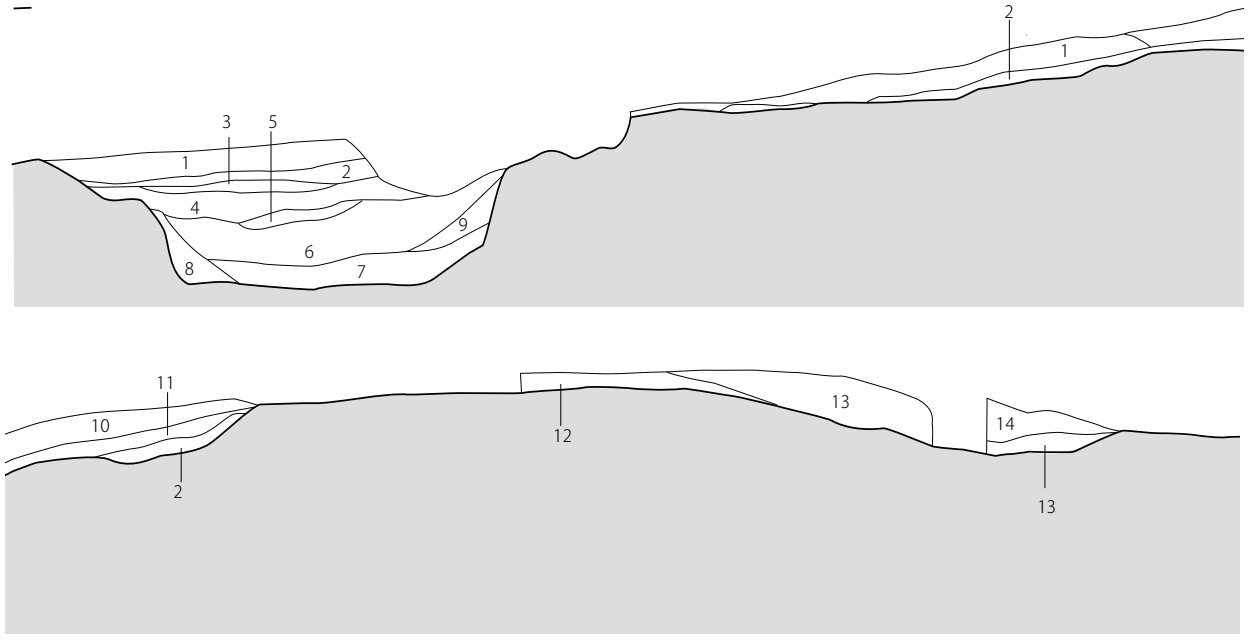

a
h`
5-6-1
5-6-2
5-6-3
g
h
g`
c`
5-5-1
5-5-2
5-5-3
c
f`
b`
f
5-4-1
5-4-2
5-4-3
5-4-4
農
道
e`
e
b
5-3-1
5-3-2
5-3-3
5-3-4
d`
a`
5-2-1
5-2-2
5-2-3
5-2-4
d
0
10m
1:200

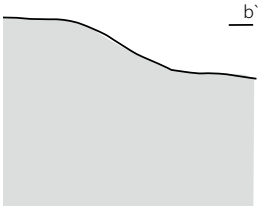
第 12 図　4 号墳平面図

第 13 図　4 号墳断面図（1）

4 号墳
a-a`
1　10YR5/4 にぶい黄褐色中砂　粘土混入
2　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫多量混入　中砂混入
3　10YR5/6 黄褐色粘土　中砂混入　礫少量混入
4　7.5YR5/8 明褐色粘土　礫混入　中砂混入
5　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫少量混入　中砂混入
6　7.5YR4/4 褐色粘土　中砂混入
7　7.5YR4/6 褐色粘土　中砂混入
8　10YR4/4 褐色粘土　中砂混入
9　7.5YR5/8 明褐色粘土　小礫混入　中砂混入
10　7.5YR5/8 明褐色粘土　礫多量混入　中砂混入
11　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫多量混入　細砂混入
12　7.5YR5/8 明褐色粘土　中砂混入
13　7.5YR4/8 明褐色粘土　礫混入　中砂混入

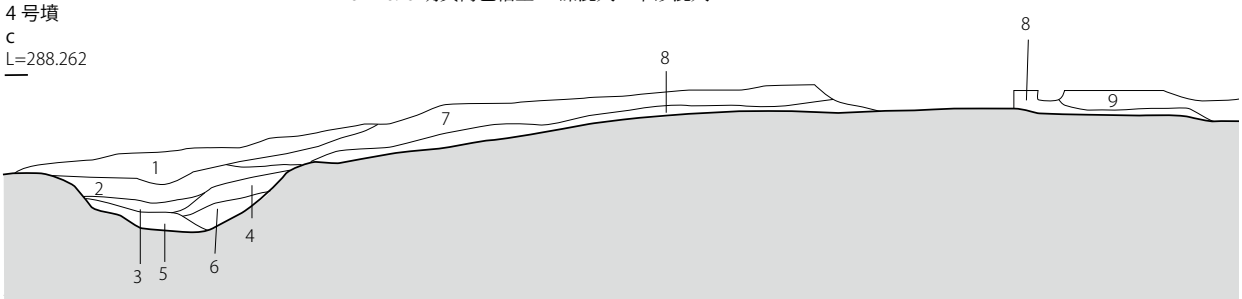
4 号墳
b
L=287.255

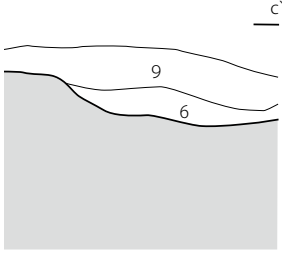




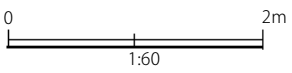
4 号墳
b-b`
1　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
2　10YR4/6 褐色粘土　中砂混入
3　10YR5/6 黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
4　10YR4/4 褐色粘土　中砂混入
5　10YR5/8 黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
6　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
7　10YR6/8 明黄褐色中砂　粘土混入
8　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫混入　中砂混入
9　7.5YR8/6 明褐色粘土　礫混入　中砂混入
10　10YR4/6 褐色中砂　粘土混入　礫多量混入
11　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫混入　中砂混入
12　10YR4/6 褐色中砂　粘土混入
13　10YR5/6 黄褐色中砂　礫混入　粘土混入
14　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫混入　中砂混入

4 号墳
c
L=288.262



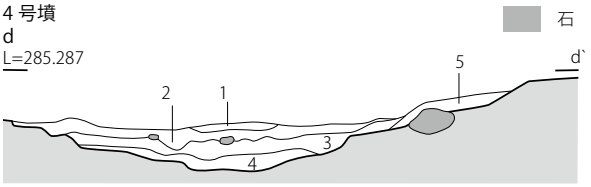


4 号墳
c-c`
1　10YR5/6 黄褐色粘土　礫混入　細砂混入
2　10YR6/8 黄褐色粘土　礫混入　細砂混入
3　10YR5/6 黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
4　10YR5/8 黄褐色粘土　礫多量混入　中砂混入
5　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
6　10YR5/6 明黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
7　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫混入　細砂混入
8　10YR5/8 黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
9　7.5YR5/8 明褐色粘土　小礫混入　中砂混入



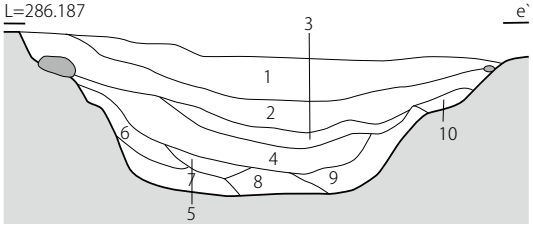
第 14 図　4 号墳断面図（2）

4 号墳
d
L=285.287



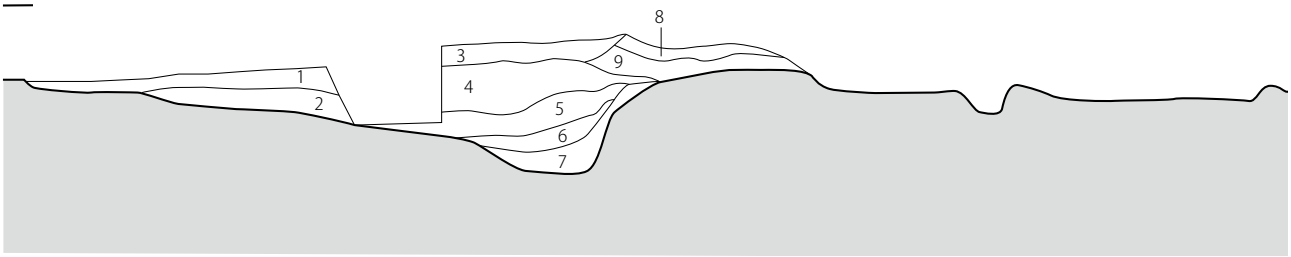
4 号墳
d-d`
1　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土　中砂混入
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土　中砂混入
3　10YR6/4 にぶい黄橙色中砂　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土混入
4　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
5　7.5YR5/8 明褐色中砂　粘土混入

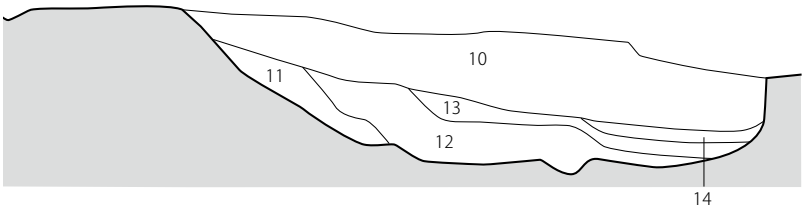
4 号墳
e
L=286.187



4 号墳
e-e`
1　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
2　10YR4/4 褐色粘土　礫混入　中砂混入
3　10YR5/8 黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
4　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
5　10YR4/6 褐色中砂　粘土混入　礫混入
6　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫混入　中砂多量混入
7　7.5YR5/8 明褐色粘土　礫混入　中砂混入
8　10YR6/6 明黄褐色粘土　中砂混入
9　7.5YR5/8 明褐色粘土　大きめの礫混入　中砂混入
10　10YR5/8 黄褐色粘土　礫多量混入　中砂混入

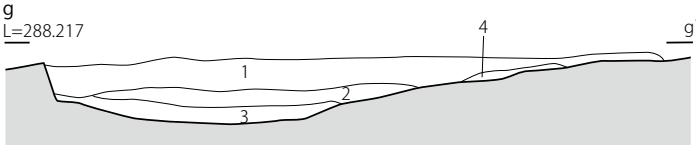
4 号墳
f
L=285.687





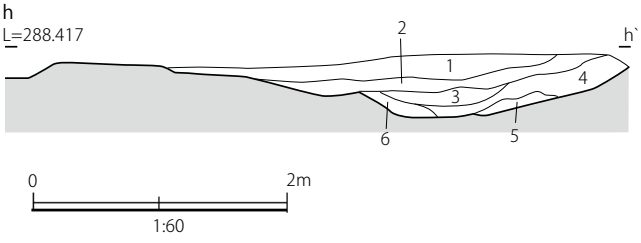
4 号墳
f-f`
1　10YR4/6 褐色中砂　粘土混入　礫混入
2　10YR5/6 黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
3　7.5YR5/6 明褐色粘土　中砂混入
4　10YR5/6 黄褐色粘土　中砂混入
5　10YR5/6 黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
6　10YR5/6 黄褐色粘土　礫多量混入　中砂混入
7　10YR7/6 明黄褐色粘土　細砂混入
8　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫多量混入　中砂混入
9　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫混入　中砂混入
10　10YR5/6 黄褐色粘土　礫混入　中砂混入
11　10YR5/6 黄褐色粘土　中砂混入
12　10YR5/6 黄褐色粘土　礫微量混入　中砂混入
13　7.5YR5/8 明褐色粘土　礫混入　中砂混入

4 号墳
g
L=288.217



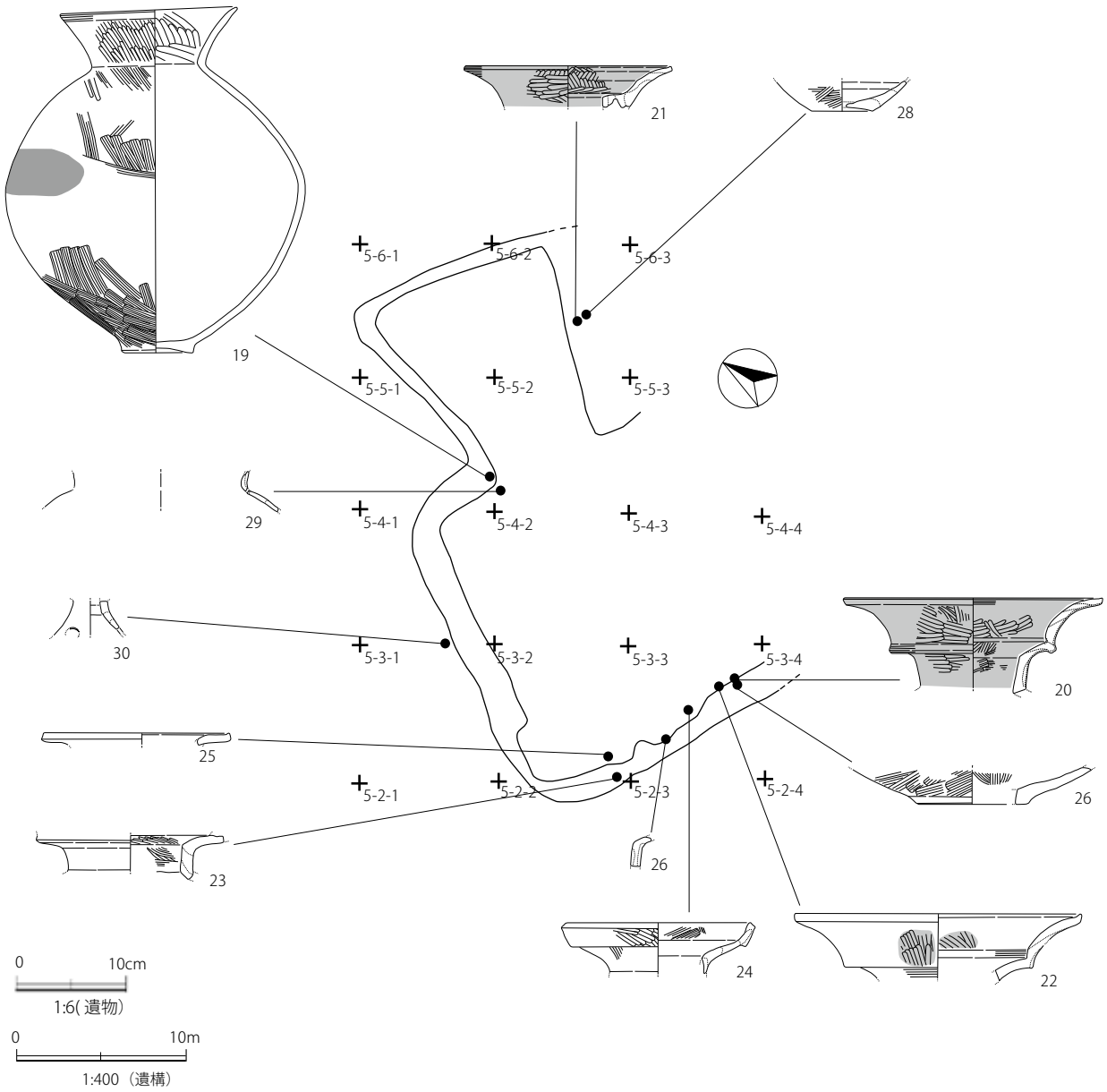
4 号墳
g-g`
1　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土　中砂混入
2　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土　中砂混入　軟らかい
3　10YR6/4 にぶい黄橙色粘土　中砂混入
4　7.5YR4/4 褐色色粘土　中砂混入

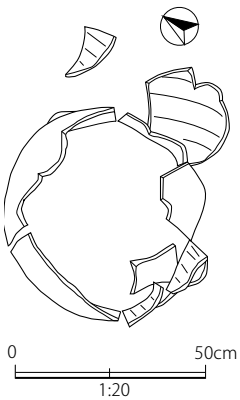
4 号墳
h
L=288.417



4 号墳
h － h`
1　10YR4/6 褐色中砂　粘土混入　礫混入
2　10YR4/4 褐色色粘土　礫混入　中砂混入
3　10YR5/6 黄褐色粘土　10YR4/4 褐色色粘土、礫、中砂混入
4　10YR6/6 明黄褐色粘土　礫混入、中砂混入
5　7.5YR5/6 明褐色粘土　礫多量混入　中砂混入

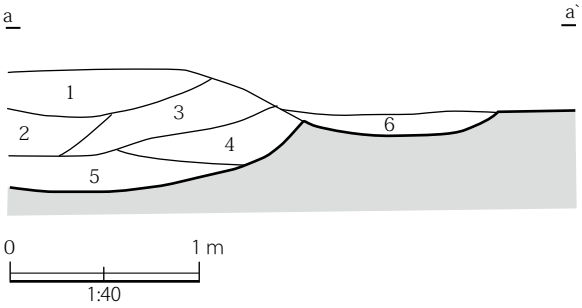
第 15 図　4 号墳断面図（3）





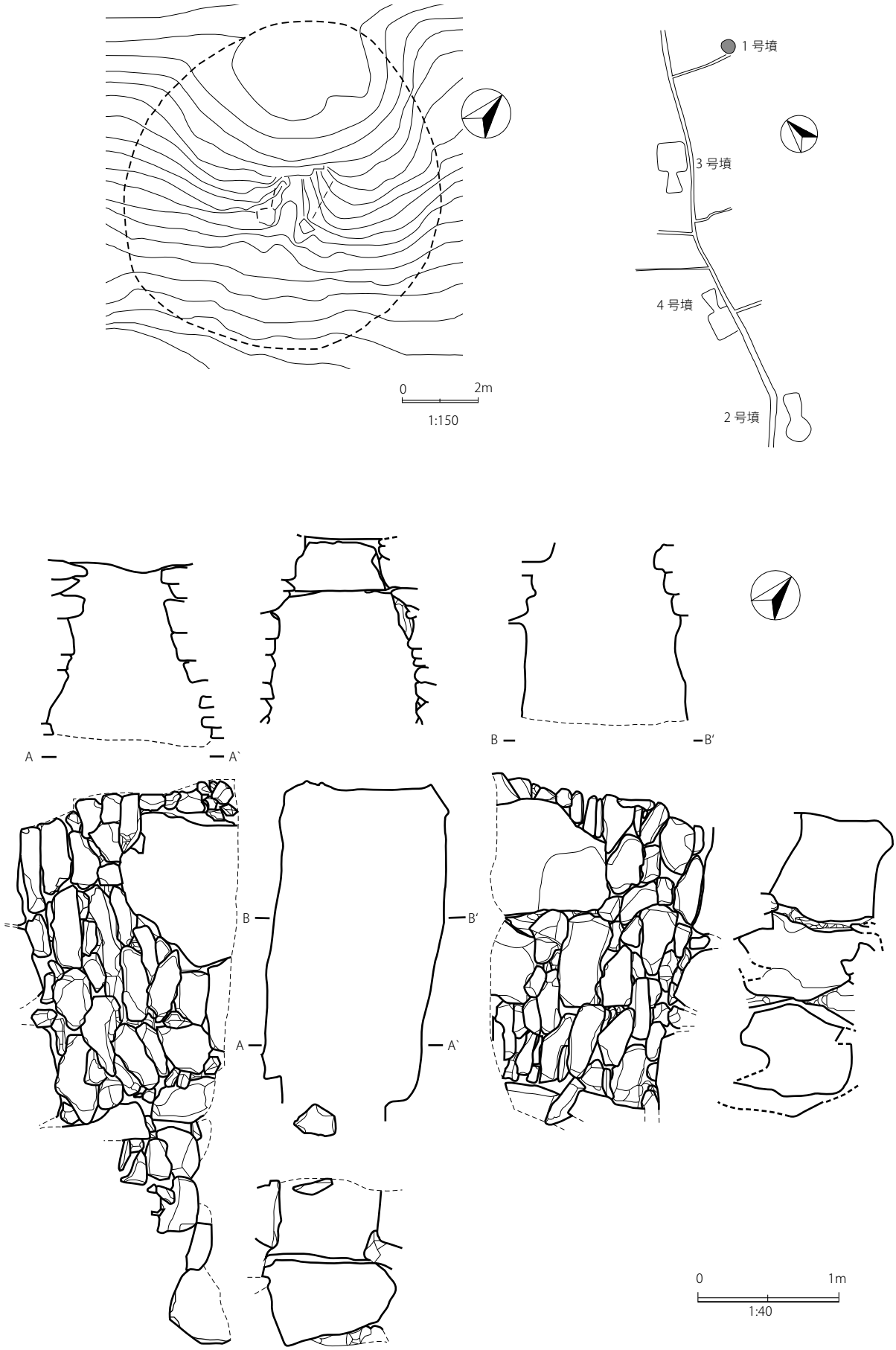
周壕内出土　土師器壺 19　出土状況図

第 16 図　4 号墳遺物分布図・遺物出土図



4 号墳
a-a`
1　10YR3/3 暗褐色粘質シルト
2　10YR7/6 暗黄褐色粘質シルト
3　2.5YR3/3 暗赤褐色粘質シルト
4　10R3/2 暗赤橙色粘質シルト
5　10R3/3 赤褐色色粘質シルト　　礫混入
6　2.5YR4/6 赤褐色砂質粘土　　礫混入

第 17 図　2 号墳地形図・試掘断面図



第 18 図　1 号墳地形図・石室実測図

3　出土遺物

3号墳と4号墳からは周壕から古墳時代の土師器が出土している。儀礼器である底部穿孔壺、赤色加工された壺がその多くを占めるのが特徴である。また鉄製品が4点出土している。

3号墳（第19図）

土師器の底部穿孔壺、壺などが周壕から出土している。

1・2についてはほぼ完形品で底部穿孔壺の形状が明確である。また10～15のような底部穿孔壺の底部のみの出土も多い。3[註2)]～7の壺口縁部のみについても赤色加工が施されていることからおそらく底部穿孔壺の一部と考えられる。

3号墳の底部穿孔壺における特徴として、頸部から口縁部かけて緩弧状に外反するものが大半であること、二重口縁と思われるものが殆どであるがその装飾の稜は殆ど目立たないこと、一部ミガキ調整もあるがハケメ調整が大半であること、そして儀礼用途を意識した焼成前穿孔底部であること、が挙げられる。焼成前穿孔の開口部は丁寧にハケあるいはナデ調整による形成が行われている。また完形品、あるいは大きく残存している底部穿孔壺の形状から体部は肩の張るタイプで、頸部から体部は強く「く」の字に屈曲するとみられる。なお1・3・4は周壕底面から出土している。しかしこれらの土師器は非常に脆弱な状態で出土し、表面の磨滅が著しいため観察が困難な部分も多い。

16は丸底壺の体部と考えられるが、赤色加工および焼成後穿孔を施していることから儀礼用土器と考えられる。焼成後穿孔は内部に複数回の刺突痕があるため内部から棒状のもので穿孔したものと思われる。外面はハケメ調整されている。17・18について、日常什器の壺である可能性が高い。17は口縁を折り返す装飾が施され、口唇がやや内側に引き出されている。18は口縁部のみでハケメ調整が施され、口縁部に若干の膨らみと口唇部に外側への微小な引出をもつ。16・17・18は4世紀代であると思われるが4号墳のものと比べ新しい様相が見られる。

4号墳（第20図）

3号墳と同様土師器底部穿孔壺、壺のほか、小型器台が周壕から出土している。

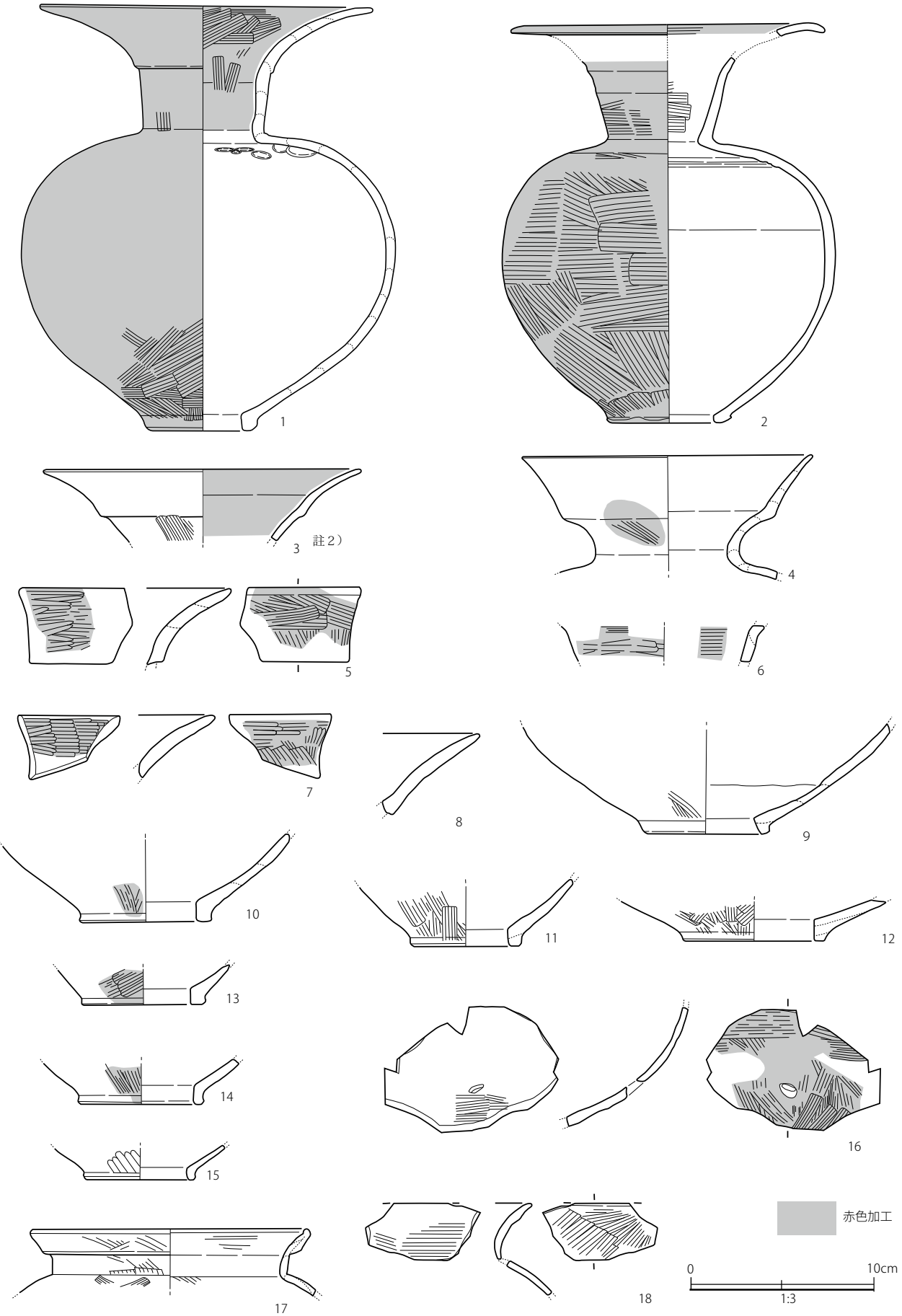
底部穿孔壺について、完形品は出土してない。また3号墳のように明確な土師器壺とわかるものが殆どない。しかし出土した土器の形状から20～23・25～27は底部穿孔壺の一部と思われる。特に20～22は赤色加工が施されていること、そして23・25・27の口縁部はそれらと形状が類似していることから底部穿孔壺と見做すことができる。これらの特徴として、口縁が緩弧状に外反する、二重口縁の有段が非常に明瞭に形成されている、器壁が重厚である、口縁部内外面ともにミガキ調整が施されている、口縁端部・有段端部ともに面取りが施されいる、口唇部がわずかに上に引き出されている、などが挙げられる。また一部の土師器から推測して頸部が垂直に近い角度で形成されていると思われる。24についても口縁部折返し加飾や口縁部内反など他とは異なる特徴を持つが、底部穿孔壺と考えられる。以上のように3号墳の底部穿孔壺とは明らかに異なる特徴を持つ。

26については底部が欠損しているが丁寧に打ち欠いている痕跡があるため焼成後底部穿孔壺の底部と思われる。またその形状から球型体部をもつ壺ではないかと考えられる。28についても底部内側中心部に内側から数回にわたり意図的に刺突したらしき欠損痕があるため、焼成後底部穿孔壺の底部かと思われる。

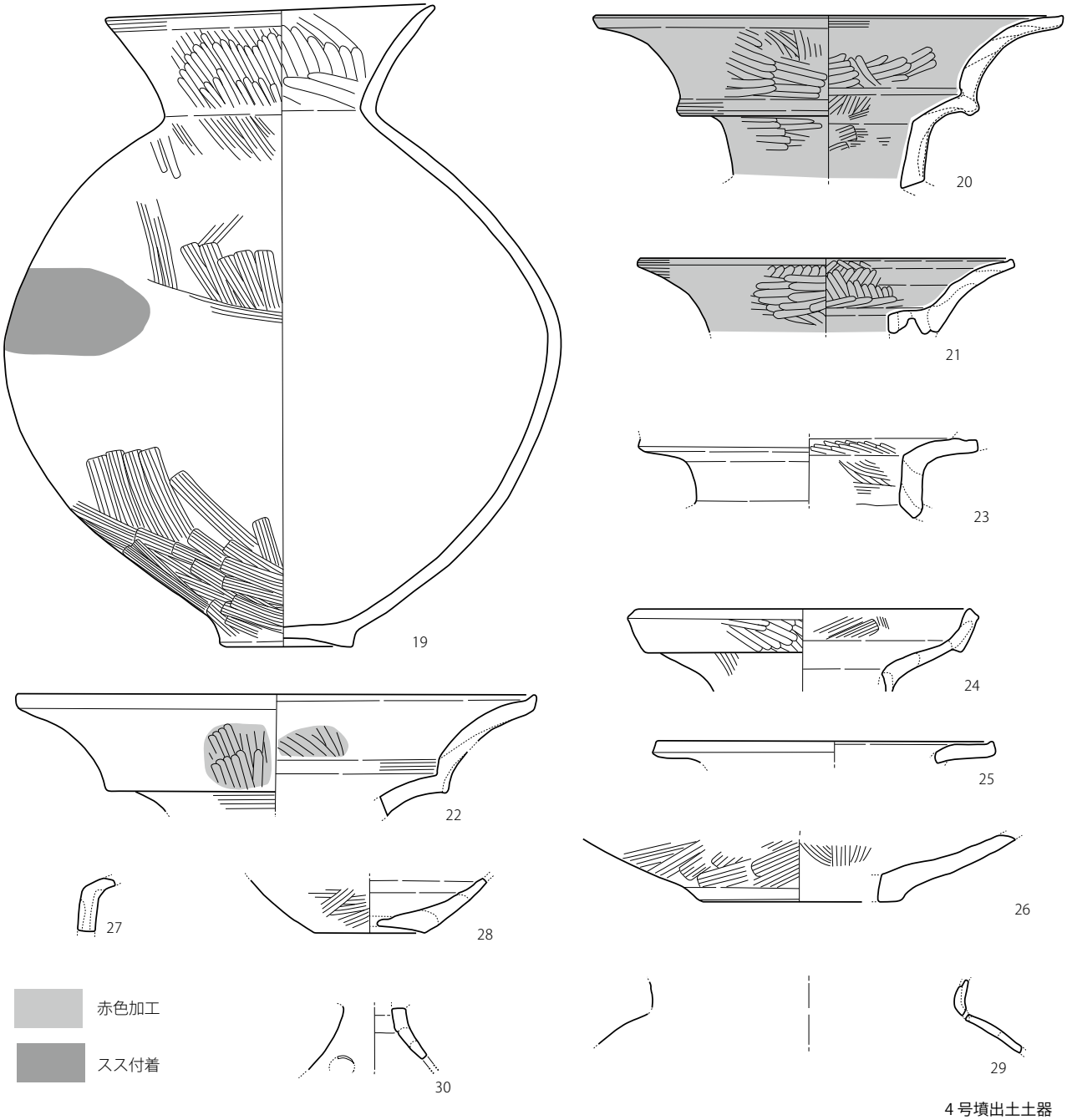
30は小型器台である。欠損部分が多いため形状は不明瞭ではあるが、脚部は外反気味に「八」の字状に開き、受部から脚部までの大きめの貫通孔を持つが、脚部の透孔についてそれらしき痕跡もみられるが欠損が大きく孔径などは明確ではない。また乳白色の化粧土加工も僅少ながら表面に残存している。これは周壕の壁面から出土している。

29は日常什器とみられる甕である。残存部分は非常に少なく口縁部から体部上部のみである。また磨滅も顕著で表面の調整は不明である。しかし胎土と形状から4世紀の前半には属するものとみられる。

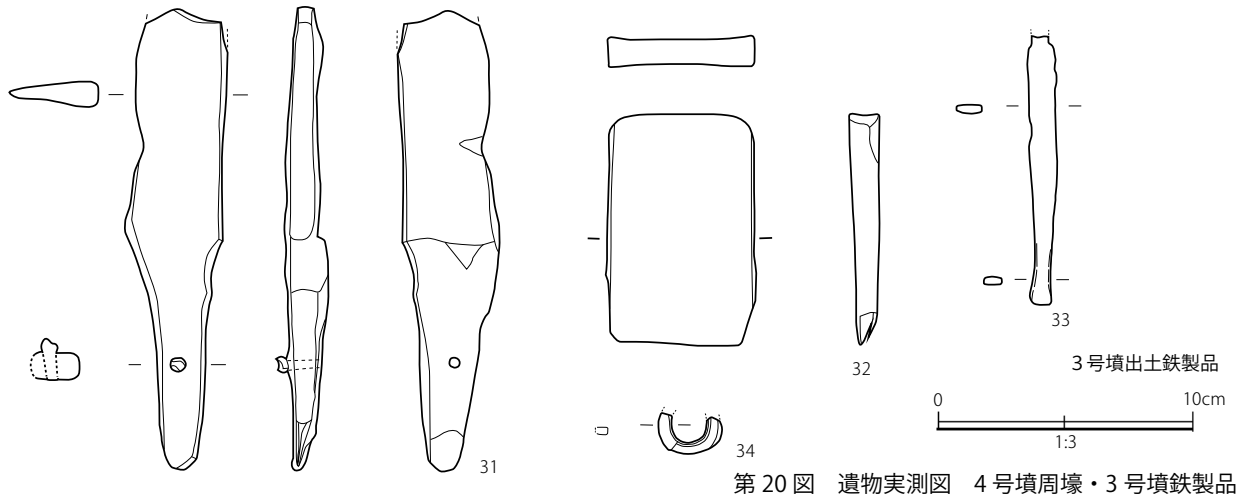
また西側くびれ部周壕内土坑の中に配置されていた壺19について、体部にススの付着や剥離がみられる。日常什器として制作されたと思われる。体部はハケメ調



第 19 図　遺物実測図　3 号墳周壕



4 号墳出土土器



3 号墳出土鉄製品

第 20 図　遺物実測図　4 号墳周壕・3 号墳鉄製品

整だが口縁部についてはミガキ調整が施されている。口縁部はやや外反気味の直口型、体部はやや菱型に近い胴張りで、焼成は良好である。出土状況から 4 号墳で祭祀を行った際に使われた土器のひとつとみられるが、どのような意味を持ってあの場所に据えられたかは不明である。19 は 4 世紀代中葉に属するものとしておきたい。

鉄製品（第 20 図）

鉄製品は 31 が表採遺物として、32 ～ 34 が 3 号墳周壕から出土している。32 ～ 34 は農道下の 3 号墳周壕後方部東側覆土内から出土している。

32 は鉄斧で、柄などに装着するための細工は全く無く平坦な鉄板に片刃がつけられた短冊型と分類されるものとみられる。一部腐食はしているもののほぼ完形とみられる。33 は用途不明の鉄製品である。欠損や錆のため原型が分かりづらいが、X 線写真で確認したところくびれ直下に数条の筋が入っていることが確認された。工具などとして使われた可能性がある。34 は上部が欠損した環状の鉄製品である。断面は隅丸長方形に近く、遺物そのものには加飾はみられない。やはり用途は不明であるが、装飾品として使用された可能性が考えられる。31 は鉄刀の刀身下部と茎で、欠損や錆が著しいが残存する刀身部分の断面はややいびつながら二等辺三角形を呈している。茎部には柄に装着するための留め具とみられるものが確認できる[註3)]。類例として山形県内では川西町下小松古墳群小森山古墳第 61 号、下小松古墳群鷹待場支群 T-1 号墳、T-41 号墳にみられる。

表２　蒲生田山古墳群遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別	器種	登録番号	計測値（mm）口径	底径	器高	調整技法 外面	内面	底部	出土地点	備考
1	19	土師器	底部穿孔壺	1	207	62	267	ハケメ	ハケメ・押圧痕	焼成前穿孔	周壕 3-1-2G	赤色加工・二重口縁？
2	19	土師器	底部穿孔壺	4	174	68	-	ハケメ	ハケメ	焼成前穿孔	周壕 3-1-2G	赤色加工・二重口縁？
3	19	土師器	壺	3	176		-	ハケメ	ハケメ		周壕 3-3-1G	赤色加工・二重口縁？
4	19	土師器	壺		(162)	-	-	ハケメ		-	周壕 3-2-1G	赤色加工・二重口縁？
5	19	土師器	壺		-	-	-	ハケメ	ミガキ	-	周壕 3-3-3G	赤色加工・二重口縁？
6	19	土師器	壺		-	-	-	ミガキ・ナデ	ハケメ	-	周壕 3-1-2G	二重口縁壺？
7	19	土師器	壺		-	-	-	ミガキ・ハケメ	ミガキ	-	周壕 3-3-2G	赤色加工
8	19	土師器	壺		-	-	-			-	周壕 3-3-1G	表面磨滅
9	19	土師器	底部穿孔壺	3	-	70	-	ハケメ	ハケメ	焼成前穿孔	周壕 3-3-1G	赤色加工・表面磨滅
10	19	土師器	底部穿孔壺	2	-	(74)	-	ハケメ		焼成前穿孔	周壕 3-3-1G	赤色加工
11	19	土師器	底部穿孔壺	2	-	(62)	-	ハケメ		焼成前穿孔	周壕 3-3-1G	
12	19	土師器	底部穿孔壺		-	(78)	-	ハケメ	ハケメ	焼成前穿孔	周壕 3-1-3G	
13	19	土師器	底部穿孔壺	2	-	(68)	-	ハケメ		焼成前穿孔	周壕 3-3-1G	赤色加工
14	19	土師器	底部穿孔壺	2	-	(70)	-	ハケメ		焼成前穿孔	周壕 3-3-1G	赤色加工
15	19	土師器	底部穿孔壺		-	(62)	-	ミガキ		焼成前穿孔	周壕 3-2-1G	
16	19	土師器	小型壺（？）		-	-	-	ハケメ	ハケメ	-	周壕 3-3-3G	赤色加工・体部焼成後穿孔
17	19	土師器	甕		(156)	-	-	ハケメ	ハケメ	-	周壕 3-4-2G	折返し口縁
18	19	土師器	甕		-	-	-	ハケメ	ハケメ	-	周壕 3-3-3G	
19	20	土師器	壺	12	158	64	303	ミガキ・ハケメ	ミガキ	ヘラケズリ	周壕 5-4-1G	体部にスス付着
20	20	土師器	底部穿孔壺	3	(226)	-	-	ミガキ	ミガキ	-	周壕 5-2-3G	赤色加工・二重口縁
21	20	土師器	底部穿孔壺	13	(182)	-	-	ミガキ	ミガキ	-	周壕 5-5-2G	赤色加工・二重口縁
22	20	土師器	底部穿孔壺	3	250	-	-	ミガキ	ミガキ	-	周壕 5-2-3G	赤色加工・二重口縁
23	20	土師器	底部穿孔壺		-	-	-		ミガキ・ハケメ	-	周壕 5-2-2G	二重口縁壺頸部・表面磨滅
24	20	土師器	壺		(188)	-	-	ミガキ	ハケメ	-	周壕 5-2-3G	二重口縁
25	20	土師器	壺（？）		(164)	-	-			-	周壕 5-2-2G	二重口縁か？表面磨滅
26	20	土師器	壺	22	-	(96)	-	ハケメ	ハケメ	焼成後穿孔	周壕 5-2-3G	
27	20	土師器	壺（？）		-	-	-			-	周壕 5-2-3G	二重口縁壺頸部か？
28	20	土師器	壺（？）		-	(54)	-	ハケメ		焼成後穿孔？	周壕 5-5-2G	表面磨滅
29	20	土師器	壺（？）		-	-	-				周壕 5-4-1G	折返し口縁
30	20	土師器	小型器台		-	-	-				周壕 5-3-1G	表面磨滅　化粧土若干残る

遺物番号	挿図番号	種別	器種	計測値（mm）長さ	幅	厚さ	出土地点	備考
31	20	鉄器	鉄刀	-	-	17	表採	
32	20	鉄器	鉄斧	93	59	12	3 号墳周濠 3-5-3	
33	20	鉄器	鉄製品		14	3	3 号墳周濠 3-5-3	用途不明。工具か？
34	20	鉄器	環状鉄製品		26	5	3 号墳周濠 3-5-3	用途不明。装飾品か？

4　まとめ

蒲生田山古墳群は、明治、大正～昭和期の発掘により十数基の終末期古墳群としてその存在は知られていたものの、近代における葡萄畑の開墾・整地などでそのほとんどが破壊され消滅した。しかし、開発事業に先立つ分布調査で３基の古墳を新規に発見し、うち開発事業区域内の３号墳・４号墳の２基について発掘調査を行った。その結果、２基ともに既知の古墳群とは時期を異にする古墳時代前期の前方後方墳であることが判明した。

遺構

墳丘について『赤湯町史』によると、近代まで３号墳後方部は「遠見台」と呼称される高さ４尺程度（約 1.2 m）の高台であったが、先述のとおり元地権者によると３号墳・４号墳ともに畑開墾のため人力で約 1.5 m削平し、周壕を埋めたとのことである。そのことから墳丘の高さは調査時よりは約 1.2 ～ 1.5 mの盛土が存在したことは想像できる。また副葬品とみられる鉄製品が周壕埋土上層から出土していることからその範囲に主体部があったこと、そして掘削時別段何も出土しなかったという証言から、主体部におさめられていたのは石棺ではなく木棺であったことが考えられる。

また、ＳＸ１について図面記録には残っていないが遺構底面に僅少の粘土層があった。このことについて、福島県浪江町本屋敷遺跡第１号墳・会津大塚山古墳では粘土塊で割竹形木棺を固定し更に木棺の蓋の密閉に粘土を使用し、また宮城県仙台市遠見塚古墳では粘土を敷き詰めた上に木棺を据え粘土でそれを密閉していたとされる。これらの類例からＳＸ１底床の粘土層の存在は埋葬方法を考察するうえで注視すべきであろう。

また周壕覆土にも目立った礫などは混入していなかったため墳丘には葺石はなかった模様である。トレンチ試掘のみの調査となった２号墳についてもその結果から同様の造成方法であることが推測できる。

３基の古墳の位置関係について、３基とも直線距離にして約 40 ～ 50 m間隔で山の尾根に沿って配置されている。一方で３号墳だけが前方部を山麓に向け、２号墳と４号墳は前方部を山頂に向けて築造され、あたかも３号墳と４号墳が尾根上で互いを向き合うよう (158°) に配置されている。このように古墳が配置された理由は全くの不明であり、今後更なる検討が必要である。

３号墳と４号墳は調査時すでに墳丘が削平されていたものの、周壕は比較的残存状態が良好であった。そこで周壕から古墳について勘考してみる。３号墳・４号墳ともに前方部周壕は浅く狭い、後方部は深く広いという共通点を持つが、４号墳については深く逆台形の後方部周壕がくびれ部分で一旦完結し、浅い前方部周壕が別な溝として造られた様な印象を受ける。このような周壕の掘方はいずれも福島県会津坂下町の宮東遺跡ＳＺ 01（前方後円墳）、稲荷塚遺跡ＳＺ 06（前方後方墳）に類例が見られ、古墳編年１～２期並行期に相当するとされている。一方３号墳については前方部と後方部の溝に明確な境目はなく、くびれ部分で溝幅が大きく広がるのみである。類例として古墳編年１～２期に当たるとみられる会津坂下町の杵ヶ森古墳（前方後円墳）があげられる[註3)]。まだ周壕による古墳編年は進んでいないが、異なるタイプの周溝を持つ古墳が並立することは興味深い点である。

またこの２基の墳形について基底部で前方部と後方部の比率を比較した場合、２基ともにやや後方部がやや長いほぼ４：６の比率で、明らかな差異はなかった。

遺物

底部穿孔壺は、この土師器は古墳で行われる死者の葬送に使用される儀礼器であり、古墳の築造年代を示すものである。

山形県内での場合底部穿孔壺のこれまでの出土例をみてみると、川西町の天神森古墳、下小松古墳群鷹待場支群第 106 号墳（T-41 号）、第 186 墳（T-42 号）にその類例が見られる[註4)]。いずれも二重口縁をもつとみられる焼成前底部穿孔壺が出土している。特に残存状態の比較的良好な天神森古墳の底部穿孔壺は頸部が長く、頸部有段の稜は強調されていないが稜から口唇部にかけて直線的に大きく開き口径が胴径よりも大きい。体部もやや細長い倒卵型という特徴をもつ。天神森古墳については現在４世紀中葉 (古墳編年２期) の築造と推定され、会津坂下町の臼ヶ森古墳との関連性が指摘されている（川村 2003）。しかし底部穿孔壺は蒲生田山古墳群のそれとはかなり印象が違うため、天神森古墳は別集団に

よって築造されたものと思われる。

3 号墳出土底部穿孔壺について、1 ～ 2 は直立した頸部から口唇部に向けて緩弧状に大きく外反する口縁部、ほとんど簡略化された有段、丸い口唇端部などの特徴を持つ。5・7・8 においても、どちらかといえば二重口縁というより単純口縁に加飾を施したような印象を与える。そのような視点で見た場合、埼玉県東松山市下道添 2 号墳（古墳編年 2 期終末、前方後方墳）、群馬県富岡市北山茶臼山西 1 号墳（古墳編年 4 期、前方後方墳か？）、茨城県出島村田宿天神塚古墳（古墳編年 3 期、前方後円墳）の外反する単純口縁の底部穿孔壺が類似していると思われる。この類例に並行する土器と考えればやや時期に幅はあるものの、3 号墳は新しくても古墳編年 4 期（4 世紀後半）に相当すると推測される。しかし関東系土器の山形県南部への突然の出現は疑問の残るところであり、今後の検討課題となる。

4 号墳出土底部穿孔壺はいずれも器壁が厚く、前述の通り装飾を意識した、丁寧なつくりが特徴である。

20 ～ 23 について山形県外では福島県会津坂下町の宮東遺跡 SZ01、男壇遺跡 SZ01、稲荷塚遺跡 SZ06 に類例が見られる。これらの類例は意見の分かれるところであるが新潟シンポジウム編年 7 ～ 8 期並行期にあるとされる。また浪江町本屋敷第 1 号墳にも類例をみることができる[註 5）]。

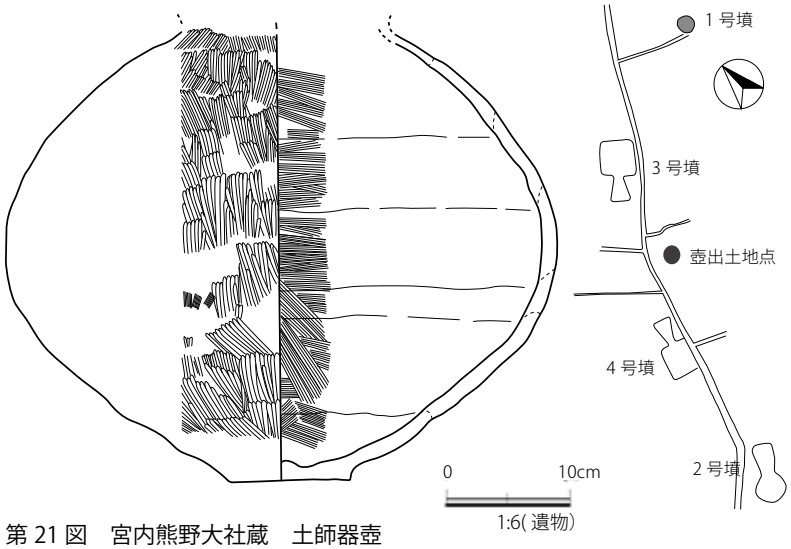
24 の内弯し口唇端部を面取りした折返し二重口縁の壺の口縁部について、会津坂下町宮ノ北遺跡第 10 号住居跡出土の壺口縁に類例が存在し、これらは新潟シンポジウム 7 期並行期に位置づけられるとみられる。以上のことから 4 号墳の底部穿孔壺は新潟シンポジウム 7 ～ 8 期並行期に相当するのではないかと考えられる。

また 3 号墳と 4 号墳の底部穿孔壺を比較した場合底部穿孔の方法に相違が見られる。底部の出土数が違うために一概に比較出来ないが、4 号墳では焼成後穿孔、3 号墳は焼成前穿孔の底部穿孔壺の割合が高いと思われる。この点に関して、底部穿孔壺の土器編年研究において焼成後穿孔→焼成前穿孔の流れがあるとの指摘がある（青山 1998、2004）ことから、編年上考慮すべき特徴であろう。

出土遺物から鑑みて、3 号墳は 4 世紀中葉～後葉（古墳編年 3 期）、4 号墳は 4 世紀前葉（古墳編年 2 ～ 3 期）に相当する古墳と推定しておきたい。そして遺物が出土しなかった 2 号墳については墳形から考慮してこれらより新しいものとみられ、よって 4 号墳→ 3 号墳→ 2 号墳の順に築造されたと推測できる。

遺物全体を見た場合、底部穿孔壺が出土遺物のほとんどである。一部土師器壺と思われるものが数点出ているほかは、供献土器として代表的な小型器台が 4 号墳から 1 体出土したのみで、他の古墳と比べると出土遺物における器種構成のバランスの悪さは否めない。

なお参考資料ではあるが発掘調査区域外の古墳周辺からも遺物が出土している。3 号墳と 4 号墳の中間、西側尾根下にある畑から壺が出土している（第 21 図）。現在は南陽市宮内熊野大社に奉納・保存されている。おそらく 3 号墳あるいは 4 号墳の墳丘で使用されたものがそのまま転落し土中に埋まったものと思われるが、壺はその形状から古墳時代前期（4 世紀代）のものと考えられる。



第 21 図　宮内熊野大社蔵　土師器壺

以上のように遺構（周壕）・遺物両面から蒲生田山古墳群を考察したが、遺構からみた場合 3 号墳と 4 号墳について、周壕の年代観についてまだ研究が進んでいないことと、これら 3 基の古墳間に切合いが確認できないことから、現在のところ新旧関係および年代確定は出土遺物の年代観に頼らざるを得ない。しかし古墳配置という観点

から考えた場合、4 号墳→３号墳という築造の順序は、既存の古墳より標高の高い場所に古墳を造営したということになり、違和感がある。

最後に、蒲生田山古墳群は宮内扇状地と吉野川を眼下に、飯豊・朝日連峰を一望できる丘陵に立地している。そのことからも吉野川流域に勢力をもった支配者層の墳墓ではないかと思われる。加えてこの古墳群は日本海側北限地帯の古墳群であり、前期古墳出現文化圏の縁辺に造られた古墳の姿ともいえるであろう。

そしてこの蒲生田山古墳群が造られた後、米沢盆地は南陽市稲荷森古墳に代表される平地の大型前方後円墳出現の時代へと移行していったのであろう。

註

1）南陽市史編さん委員会 1987「南陽市史考古資料編」に 1 号墳の調査報告が掲載されているが、今回この報告書の刊行にあたり再掲した。
2）第 19 図３について、胎土が非常に脆弱だったため発掘調査時記録中に土器の器形が変形した。この土器に関して本報告書作成においてやむなく変形した状態での実測図を掲載することとした。なお出土時直後の写真は写真図版 4 左下に掲載している。
3）東北芸術工科大学准教授北野博司氏のご教示による。
4）川西町文化財報告書第 14 集では鷹待場支群第 106 号墳、第 186 墳の名称を使用しているが、その後第 18 集において各々 T-41 号、T-42 号に改称されている。
5）本屋敷 1 号墳について、報告書では 4 世紀末～ 5 世紀初頭に位置づけられているが、青山博樹氏・遠藤千映美氏らは古墳編年２～３期に位置づけている。本書では後者の説を踏襲する。

参考文献・引用文献

青山博樹 1998「土器（１）東北南部」第３回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料
青山博樹 2004「底部穿孔壺の思想」『日本考古学第 18 号』日本考古学協会
石井浩幸 2004「山形南部における古墳主体部の副葬品」川崎利夫編『出羽の古墳時代』高志書院
伊藤玄三 1985「本屋敷古墳群の研究」法政大学
遠藤千映美 1998「東北南部―前期古墳から中期古墳へ―」第３回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料
大塚初重・小林三郎 1995「下小松古墳群（１）」川西町埋蔵文化財調査報告書第 14 集
角田朋行 2004「蒲生田山古墳群」川崎利夫編『出羽の古墳時代』高志書院
柏倉亮吉ほか 1953「山形縣の古墳」山形縣文化財保護協會
川村浩司 2003「越後と会津の庄内並行期の古墳出土土器について」『古墳出現期の研究』高志書院
小林三郎・齋藤敏明 1999「下小松古墳群（2）」川西町埋蔵文化財調査報告書第 18 集
齋藤敏明 2004「下小松古墳群」川崎利夫編『出羽の古墳時代』高志書院
坂野和信 1987「下道添遺跡」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 67 集
佐藤鎭雄ほか 1987「南陽市史考古資料編」南陽市史編さん委員会
佐藤鎭雄 2011「やまがたの古墳時代－最上川流域のムラの古墳－」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
塩谷　修 1998「前期古墳から中期古墳へ―古墳出土の土器（関東）―」第３回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料
志村　哲・加部二生 1998「群馬県地域の３～５期の前方後円墳」第３回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料
新納　泉 1991「副葬品の種類と編年」石野博信編『古墳時代の研究第 8 巻古墳Ⅱ」
徳江　紀・田口正美 1988「大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 78 集
福島雅儀・福田秀生ほか 2011「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告 10 桜町遺跡２次」福島県文化振興事業団
藤田宥宣 1984「天神森古墳」川西町埋蔵文化財調査報告書第 6 集
古瀬清秀 1974「古墳時代鉄製工具の研究」『考古学雑誌第 60 巻第 2 号』
吉田江美子 2008「山形県内の古墳時代前期土師器について」『研究紀要第 5 号』山形県埋蔵文化財センター
吉田博行 1999「森北古墳群」創価大学・会津坂下町教育委員会
和田　聡・高橋　和 1990「阿賀川地区遺跡発掘調査報告書　男壇遺跡・宮東遺跡・中西遺跡」会津坂下町教育委員会第 16 集

２号墳（東より）

２号墳　墳頂（北東より）

総合公園内遺跡群

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

総合公園内遺跡群は、南陽市竹原地区の宮内扇状地北西の裾野にある小起伏山地に位置する。

この調査は、平成４年第 47 回国民体育大会（べにばな国体）のソフトボール競技会場となった総合運動公園整備事業に先立って実施された。しかし整備予定地は周知の遺跡であった竜樹山館の北東隣であることから遺跡の存在が予想された。また、当時南陽市史を発刊予定していたこともあり、その資料収集も兼ね整備予定地内の分布調査の実施に至った。

これにより、南陽市教育委員会と建設関係課とで協議を行い、昭和 60 年７月に事業計画区域内にトレンチと試掘ピットを設定して試掘を行い、遺跡の有無と範囲を確認する第一次分布調査（表面踏査、試掘）を行った。

その結果、これまでに確認されていた遺跡以外の箇所から遺構を検出し、多くの石器や土器等の遺物を採取した。同年１０月に開発計画との調整を図るため関係各課との検討会を実施し、計画地の用地取得や果樹の伐採終了後に本調査実施の必要性を確認した。

また、１０月下旬～１１月上旬に第一次分布調査で発見された年度内工事予定地に含まれえるマウンドの試掘未実施箇所についてトレンチ調査を行い、遺構や遺物の広がりと確認面までの深さを把握する試掘調査（第二次分布調査）を実施したが、遺構や遺物は発見されなかった。

以上のことによって遺跡の範囲が確定されるに至り、牛ヶ首Ａ・Ｂ遺跡、石ヶ窪Ａ・Ｂ遺跡、蕗畑遺跡、雨沼遺跡が発掘調査対象となった。

この試掘調査の結果を受け、遺跡の記録保存のため昭和 61 年より緊急発掘調査を実施した。

2　調査の概要

総合公園内遺跡群の発掘調査は以下のように実施された。

・第３次調査　昭和６１年１０月６日～１１月５日
　牛ヶ首Ａ遺跡
・第４次調査　昭和６２年５月１１日～１０月末
　牛ヶ首Ａ・Ｂ遺跡・蕗畑遺跡・石ヶ窪Ａ・Ｂ遺跡
・第５次調査　昭和６３年５月１０日～６月２日
　雨沼遺跡
・第６次調査　平成元年５月１３日～６月５日
　雨沼遺跡

調査総面積は、1810 ㎡である。調査区別の面積は、牛ヶ首Ａ・Ｂ遺跡が 984 ㎡、石ヶ窪Ａ・Ｂ遺跡が 317 ㎡、蕗畑遺跡が 351 ㎡、雨沼遺跡が 194 ㎡である。

発掘調査の方法は、事業用地の確認、調査区の設定、重機による表土除去、遺構検出のための面整理・遺構登録などの経過を踏んだ。遺跡範囲内に設定したグリッドは２×２ｍを単位とし、標記は東西軸で東から西へ、南北軸は北から南に昇順する算用数字にて行った。グリッド名が示す範囲はＸ軸とＹ軸の交点の第四象限となる２ｍ四方の４㎡である。座標地と番号を登録した遺構は、順次半截等の掘り下げを実施して断面精査を行い、実測図作成等の諸記録を経たのちに完堀した。遺構平面図は平板により実測を行った。

3　調査日程

現地調査は以下のとおりである。

昭和 61 年度　牛ヶ首Ａ遺跡

10 月６日　調査地の雑木伐採、運搬路確保、搬出、テント設営を行い、その後重機による表土剥離を行う。

10 月 13 日～ 14 日　委託業者によるＢＭおよびグリッド杭設置を実施した。これと同時に調査班は面整理を行う。

10 月 15 日　西側一帯の抜根作業を行い、遺構確認面直上出土遺物のグリッド取り上げを行った。

10 月 24 日　プラン確認のため、全面の面整理を行いプラン確認、写真撮影、遺構登録を行う。

10 月 25 日～　遺構の掘り下げを開始する。覆土を半

截し、土層観察後に完堀した。

10月29日～11月2日　A区の遺構平面図作成。

10月31日　遺構写真撮影。

～11月2日　遺構平面図の作成。

11月4日　B区完掘。翌日撤収。

昭和62年度　牛ヶ首A・B遺跡、蕗畑遺跡、石ヶ窪A・B遺跡

5月11日　除草作業から開始。

5月12日～15日　牛ヶ首A遺跡のテストピット、テストトレンチの試掘を行う。

5月18日～27日　グリッド杭を設置。全面の面整理を行う。

5月28日　全遺構の写真撮影を行い、その後覆土を半截し、土層観察後に完堀した。

5月29日～　遺構平面図の作成。　完了

6月2日　牛ヶ首B遺跡のグリッド杭を設置。

6月2日～6月4日　地表面の遺構平面図を作成し、マウンドの半截作業を行う。セクション図、平面図を作成し完了。

6月10日　蕗畑遺跡のテント設営とグリッド杭を一部設置。

6月12日　B地区の発掘区の設定を行いトレンチ堀を実施する。

6月14日～16日　重機にる表土剥離を行い、グリッド杭を設置した後、面整理を行う。

6月17日～25日　B区の面整理の後、遺構が確認され、写真撮影し半裁。平面図作成を行った。

6月26日～7月1日　A区のグリッド杭設置とトレンチを整理し、除根作業を行う。

7月2日～3日　A区北東部の掘り下げを行い、プラン確認した。面整理後、遺構番号付けを行う。

7月7日　A区の面整理の後、掘り下げを行う。

7月10日～14日　A区の写真撮影および図面作成完了。

9月1日～2日　石ヶ窪遺跡現地調査を開始。テント設営・草刈り・グリッド杭設置作業を行う。

9月4日～10日　石ヶ窪B遺跡のトレンチ試掘を行う。

9月11日～16日　遺構検出し、掘り下げ後に平面図・エレベーション図作成を行う。

9月17日　石ヶ窪A遺跡の表土剥離を開始。

9月21日～27日　グリッド杭設置、除根、面整理を行う。

9月28日～10月6日　遺構検出作業を行う。

10月7日～15日　写真撮影、図面の作成を行い完了した。

昭和63年度　雨沼遺跡

5月13日　調査開始。伐採や草刈を行う。

5月16日　テストトレンチの試掘を行う。

5月17日～18日　A区・B区の表土の剥離作業を行い、グリッド杭を設置した。

5月21日～5月27日　A区のマウンドの掘り下げを行い、図面を作成する。

5月28日～6月1日　A区の遺構を半裁し、土層観察後に完堀し写真撮影、平面図作成を終了し完了。

平成元年度　雨沼遺跡

5月10日～15日　調査開始。草刈り作業を行う。

5月18日～6月6日　マウンドの調査を行う。写真撮影、図面作成を行って完了。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的景観

総合公園内遺跡群は、南陽市竹原地内にある。ＪＲ奥羽本線赤湯駅から北西方へ５ｋｍ付近の、通称梨郷山の標高 280 ～ 330 ｍを測る山中に位置する。

遺跡群の所在する南陽市は米沢盆地の北部の東西 15 ｋｍ、南北24 ｋｍの三角形状の市域をなす。周囲を山々に囲まれた米沢盆地の北部にあって、米沢盆地をはさんで東に奥羽山脈、山形県を貫流する母なる最上川の源流がある吾妻連峰、南西に飯豊連峰、北西に朝日連峰を遠望する。市域の面積は約 160 ｋ㎡で、このうち北部山地が 70％、南部平地が 30％である。北部山地は、出羽山地の南部を占める白鷹山系丘陵の南側にあたり、「北に丘陵、南に沃野」と表現されている地形である。

遺跡群のある通称梨郷山は、米沢盆地の北端に接し、白鷹山 (標高 994 ｍの休火山) の溶岩流・泥流による丘陵の南を占める。白鷹山は市町村境となり、北部は山辺町・山形市、東部は上山市、西部は白鷹町・長井市で、南部が南陽市である。白鷹山系丘陵はいくつかの山地を核に四方に伸びるが、梨郷山は若松山 (標高 516 ｍ) の南に広がる丘陵の先端で、若松山岩体の花崗閃緑岩で覆われている。梨郷山の東部は竜樹山 (標高 377 ｍ) で、西部は経塚山 (標高 324 ｍ) である。総合公園は竜樹山に造成されているので遺跡群は竜樹山に立地することになる。

白鷹山系南部丘陵から米沢盆地に流れ出る河川で一番大きい吉野川は白鷹山麓から宮内を経て沖郷に至り宮内扇状地を形成して宮崎付近で最上川に合流したが、現在は宮内から赤湯に流れる支流を本流としている。そして赤湯の椚塚から屋代川と合流して最上川に合流する。二番目に大きい織機川は、若松山から須刈田を経て流れる小河川などを集めて漆山を経て、梨郷地区の平野部・砂塚に至り最上川に合流する。織機川も吉野川と共に宮内扇状地を合成したが、織機川流域の宮内扇状地西扇側部に段差の大きい自然堤防・後背湿地がみられ、縄文時代前期以降、各時代にまたがる遺跡群が分布する。

竜樹山・経塚山の北側は西に向かって開ける谷となっており平野段丘に至る。最上川は梨郷地区の南部を西流し、経塚山麓を削って北上、平野を経て長井方面へ流れる。

2　歴史的景観

本遺跡群の周辺では、南陽市を中心に現在 260 ヶ所余りの遺跡が確認されている。主要・関連遺跡を中心に時代毎に概観し、この地域における歴史的背景を以下に述べる。

旧石器時代

当該期の遺跡は極めて少なく、南陽市では赤湯の長岡山遺跡で後期旧石器時代とみられるナイフ形石器が 1 点採集されている (佐々木洋治氏による)。

縄文時代

赤湯の長岡山遺跡・北町遺跡・松沢遺跡で草創期の石器が採集されている。長岡山遺跡はエンドスクレイパー（佐々木洋治氏による）、松沢遺跡は有溝砥石（山内清男 1974）で単品採集であるが、北町遺跡は平成８年の下水道工事の際の発見で石匙・石槍など 100 数十点に及ぶ石器類が発見されている (佐藤鎭雄・秦昭繁 2010)。北町遺跡の石器群は大谷地対岸の日向洞窟遺跡などでみられる草創期のものである。

早期では、漆山須刈田の大野平遺跡で、早期中葉・後葉と前期末葉の竪穴住居４棟が検出され、関東の田戸下層式併行の本県早期の標式土器とされた沈線文尖底深鉢などの土器・石器が採集されている (吉野一郎・佐藤鎭雄 1985)。また、赤湯の鳥上坂近くの月ノ木Ｂ遺跡でも発掘調査により早期中葉から前期前葉にかけての土器・石器類が多量に採集されている。

前期以降の遺跡は多く、梨郷地区でも織機川下流の宮内扇状地西扇側の自然堤防に前期の掛在家遺跡、中期の中野遺跡・塩釜遺跡、晩期の塩釜前遺跡などがみられる。

隣接する漆山地区池黒周辺の遺跡と合わせると縄文遺跡の集中がうかがえる。さらに経塚山北部の平野でも平野Ａ・Ｂ遺跡で中期～晩期の資料が採集されている。

弥生時代

織機川下流の宮内扇状地西扇側の自然堤防に弥生時代の遺跡が散見される。砂塚の塩釜前遺跡では環状石斧、掛在家遺跡では後期の土器やアメリカ型石鏃が発見されている。織機川対岸の漆山池黒の庚壇遺跡では後期の竪穴住居１棟が検出され、吉野川旧河道沿いの沖郷・萩生田遺跡からは中期後葉の石包丁が発見され、沖郷郡山の沢田遺跡から後期の天王山式併行の土器、百刈田遺跡から中期後葉の墓跡が十数基検出されている。これらから宮内扇状地扇端部周辺に弥生時代の水田稲作集落が数多く展開していたことが明らかになった。

また、漆山須刈田の大野平遺跡は若松山の麓にあり、標高 461 mの高地であるが、後期のアメリカ型石鏃が発見されている。土器その他の遺物出土がなく、居住したとは考えられないが、弥生人の狩猟の場でなかったかとみられている (佐藤鎭雄 2011)。

古墳時代

赤湯の長岡に４世紀後半に築かれた稲荷森古墳は全長 96 mの東北有数の規模をもつ大型前方後円墳である。長岡山遺跡には方形周溝墓を有する集落があるなど、近隣には古墳時代の遺跡が多い。赤湯・三間通の諏訪前遺跡では発掘調査により４世紀後半の集落が発見され、稲荷森古墳の西方１～２ｋｍの範囲には古墳時代の集落遺跡群が分布し、４世紀の方墳・方形周溝墓が検出された大塚遺跡、円墳が発見された中落合遺跡、５世紀の竪穴住居１棟を検出した沢田遺跡、筑形木製品 (古墳時代の弦楽器) などの特色ある出土品を多出した百刈田遺跡などがあり、これらの遺跡および近辺では６世紀の土器も採集されている。

また、宮内扇状地扇端から河間低地にかけての沖郷地区の遺跡群は、さらに低地の下方に広がり、吉野川旧河川と最上川の合流点に近い宮崎の植木場一遺跡で６世紀前半の古墳が１基検出されている。

さらに宮内扇状地西部の織機川流域でも、扇状地側縁の扇端部～河間低地の自然堤防にも古墳時代遺跡がみられる。梨郷・砂塚の清水ノ下遺跡や掛在家遺跡は後期・６世紀の住社式併行の土器が発見されている。天王遺跡では４世紀代の大型円墳が２基検出されている。

こうした平地の状況に対して、沖郷地区の古墳時代遺跡群から２ｋｍ北北東にある蒲生田山で４世紀の前方後方墳２基が検出され前方後円墳１基が発見されている。また、梨郷でも経塚山から竜樹山にかけて、天王山古墳群、竜樹山古墳群、経塚山古墳群、稲荷山古墳群が分布調査で発見されている。円墳・方墳・前方後円墳・前方後方墳とみられる形状が略側されているが、いずれも山頂から南向きに走る尾根の稜線に並んで築造されており平地からの比高が高く、５～６世紀代の古墳が主体をなすと思われるが、一部前方後方形のものもあり４世紀代に遡及する可能性もある。測量・発掘調査によって正式決定される日が待たれている (佐藤鎭雄 2011)。

奈良・平安時代

飛鳥期の倭王権政府の置賜進出によって、陸奥国優嵜曇評が設置され、米沢盆地を貫流する最上川の東部・北部に評衙や優嵜曇柵など政府の出先機関の施設ができたとみられている。大在家遺跡・高安窯跡など、高畠町小郡山遺跡群や沢田遺跡など南陽市郡山遺跡群、西町田下遺跡など上郷・中田遺跡群が発掘調査によって明らかにされている。

南陽市郡山遺跡群の沖郷・郡山にある沢田遺跡では７世紀末から８世紀にかけての竪穴住居が２棟検出されている。

８世紀前葉の和銅５年 (712) には出羽建国と共に置賜郡が設置されるが、８世紀代には中落合遺跡や沢口遺跡などで区画施設を有する掘立柱建物群や竪穴住居が確認されている。これらの遺跡は９世紀にかけてしだいに増え、郡山周辺に置賜郡衙が設置されたのでないかとみられている (佐藤鎭雄 2010)。８世紀後半にはこれらの遺跡群を含む広大な宮内扇状地に条里制遺構が推定され、郡山の矢野目館遺跡からそれに伴う道路状遺構や溝跡が検出されている。

また、条里制遺構の北端にあたる蒲生田山・上野山・二色根山・大沢山・秋葉山などの南・東斜面には、７世紀末から８世紀半ば過ぎまで築造された横穴石室の終末期古墳群が形成された。これらは総称して赤湯古墳群と

呼ばれているが、かつては 500 余基あったとも記録されている。

梨郷にも平地にはこの時期の遺跡がいくつかあるが、この一帯は置賜郡宮城郷と呼称され、9 世紀後半の漆紙文書にも登場する (佐藤鎭雄 2010)。また、宮城郷郡山に置賜郡衙があったとみられる 8 世紀後半から 9 世紀にかけて操業したとみられる平野窯跡では発掘調査や試掘調査で 2 基の窯が確認されている。

一方、梨郷や漆山には平安時代には開かれたとみられる寺院（当時は真言宗、現在は曹洞宗）や、神社もあるが、梨郷宮城では火葬墓が確認され、蔵骨器が発見されている。

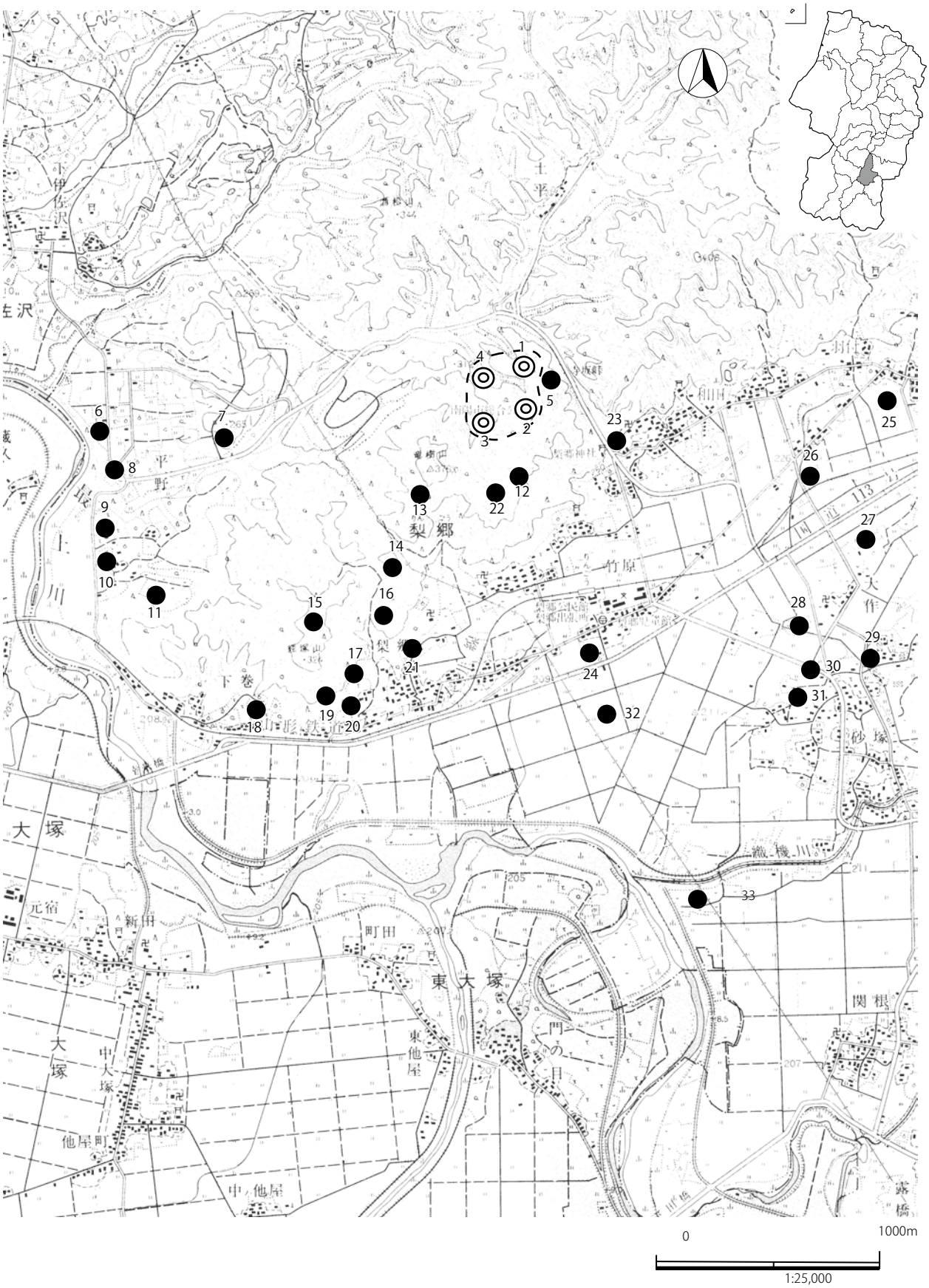
この他、いくつかの遺跡で平安時代の遺構や遺物が検出され、連綿と続く歴史性の高い環境がみえる。

引用・参考文献

菅井敬一郎 1990 『南陽市史上巻』南陽市史編纂委員会
佐藤鎭雄　1990 『南陽市史上巻』南陽市史編纂委員会
佐藤鎭雄　1987 『南陽市史考古資料編』南陽市史編纂委員会
山内清男　1974「矢柄研磨器について」『日本考古学選集』21 築地書館
佐藤鎭雄・秦昭繁 2010「環大谷地遺跡群の探究」うきたむ考古第 14 号
佐藤庄一ほか 1990 『押出遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 150 集
佐藤鎭雄 2008 『出羽国ができるころ』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐藤鎭雄 2010 『平安初頭の南出羽考古学』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐藤鎭雄 2004「稲荷森古墳」『出羽の古墳時代』高志書院
錦 三郎 1968 『赤湯町史』赤湯町史編さん委員会

表 3　遺跡位置図

番　号	遺跡名	種　別	時　代
1	牛ヶ首Ａ・Ｂ	散布地	平安
2	石ヶ窪Ａ・Ｂ	散布地	縄文・平安
3	雨沼	散布地	縄文・平安
4	蕗畑	集落跡	縄文・奈良～平安
5	金山	散布地	縄文
6	平野Ｂ	散布地	縄文
7	平野Ｃ	散布地	縄文
8	平野Ａ	集落跡	縄文
9	中島平	散布地	縄文
10	梨郷古墳群	古墳	奈良
11	平野古窯跡	窯跡	平安
12	天王山古墳群	古墳	古墳
13	竜樹山古墳群	塚	中世
14	稲荷山古墳群	塚	中世
15	経塚山古墳群	塚	中世
16	梨郷上館	館跡	中世
17	小山Ａ	散布地	縄文
18	経塚山南	散布地	縄文
19	小山西	散布地	縄文
20	小山Ｂ	散布地	縄文
21	宮城墳墓	墳墓	中世
22	ヌゲッポ	散布地	縄文
23	羽黒堂	散布地	縄文
24	蔵庭	散布地	奈良
25	松木壇	集落跡	奈良～平安
26	前田	散布地	縄文
27	西高田	散布地	平安
28	四百刈	散布地	縄文
29	中野	散布地	縄文・平安
30	塩釜	集落跡	縄文
31	塩釜前	散布地	縄文～弥生
32	清水ノ下	散布地	古墳
33	北徳田	散布地	縄文



第 22 図　遺跡位置図 (国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「羽前小松」使用)

Ⅲ　遺跡の概要

1　検出遺構と出土遺物

牛ヶ首Ａ遺跡

寺坂峠の西南西約 200 ｍに位置する。北部は山中の沢で、南部は山腹に整地跡が見られる。以前は水田に利用されていた記録があるが、調査当時は作られていない。やや高いところには、斜面を削って整地したような跡も見られる。

遺跡範囲は南北に長く、北からＡ区・Ｂ区・Ｃ区として調査を行った。

Ａ区

検出された遺構は、土坑（ＳＫ）4 基、溝跡（ＳＤ）1 基である。土坑は、大きなものは長径２ｍ前後、小さいものは１ｍ前後、深さは 20 ㎝から 40 ㎝程である。

出土遺物は整理箱にして 1 箱である。土器片のみで、古代の須恵器と土師器である。調査区南西側ＳＫ４とその周辺、ＳＫ５の西側の第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけて、平安時代の遺物がまとまって出土した。遺物はほぼ水平に分布しているため、生活面の一つと思われ、平安時代に小さな集落が営まれたことが考えられる。

また、調査区の西端、地表面下 45 ㎝のところから縄文土器片が出土している。石器もわずかに出土しているが、そのほとんどは未成品である。掻器と思われるものが１点出土している。

Ｂ区

調査区全体に十字ベルトをかけて掘り下げを行った。遺構は、炉跡（ＳＬ）７基、土坑４基、溝跡１基、ピット（ＳＰ）15 基である。遺構の配置状況から、これは周溝を巡らせた竪穴式住居と思われる。住居の大きさは約４ｍ×３．７ｍ程で、掘り込みは見られない。

遺物は調査区全体から検出された。整理箱数にして２箱程度で、平安時代のものと思われる須恵器と土師器である。復元できたものは、須恵器の坏が４点、土師器の坏が７点、同じく甕が４点となっている。須恵器は９世紀中頃、土師器は９世紀後半の、いずれも平安時代初期のものと思われる。ＳＫ 10 の床面からは、敷石のようなものが出土しているが詳細は不明である。

Ｃ区

検出された遺構は土坑４基、炉跡１基、ピット２基である。これらの遺構は調査区中央部、谷側に集中している。なお、炉跡のみ、他の遺構より 60 ㎝程上の面から検出されている。

遺物は出土していない。

牛ヶ首Ｂ遺跡

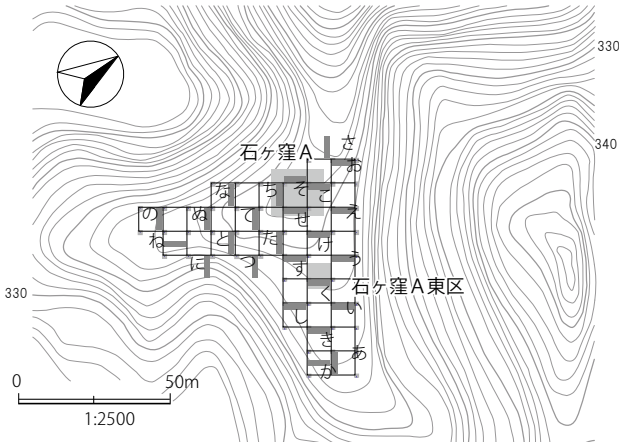
寺坂峠の西方約 300 ｍ、山の裾部分に位置している。山裾を整地したところに、平面プランほぼ円形の低い小型のマウンドが数基認められたため、その性格を明確にするべく調査を行った。

四角形に並んだマウンド４基中、３基について四半掘りを行った。その結果、遺構・遺物とも確認できなかった。当初はその形状から塚状遺構と思われていたが、調査結果から、これらはテラス状遺構ではないかと考えられる。

石ヶ窪Ａ遺跡

竜樹山頂の北東約 450 ｍに位置する。２つのやや広く緩やかな沢が合流し、ほぼ平地状を呈している。第 23 図のようにトレンチ掘りを行い出土した遺物を分析、精査地を決定した。

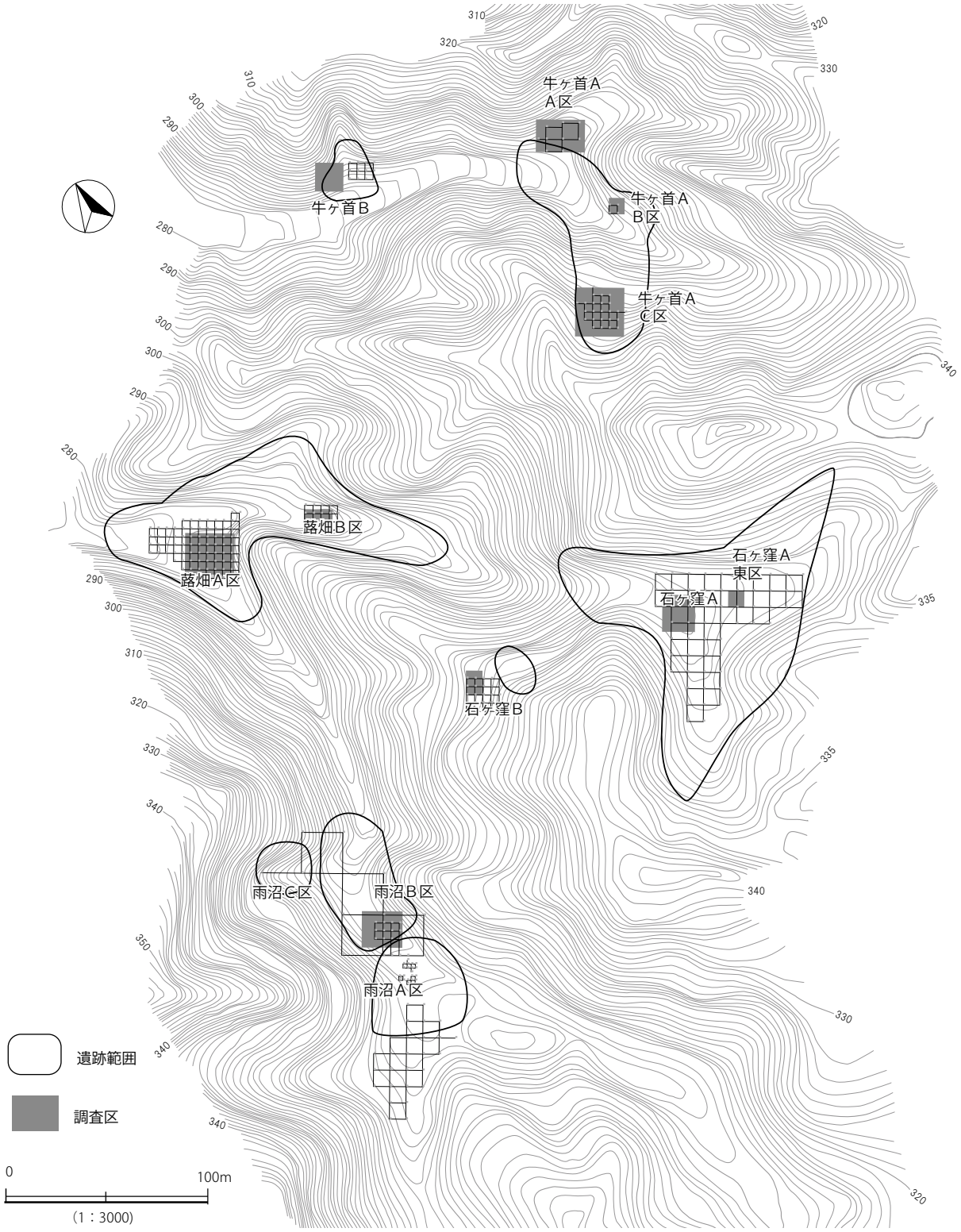
遺構は第Ⅱ層から第Ⅳ層にかけて、土坑８基、炉跡９基、ピット１基が検出された。東区からは正確不明遺構（ＳＸ）が２基検出された。土坑は、直径１ｍ～ 1.7 ｍ程である。炉跡は概ね直径１ｍ程度で、特に調査区南部



第 23 図　石ヶ窪Ａ遺跡　調査範囲図・トレンチ配置図

では、５基まとまって検出されている。

出土遺物は整理箱で 18 箱である。その内の半数が石器や石製品であり、土器の殆どが縄文土器である。主に第Ⅳ層から出土している。ＳＬ７からは、焼けた跡のある縄文土器片が、また、ＳＬ２からも縄文土器片が出土しているが、遺物の大半は遺構外の出土であった。接合できない破片が多く、復元できたものは、深鉢 1 点のみである。石器は、製品で 120 点程度である。石匙や石篦、石鏃の他に、すり石、凹石、石皿等が出土している。また、ＳＫ５の南西からは玦状耳飾りと臼玉が出土している。なお、東区からは十数点の縄文土器小片が出土しているのみである。



第 24 図　総合公園内遺跡群　遺跡配置図

石ヶ窪Ｂ遺跡

竜樹山頂の北東約 450 ｍに位置する。２つのやや広く緩やかな沢が合流し、ほぼ平地状を呈している。第 23 図のようにトレンチ掘りを行い出土した遺物を分析、精査地を決定した。

遺構は第Ⅱ層から第Ⅳ層にかけて、土坑８基、炉跡９基、ピット１基が検出された。東区からは正確不明遺構（ＳＸ）が２基検出された。土坑は、直径１ｍ～ 1.7 ｍ程である。炉跡は概ね直径１ｍ程度で、特に調査区南部では、５基まとまって検出されている。

出土遺物は整理箱で 18 箱である。その内の半数が石器や石製品であり、土器の殆どが縄文土器である。主に第Ⅳ層から出土している。ＳＬ７からは、焼けた跡のある縄文土器片が、また、ＳＬ２からも縄文土器片が出土しているが、遺物の大半は遺構外の出土であった。接合できない破片が多く、復元できたものは、深鉢１点のみである。石器は、製品で 120 点程度である。石匙や石箆、石鏃の他に、すり石、凹石、石皿等が出土している。また、ＳＫ５の南西からは玦状耳飾りと臼玉が出土している。なお、東区からは十数点の縄文土器小片が出土しているのみである。

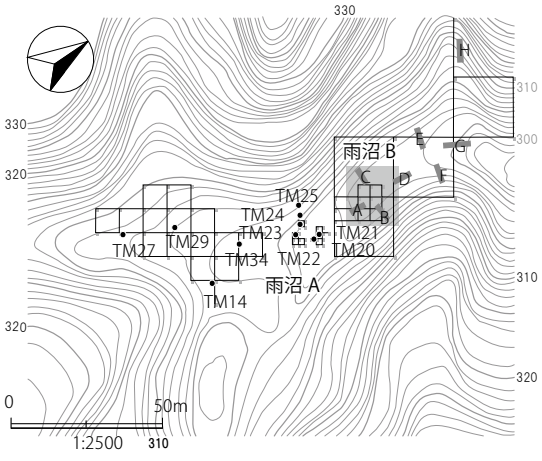
雨沼遺跡

竜樹山の東麓にあり、三方から沢が合流する広く穏やかな平地に立地する。すぐ南側が天王山古墳群である。

Ａ区

昭和60年度に行った分布調査で、直径２～３ｍ程で、平面プランはほぼ円形、高さ 30 ㎝程度の小マウンドが 30 基ほど確認された。これらのマウンドの性格は不明で、自然地形が誤認された可能性も否定できず、それらを明確にすべく調査を行った。

ＴＭ 20・21・24 は、四分法で掘り下げ、ＴＭ 22・23・25 は半掘した。ＴＭ 20 は事前に溝が確認できたため、四半掘部を広げたが、山道に伴うもののようであった。ＴＭ 20 と 21 は端が接しており、掘り下げた部分から土坑が検出された。埋土はほぼ均質で遺物は無い。ＴＭ 24 は遺構が確認できなかった。翌年度、ＴＭ 14・27 を、十字トレンチを入れて掘り下げたが、遺構・遺物とも検出されなかった。ＴＭ 14 は、同時期に調査



第 25 図　雨沼遺跡　マウンド位置図・トレンチ配置図

した天王山古墳群のＴＭ３に類似している。ＴＭ３は、斜面を整地したテラス帯の上に表土を主体として作った塚と思われる遺構である。

土坑が伴うものについては墳墓の可能性は否定できない。しかし、現状ではこれらは地山に掘り込んだ土坑を伴う塚であるという結論にならざるを得ない。

なお、遺物が出土していないため、年代を特定することはできなかった。

Ｂ区

第 25 図のように精査地選定用試掘トレンチ (２ｍ × ７ｍ) を８箇所入れ、Ａから Ｈまでの番号を振った。

その結果、Ａ・Ｂトレンチからは遺構が検出され、またＣ・Ｄトレンチからは遺物が多く出たためこの付近を精査地とした。

遺構は、土坑４基とピット 13 基である。土坑はおおむね小規模で長径 60 ㎝前後である、ピットの直径は大きいもので 40 ㎝程で、深さは浅いもので数㎝、深いもので 20 ㎝程度であり、調査区の南側に集中している。

遺物包含層は、地表面より 70 ㎝～ 100 ㎝付近の第Ⅳ層と第Ⅴ層、遺構面は第Ⅴ層より検出されている。主に、調査区中央部を南北に横切る形で出土している。

出土遺物は整理箱１箱弱で、全て遺構外からの出土である。Ｄトレンチからは縄文土器（第 47 図２）と、平安時代末頃のものと思われる手捏ねのかわらけ（同５）が出土した。表採ではあるが、縄文後期中葉の加曽利ｂ式と思われる土器も出土している（同１）石器も少数出土しているが、未成品や剥片のみである。遺物のあり方からして集落跡と思われるが、それを確定できるような

遺構は見つからなかった。

なおＣ区については、分布調査でテストトレンチＨを入れ、その後その付近のトレンチ掘りを行ったが、いずれも遺構・遺物とも検出されなかったため、それ以降の詳細な調査は行わなかった。

蕗畑遺跡

竜樹山頂の北東約 350 mに位置する。北西にひらく２つの沢が合流し、小平地状を呈するところが中心となっている。

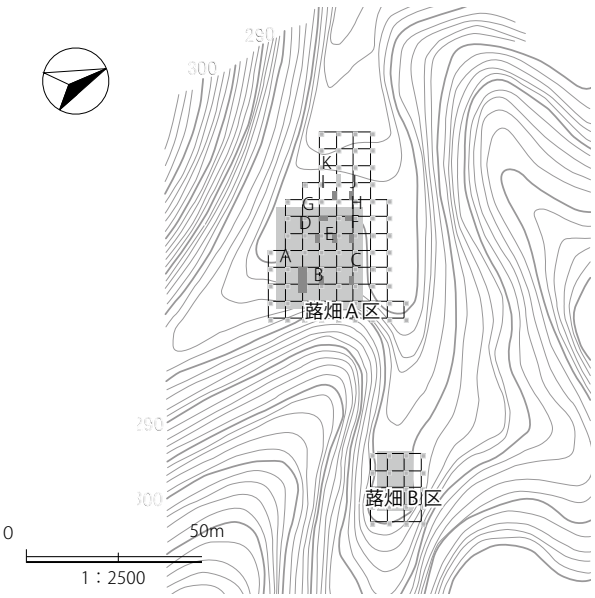
Ａ区

第 26 図のようにＡからＫまでの試掘トレンチを設置、全般に遺物が多く出土した。地形的には、Ａ・Ｂ・Ｃの山裾に遺物が多く、また北側のＤからＫは黄褐色土層で、表土ときちんと別れているため盛土と思わる。こちらは遺物も少ないことから、南側を精査地に決定した。

検出された遺構は、土坑 13 基、ピット７基である。

遺物は整理箱４箱である。ＳＫ７・14・15・17・18から縄文土器が出土している。またＳＫ９からは縄文土器の深鉢が横倒しの状態で出土した（第 57 図 18）。

石器は製品で 40 点程で、凹石や叩き石、石篦、石鏃などの他に打製石斧が出土している。一方調査区の南端部分からは、平安時代のものと思われる須恵器と土師器が出土している。これらの須恵器の一部には墨書の跡が見られたが、文字は不明であった。また、蓋１点は内側全体に墨痕があり、転用硯として使用されたものと思われる。



第 26 図　蕗畑遺跡 マウンド位置図・トレンチ配置図

この調査の翌年、工事中に調査区の西端付近から古代の炭窯跡らしきものが発見された。内部からは木炭が検出されている。

Ｂ区

遺構は、竪穴住居（ＳＴ）１基、その内部にに土坑１基、炉跡１基、ピット８基。

南側に性格不明遺構１基、その内部と周辺に土坑１基、炉跡１基、ピット３基、溝跡１基。その他に、調査区東側に土坑２基が検出されている。

北側の遺構は３ｍ×３．５ｍ程度の平面プラン方形の竪穴住居である。

ＳＸ１は、平面プランが不整の楕円形をしており、また壁もはっきりしない。しかし、炉や煙道と思われる溝、柱穴とも考えられるピットを伴っていることから、住居跡の可能性もある。

切り合い状況から見て、ＳＸ１よりもＳＴ１の方が新しいものと思われる。また、ＳＴ１の炉跡からは、袖石が出土している。

ＳＴ１の壁の上面から床面までの高さは最大で 71 ㎝である。地表自体が北の方向に傾斜しており、床面も、北側はなだらかに傾斜している。

遺物は整理箱１箱程度で、主に奈良・平安時代の土師器と須恵器である。

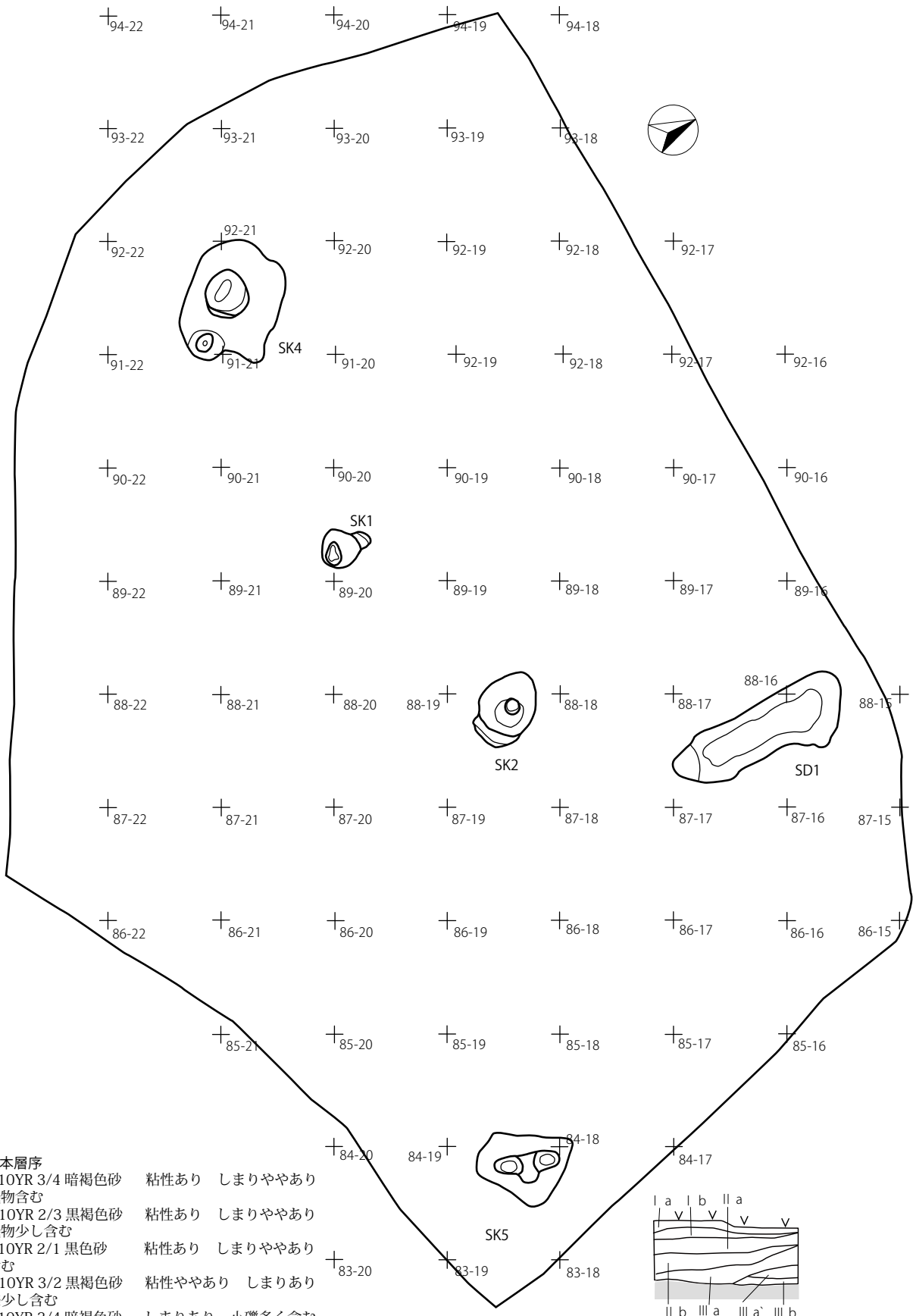
ＳＴ１西部から須恵器坏２点、南部の炉付近から土師器の甕が潰れた状態で出土している（第 57 図 16）。住居跡の可能性もある。

切り合い状況から見て、ＳＸ１よりもＳＴ１の方が新しいものと思われる。また、ＳＴ１の炉跡からは、袖石が出土している。

ＳＴ１の壁の上面から床面までの高さは最大で 71 ㎝である。地表自体が北の方向に傾斜しており、床面も、北側はなだらかに傾斜している。

遺物は整理箱１箱程度で、主に奈良・平安時代の土師器と須恵器である。

ＳＴ１西部から須恵器坏２点、南部の炉付近から土師器の甕が潰れた状態で出土している（図版番号 16）。



A 区基本層序

Ⅰａ　10YR 3/4 暗褐色砂　粘性あり　しまりややあり　有機物含む

Ⅰｂ　10YR 2/3 黒褐色砂　粘性あり　しまりややあり　有機物少し含む

Ⅱａ　10YR 2/1 黒色砂　粘性あり　しまりややあり　小礫含む

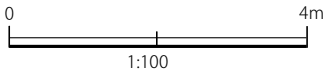
Ⅱｂ　10YR 3/2 黒褐色砂　粘性ややあり　しまりあり　小礫少し含む

Ⅲａ　10YR 3/4 暗褐色砂　しまりあり　小礫多く含む

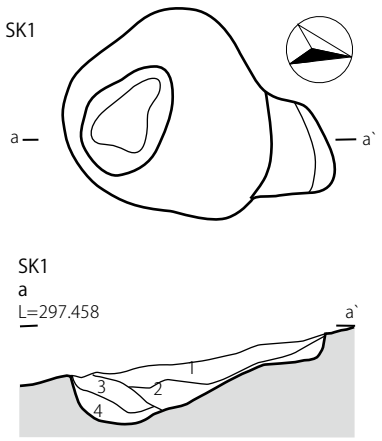
Ⅲａ'　10YR 3/4 暗褐色砂　しまりあり　礫、黄色土ブロック含む

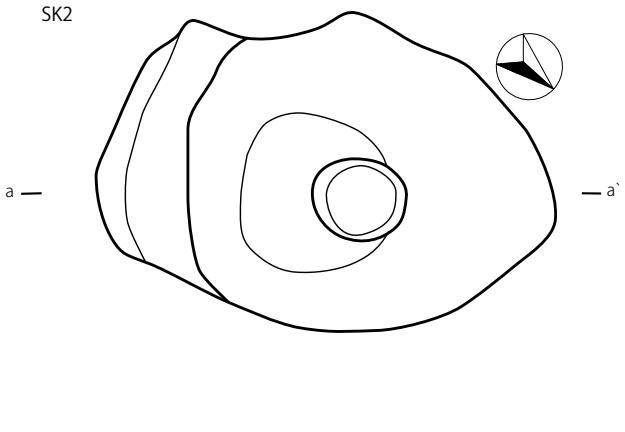
Ⅲｂ　10YR 5/8 黄褐色砂　しまりあり　小礫含む

A 区調査区基本層序



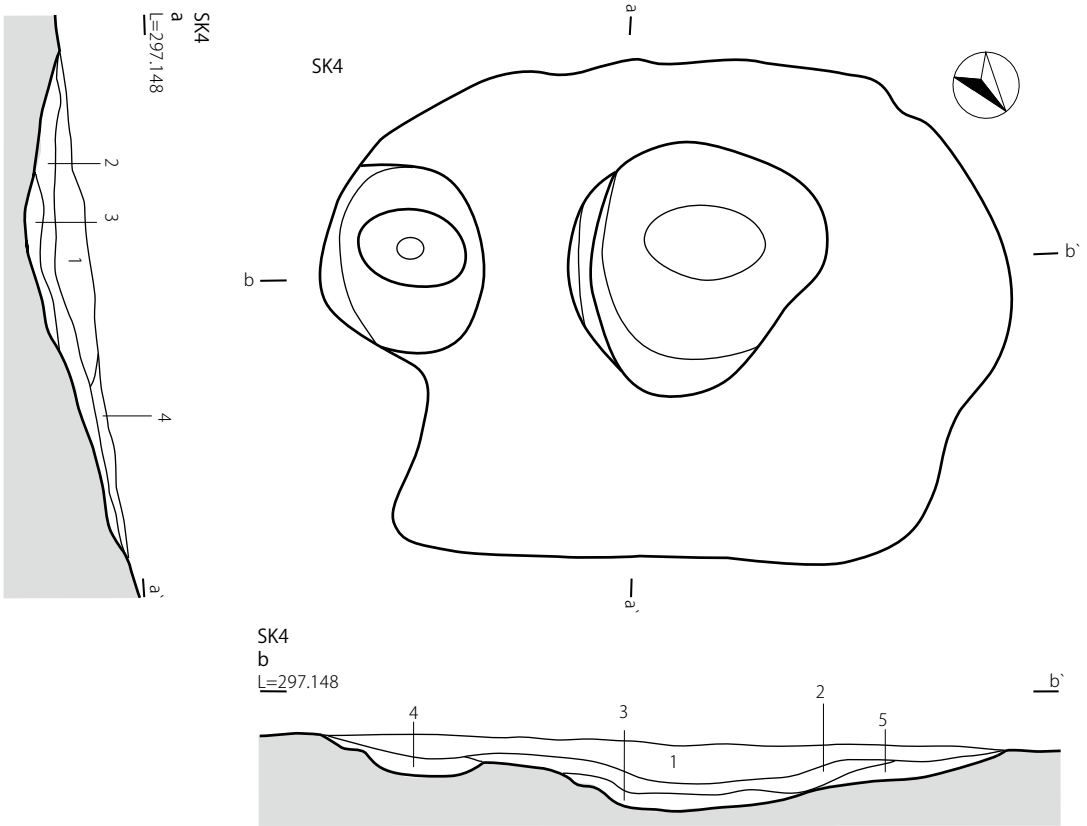
第 27 図　牛ヶ首 A 遺跡　A 区遺構配置図



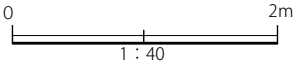


土坑　SK1
1　R 2/1 赤黒色砂　粘性やや有り　しまりなし　小礫含む
2　2.5YR 2/1 赤黒色砂　粘性やや有り　しまりやや有り
3　10YR 5/8 黄褐色砂　粘性やや有り　しまり有　小礫含む
4　10YR 4/3 にぶい黄褐色砂　しまり有

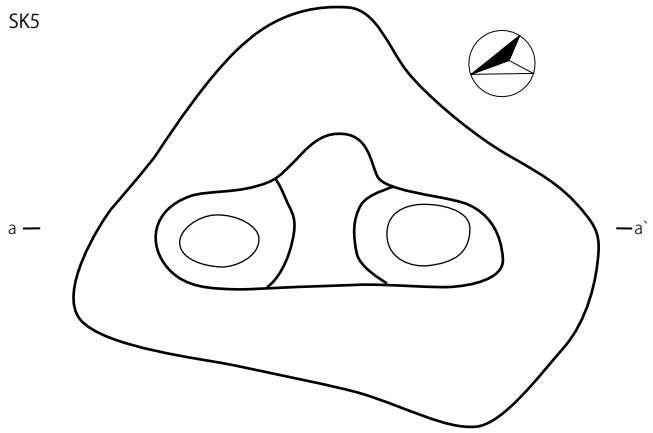
土坑　SK2
1　10YR 5/6 黄褐色砂　粘性やや有　しまりなし　黒褐色土ブロック含む
2　7.5YR 3/1 黒褐色砂　粘性やや有　しまりなし
3　10YR 5/8 黄褐色砂　粘性やや有　しまりやや有
4　10YR 5/8 黄褐色砂　粘性やや有　しまり有　黒色土ブロック含む
5　7.5YR 2/1 黒色砂　粘性有　しまり有
6　10YR 5/8 黄褐色砂　粘性有 しまり有　小礫含む

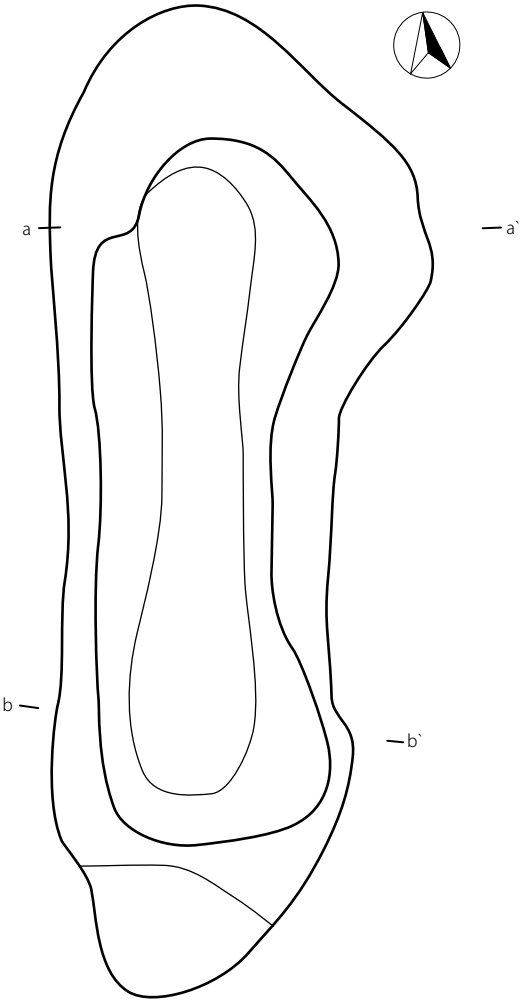


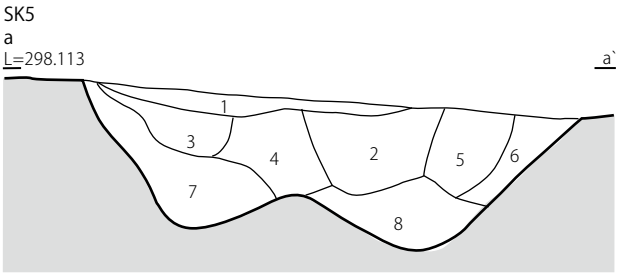
土坑　SK4
1　10YR 2/3 黒褐色砂　粘性やや有　しまり有　黄褐色土ブロック含む
2　10YR 5/4 にぶい黄褐色砂　粘性やや有　しまり有　1 のブロック含む
3　10YR 3/4 暗褐色砂　しまり有
4　10YR 1.7/1 黒色砂　粘性有　しまりなし　黄褐色土ブロック含む
5　10YR 4/3 にぶい黄褐色砂　しまり有



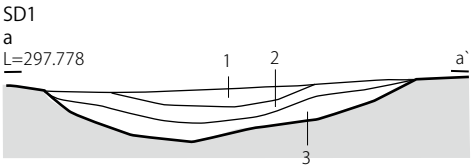
第 28 図　牛ヶ首 A 遺跡　A 区土坑

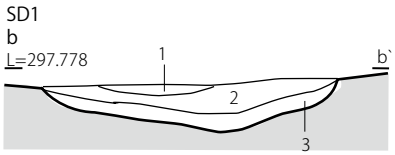






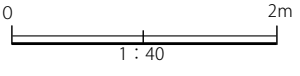
土坑　SK1
1　R 2/1 赤黒色砂　粘性やや有り　しまりなし　小礫含む
2　2.5YR 2/1 赤黒色砂　粘性やや有り　しまりやや有り
3　10YR 5/8 黄褐色砂　粘性やや有り　しまり有　小礫含む
4　10YR 4/3 にぶい黄褐色砂　しまり有



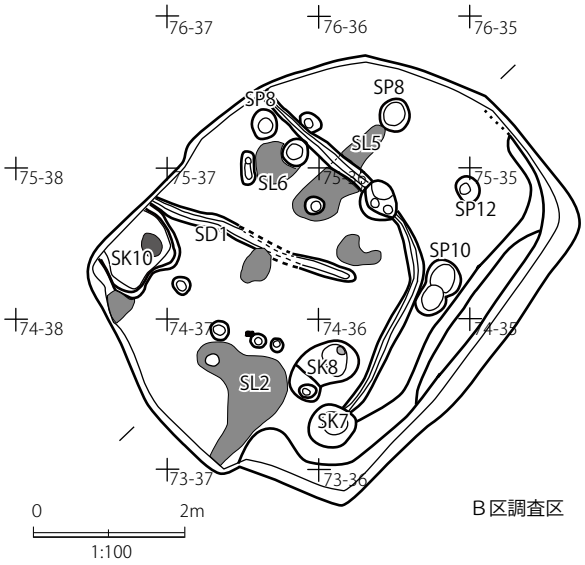


溝　SD1 a-a`
1　10YR 7/8 黄橙色砂質土　粘性なし　しまりなし
2　5YR 2/2 黒褐色砂　粘性やや有　しまり有　小礫含む
3　5YR 2/1 黒褐色砂　粘性やや有　しまり有　小礫含む

溝　SD1 b-b`
1　5YR 2/2 黒褐色砂　粘性やや有　しまりなし　小礫含む
2　5YR 2/2 黒褐色砂　粘性やや有　しまり有　小礫、黄色土ブ ロック含む
3　5YR 2/1 黒褐色砂　粘性やや有　しまり有　小ブロック含む

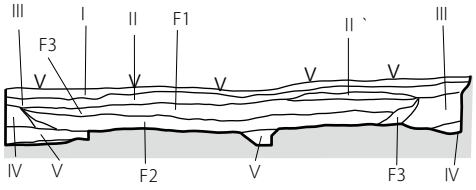


第 29 図　牛ヶ首 A 遺跡　A 区土坑・溝



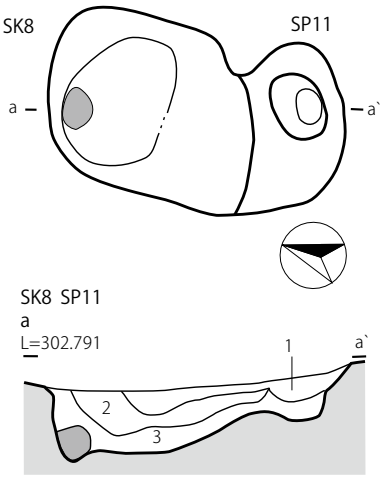
B区調査区

B区調査区基本層序



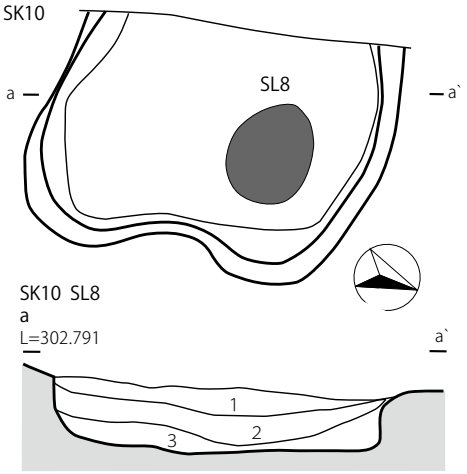
B区　基本層序

Ⅰ	10YR 4/6 褐色	粘性有　しまりなし
Ⅱ	10YR 4/6 褐色	粘性有　しまりやや有
Ⅱ‘	10YR 4/6 褐色	粘性有　ⅡにⅤが混じる
Ⅲ	10YR 2/1 黒色	粘性やや有　　しまりやや有
Ⅳ	10YR 4/3 にぶい黄褐色	しまり有
Ⅴ	2.5YR 6/8 橙色	しまり有
F1	10YR 4/4 褐色	
F2	10YR 4/4 褐色	F1 よりやや暗い
F3	10YR 3/4 暗褐色	Ⅲよりやや暗い



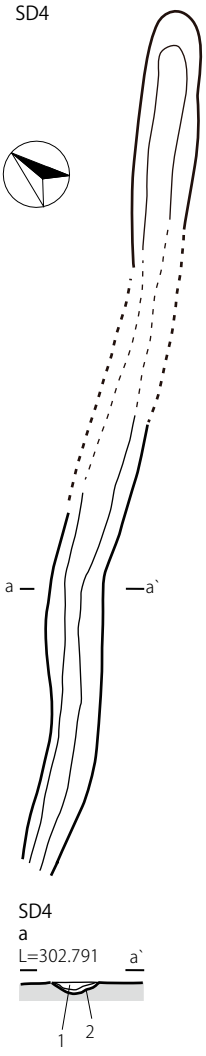
土坑 SK8 柱穴 SP11

1	10YR 2/1 黒色	貼床土混入
2	10YR 3/1 黒褐色	焼土・貼床土混入
3	10YR 3/1 黒褐色	



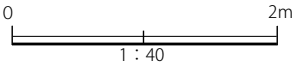
土坑 SK10　炉 SL8

1	7.5YR 4/3 褐色	貼床土混入
2	10YR 3/2 黒褐色	黄色ブロック含む
3	10YR 3/1 黒色	



溝 SD4

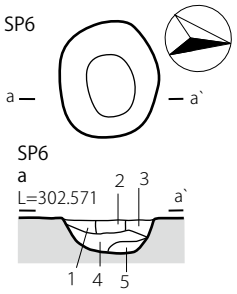
1	10YR2/2 黒色	黄ブロック混入
2	10YR 7/6 明黄褐色	黄ブロック混入



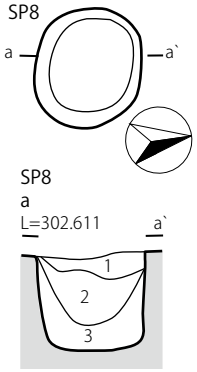
石

焼土

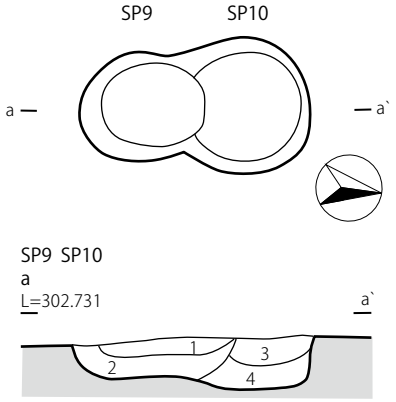
第 30 図　牛ヶ首 A 遺跡　B区遺構配置図　土坑・溝



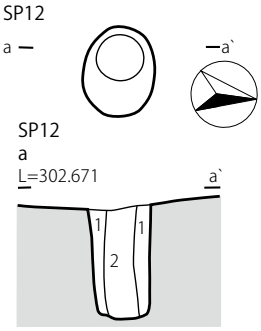
柱穴 SP6
1　5YR 3/1 黒褐色
2　7.5YR 3/1 黒褐色　　黒色土混入
3　10YR 7/4 にぶい黄橙　　黄色土混入
4　5YR 3/1 黒褐色　　黒色土と黄色土がブロック状に混入
5　7.5YR 3/2 黒褐色　　黄色土混入



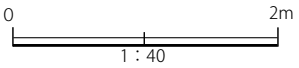
柱穴 SP8
1　10YR 2/1 黒色　　貼床土混入
2　10YR 2/1 黒色　　黄色ブロック含む
3　10YR 2/1 黒色



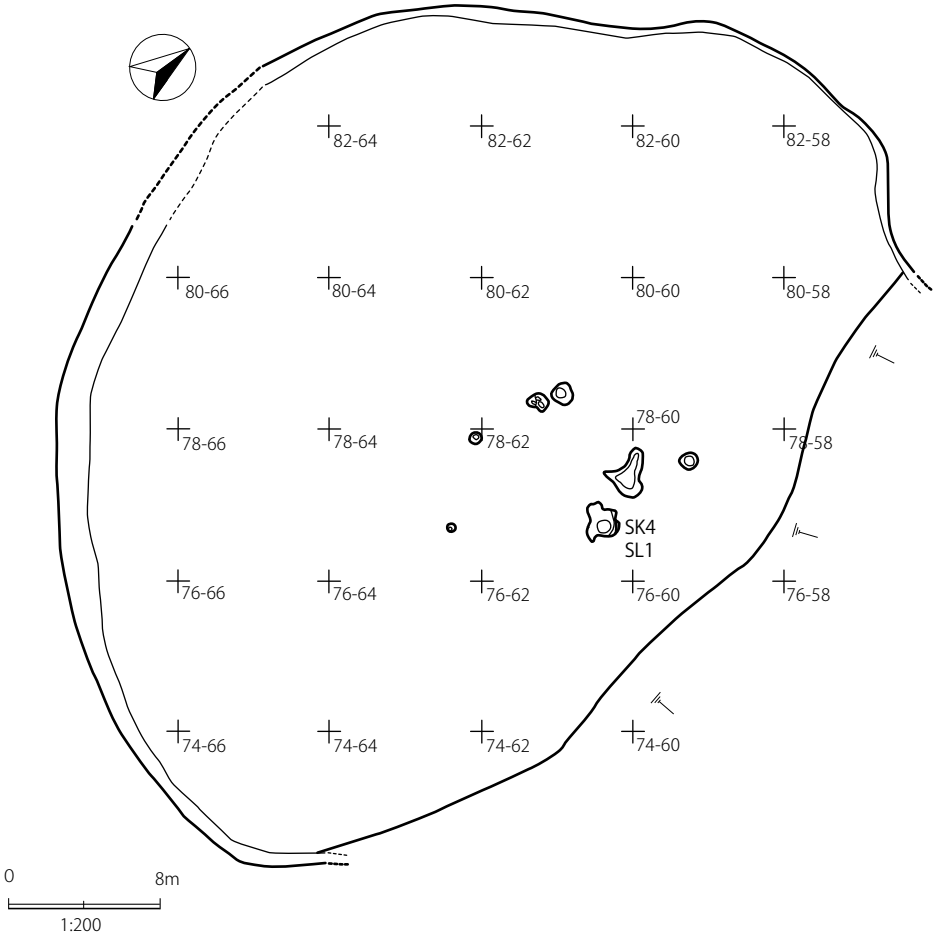
柱穴 SP9・SP10
1　7.5YR 2/1 黒色　　2の土ブロック状に少量混入　貼床土混入
2　10YR 7/6 明黄褐色　　貼床土混入
3　10YR 2/2 黒褐色
4　10YR 2/1 黒色

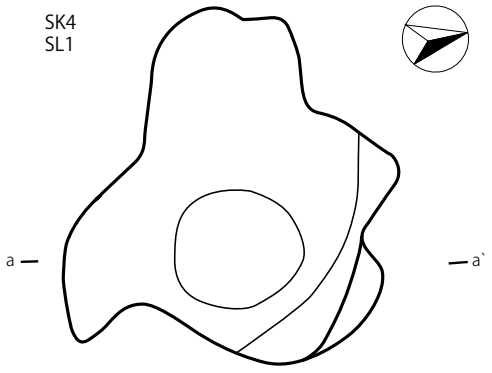


柱穴 SP12
1　10YR 2/ 黒色土　　黄色ブロック含む
2　10YR 2/1 黒色土　　Ⅲ層土混入

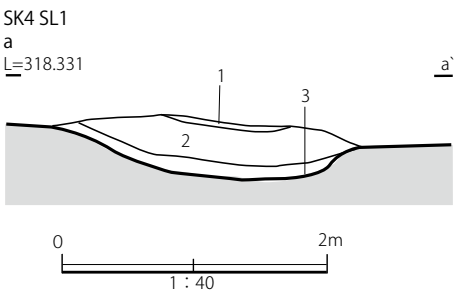


第 31 図　牛ヶ首 A 遺跡　B区　柱穴

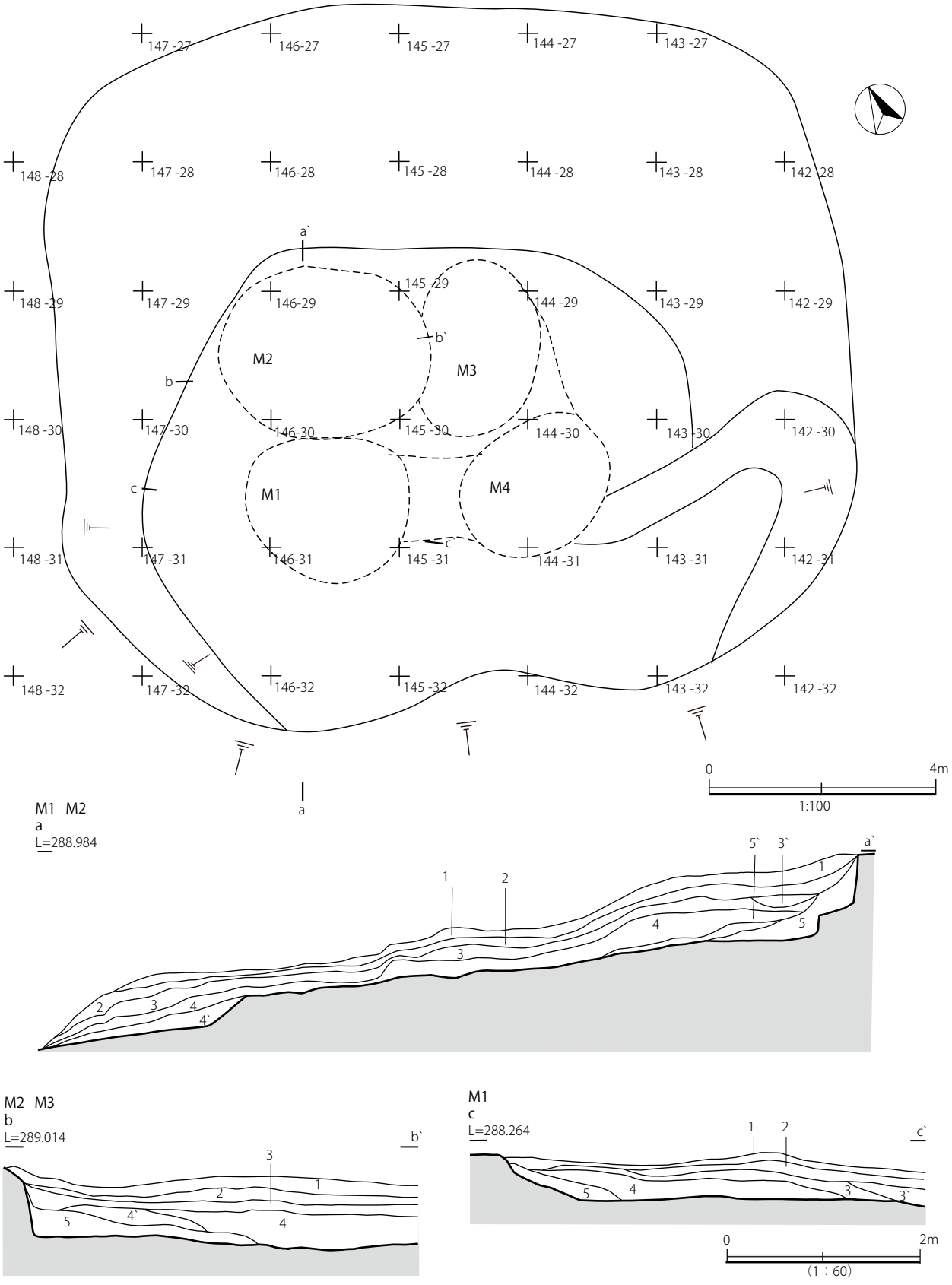




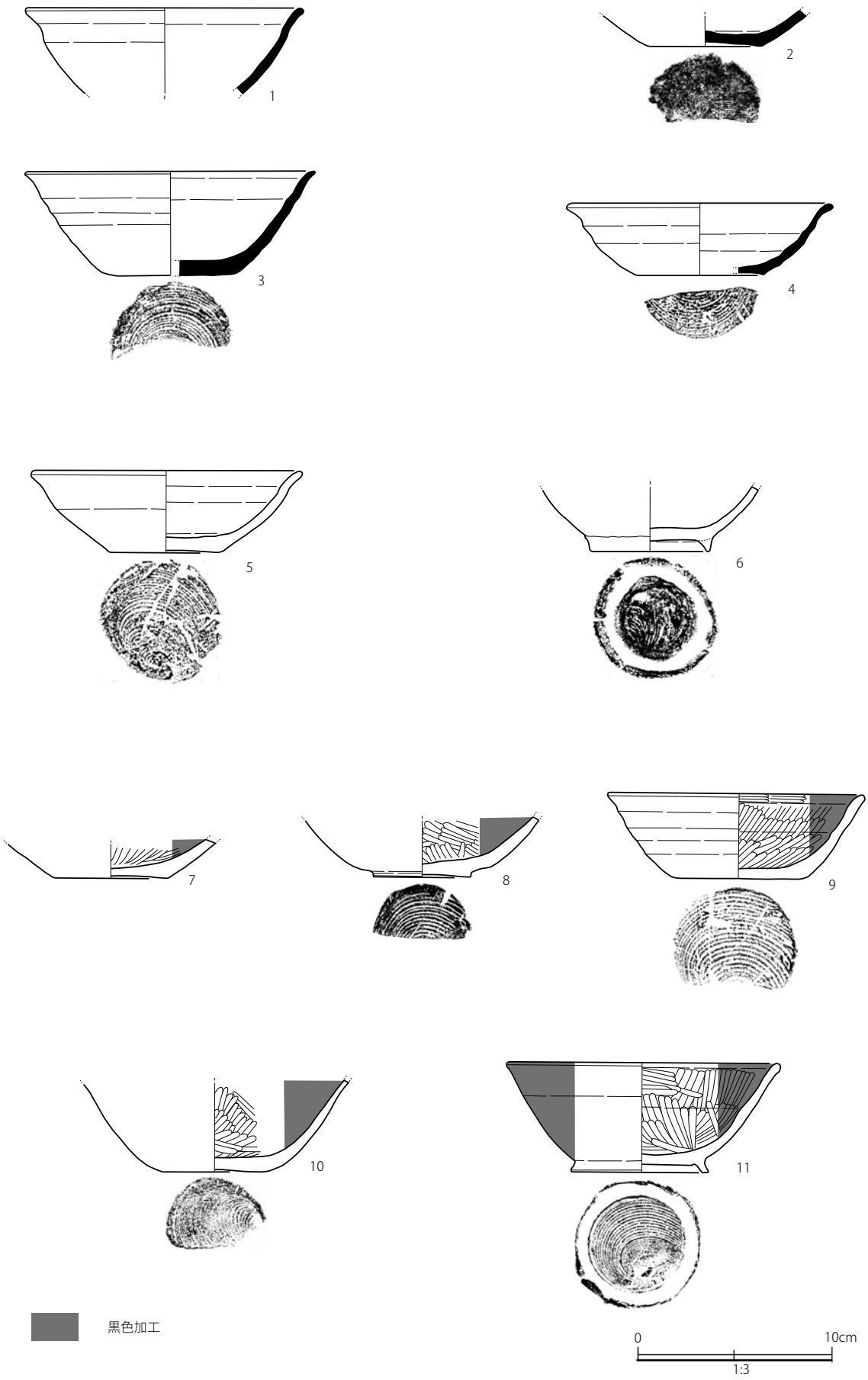
土坑 SK4　炉 SL1
1　5YR 4/6 赤褐色
2　5YR 5/8 明赤褐色
3　5YR 4/8 赤褐色



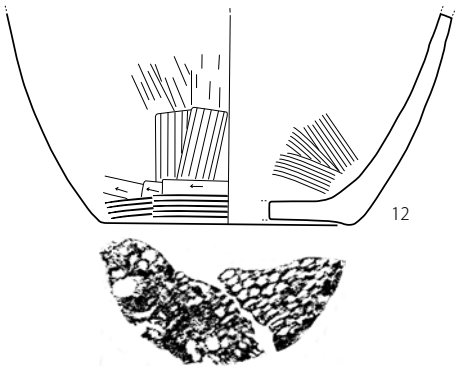
第 32 図　牛ヶ首 A 遺跡　C 区遺構配置図・土坑

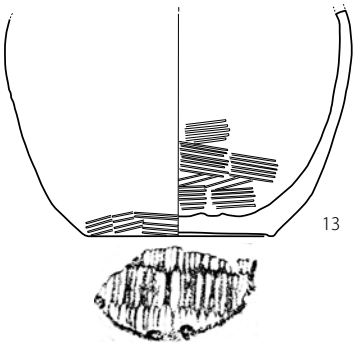


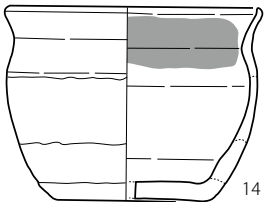
第 33 図　牛ヶ首 B 遺跡　遺構配置図・塚状遺構断面図

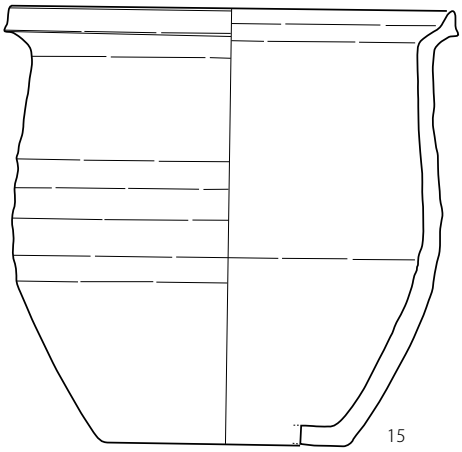


第 34 図　遺物実測図　牛ヶ首A遺跡 (1)

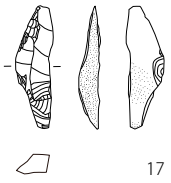


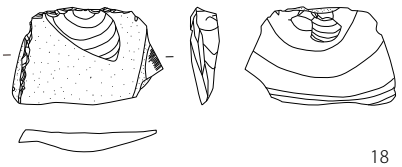






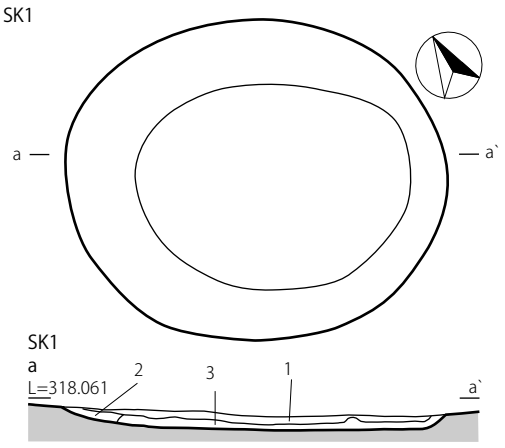
スス付着



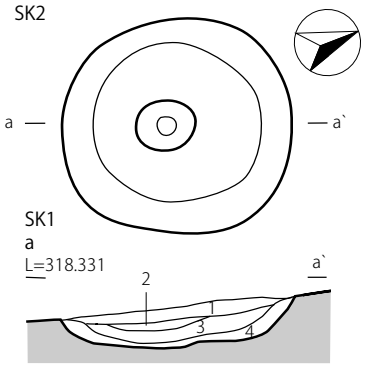


0　10cm
1:3

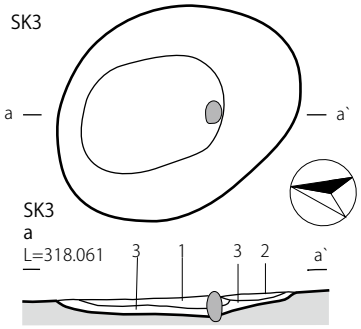
第 35 図　遺物実測図　牛ヶ首 A 遺跡 (2)



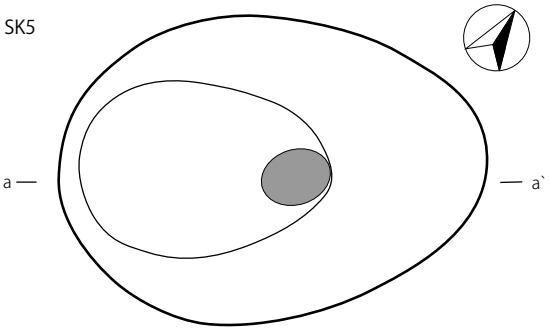
土坑 SK1
1　7.5YR 3/3 暗褐色砂　　小炭化物混入
2　7.5YR 5/8 明褐色砂
3　7.5YR 4/6 褐色砂　　粘性やや有り　小炭化物混入

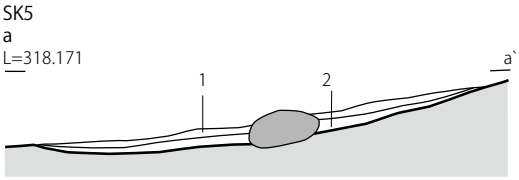


土坑 SK2
1　7.5YR 4/6 褐色荒砂　　しまりやや有
2　7.5YR 5/6 明褐色砂　　しまりやや有
3　7.5YR 4/3 明褐色砂　　しまりやや有
4　7.5YR 8/8 明褐色砂　　しまり有



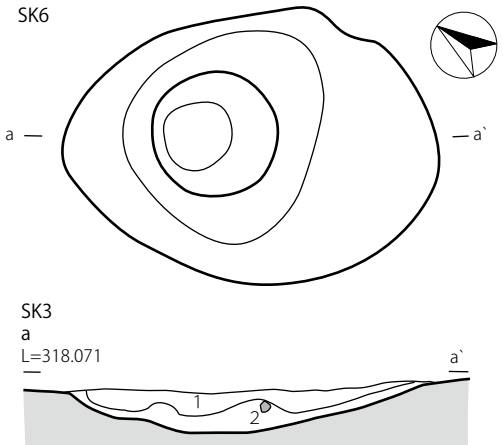
土坑 SK3
1　5YR 2/2 黒褐色砂　　粘性有　しまりやや有
2　5YR 4/8 赤褐色砂　　粘性やや有　しまりやや有
3　5YR 5/8 明褐色砂　　粘性なし　しまりやや有



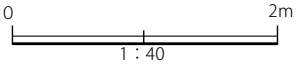


土坑 SK5
1　7.5YR 3/4 暗褐色砂　　しまりやや有
2　7.5YR 4/6 褐色砂　　しまりやや有

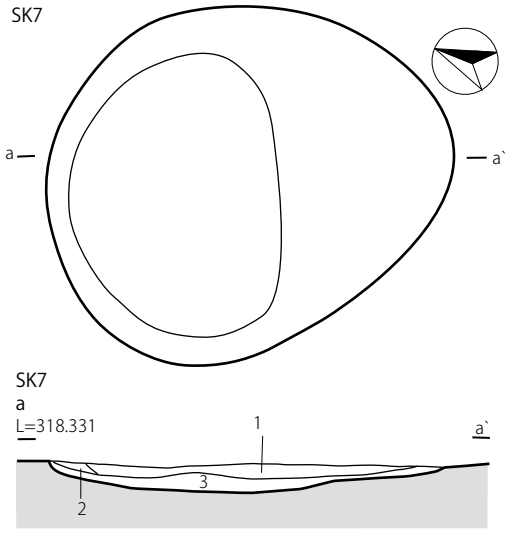
石



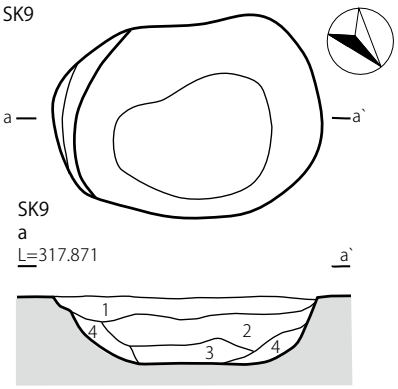
土坑 SK6
1　7.5YR 2/2 黒褐色砂　　粘性有　しまりやや有　炭化物小塊を少し含む
2　7.5YR 4/6 褐色砂　　粘性なし　しまりやや有　1 の小ブロック含む



第 36 図　石ヶ窪Ａ遺跡　土坑

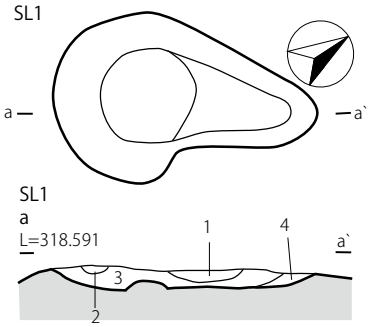


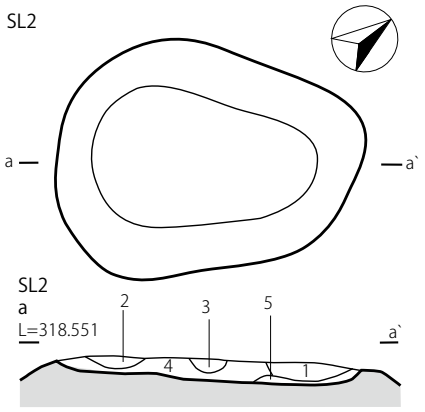
土坑 SK7
1　7.5YR 9/6 褐色砂　　粘性やや有　しまりやや有
2　7.5YR 5/6 明褐色砂　粘性やや有　しまりやや有
3　7.5YR 2/2 黒褐色砂　粘性有　しまりなし

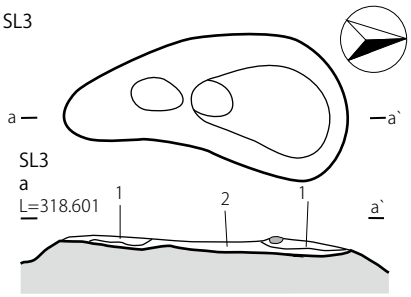


土坑 SK9
1　10YR 3/4 暗褐色砂　粘性有
2　10YR 4/8 褐色砂　　粘性有
3　10YR 4/4 褐色砂　　粘性有
4　10YR 2/3 黒褐色砂　粘性有

炉 SL1
1　2.5YR 4/6 赤褐色微砂　粘性なし　しまりやや有
2　2.5YR 2/3 極暗赤褐色　微砂　粘性やや有　しまりなし
3　2.5YR 3/3 暗赤褐色　　微砂　粘性やや有　しまりなし
4　2.5YR 3/2 暗赤褐色　　微砂　粘性やや有　しまりなし

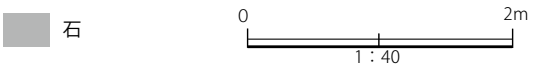




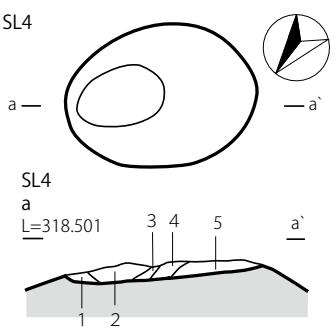


炉 SL2
1　2.5YR 5/6 明赤褐色砂　　粘性やや有　しまり有
2　2.5YR 4/8 赤褐色砂　　粘性やや有　しまりやや有
3　2.5YR 4/4 鈍い赤褐色砂　粘性やや有　しまり有
4　2.5YR 3/3 暗赤褐色砂　　粘性なし　しまり有
5　2.5YR 4/6 赤褐色砂　　粘性やや有　しまりなし

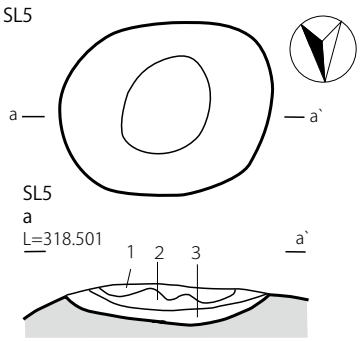
炉 SL3
1　2.5YR 3/4 暗赤褐色微砂　　粘性やや有　しまりなし小炭化物混入
2　2.5YR 2/2 極暗赤褐色微砂　粘性やや有しまりなし



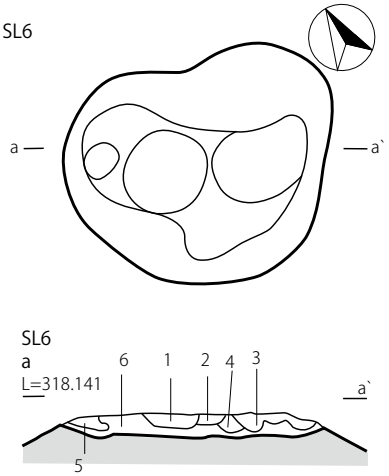
第 37 図　石ヶ窪Ａ遺跡　土坑・炉



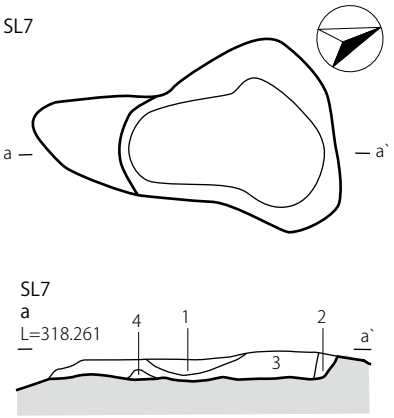
炉 SL4
1　5YR 3/2 暗褐色微砂　粘性有　しまりなし
2　5YR 3/1 黒褐色微砂　粘性有　しまりなし
3　5YR 3/2 暗赤褐色微砂　粘性有　しまりなし
4　5YR 4/6 赤褐色微砂　粘性やや有　しまりなし
5　5YR 3/6 暗赤褐色微砂　粘性やや有　しまりやや有



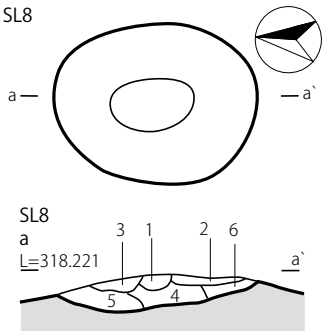
炉 SL5
1　2.5YR 5/6 明赤褐色砂　粘性なし　しまり有
2　10R 4/4 赤褐色砂　粘性やや有　しまりやや有
3　10R 2/3 極暗赤褐色砂　粘性有　しまりなし



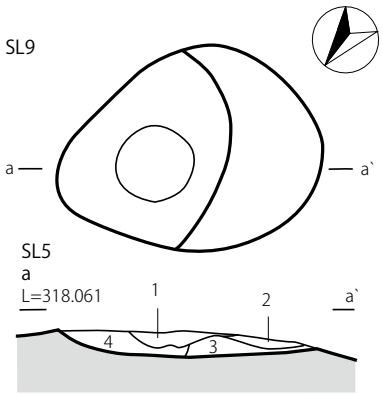
炉 SL6
1　2.5YR 4/6 赤褐色砂　しまり有
2　2.5YR 3/3 暗赤褐色砂　しまり有
3　2.5YR 3/6 暗赤褐色砂　しまりやや有
4　2.5YR 3/2 暗赤褐色砂　しまりやや有
5　2.5YR 3/2 暗赤褐色砂　しまりやや有
6　2.5YR 2/1 赤黒色砂　粘性有



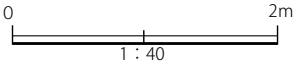
炉 SL7
1　2.5YR 3/3 暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりやや有
2　2.5YR 3/2 暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりやや有
3　5YR 3/4 暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりやや有
4　2.5YR 3/3 暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりやや有



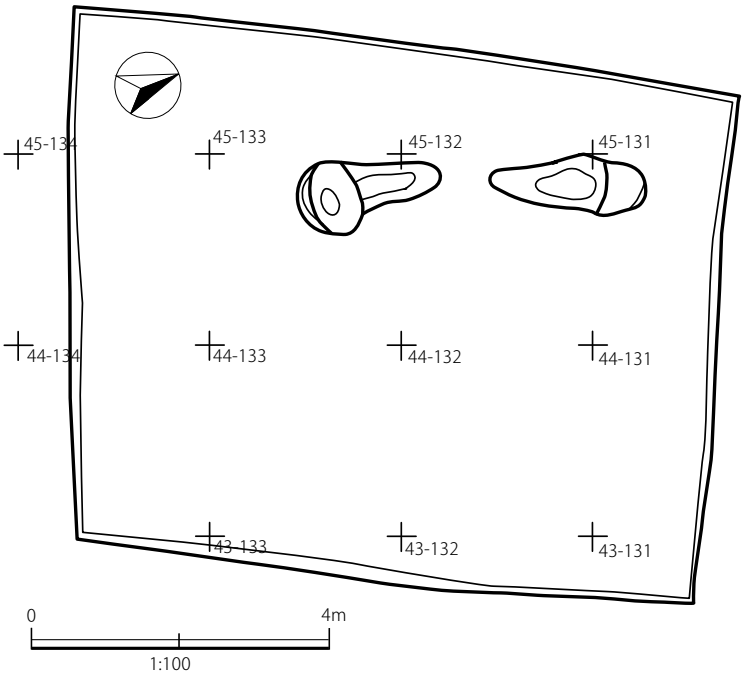
炉 SL8
1　10R 3/2 暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりなし
2　10R 3/3 暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりなし
3　10R 2/1 赤黒色砂　粘性やや有　しまりなし
4　10R 2/3 極暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりなし
5　2.5YR 4/6 赤褐色砂　しまりやや有
6　2.5YR 3/3 暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりなし

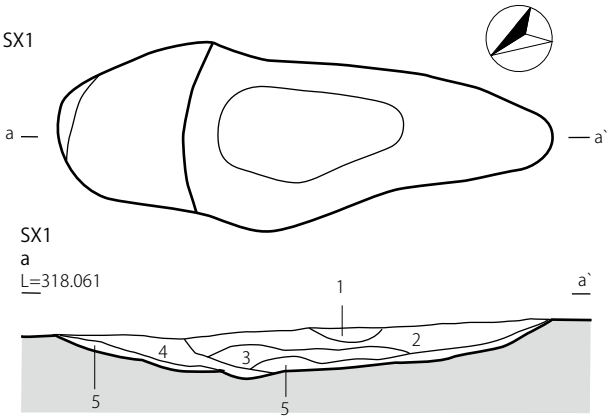


炉 SL9
1　2.5YR 5/6 明赤褐色砂　しまりあり
2　2.5YR 4/6 赤褐色砂　しまりやや有
3　2.5YR 3/3 暗赤褐色砂　粘性やや有　しまりなし
4　2.5YR 4/3 鈍い赤褐色砂　粘性有　しまりなし



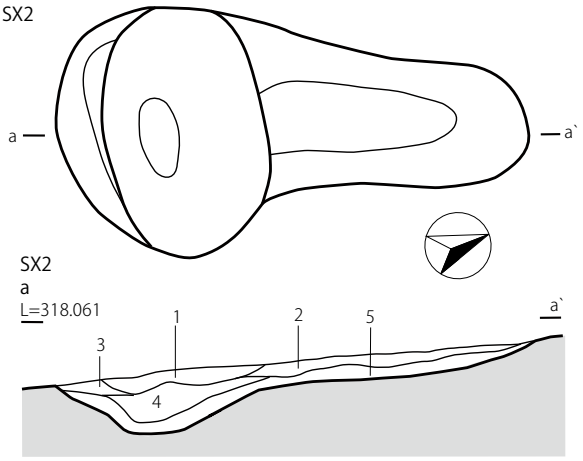
第 38 図　石ヶ窪Ａ遺跡　炉





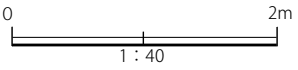
性格不明遺構　SX1

1	5YR 3/2 暗赤褐色砂	粘性有
2	5YR 4/4 にぶい赤褐色砂	粘性やや有　しまりやや有
3	7.5YR 3/3 暗褐色砂	粘性やや有　しまりやや有
4	7.5YR 3/4 暗褐色砂	粘性やや有　しまりやや有
5	7.5YR 4/6 褐色砂	しまり有　３の小ブロック含む

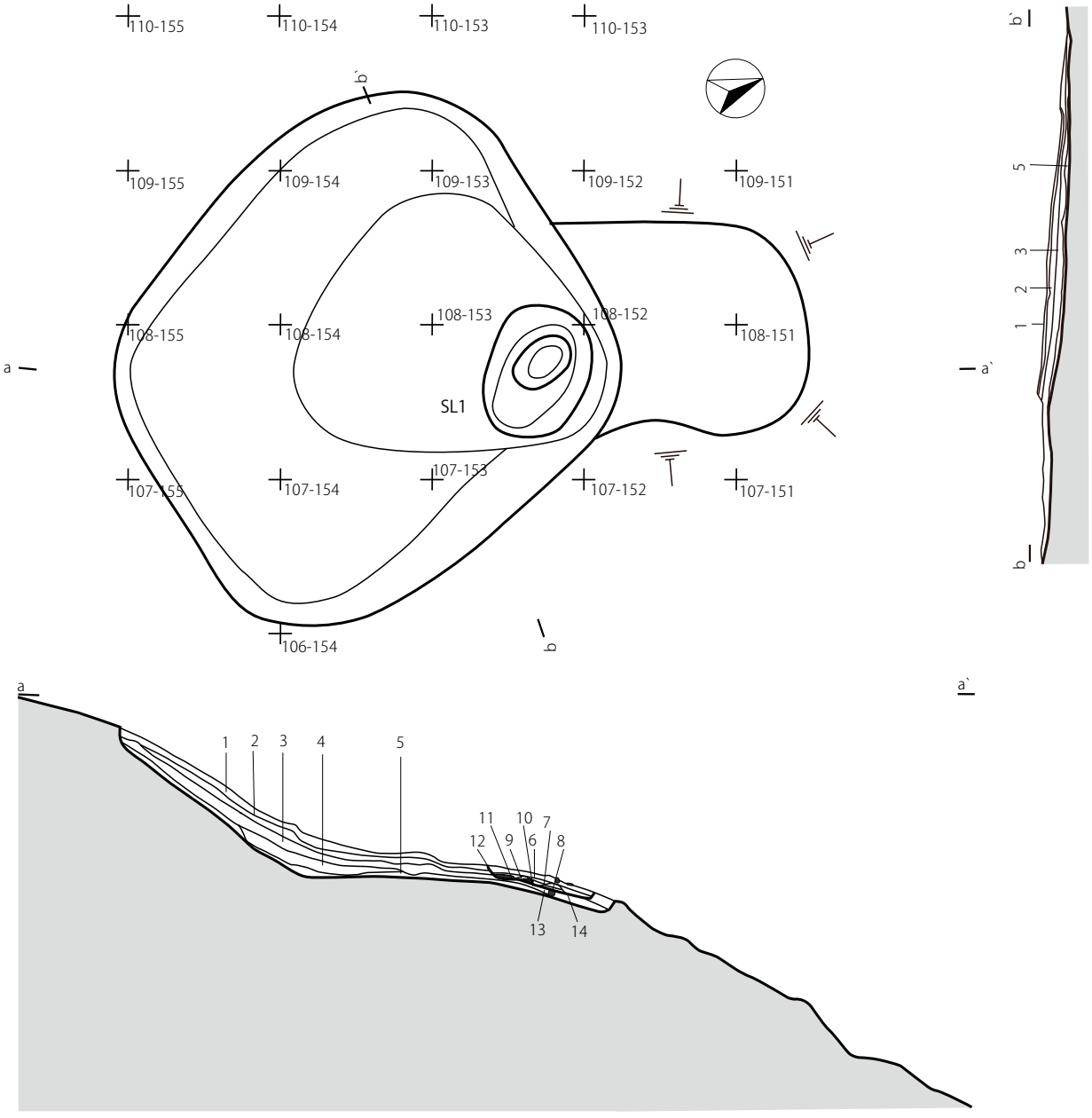


性格不明遺構　SX2

1	5YR 2/2 黒褐色砂	粘性有
2	5YR 4/8 赤褐色砂	しまりやや有　炭化物少
3	5YR 2/4 極暗赤褐色砂	粘性やや有　しまりやや有　炭化物少
4	5YR 2/1 黒褐色砂	粘性有　炭化物多
5	5YR 5/6 明赤褐色砂	炭化物少

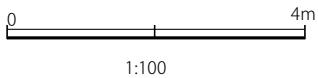


第 39 図　石ヶ窪Ａ遺跡東区　遺構配置図・性格不明遺構

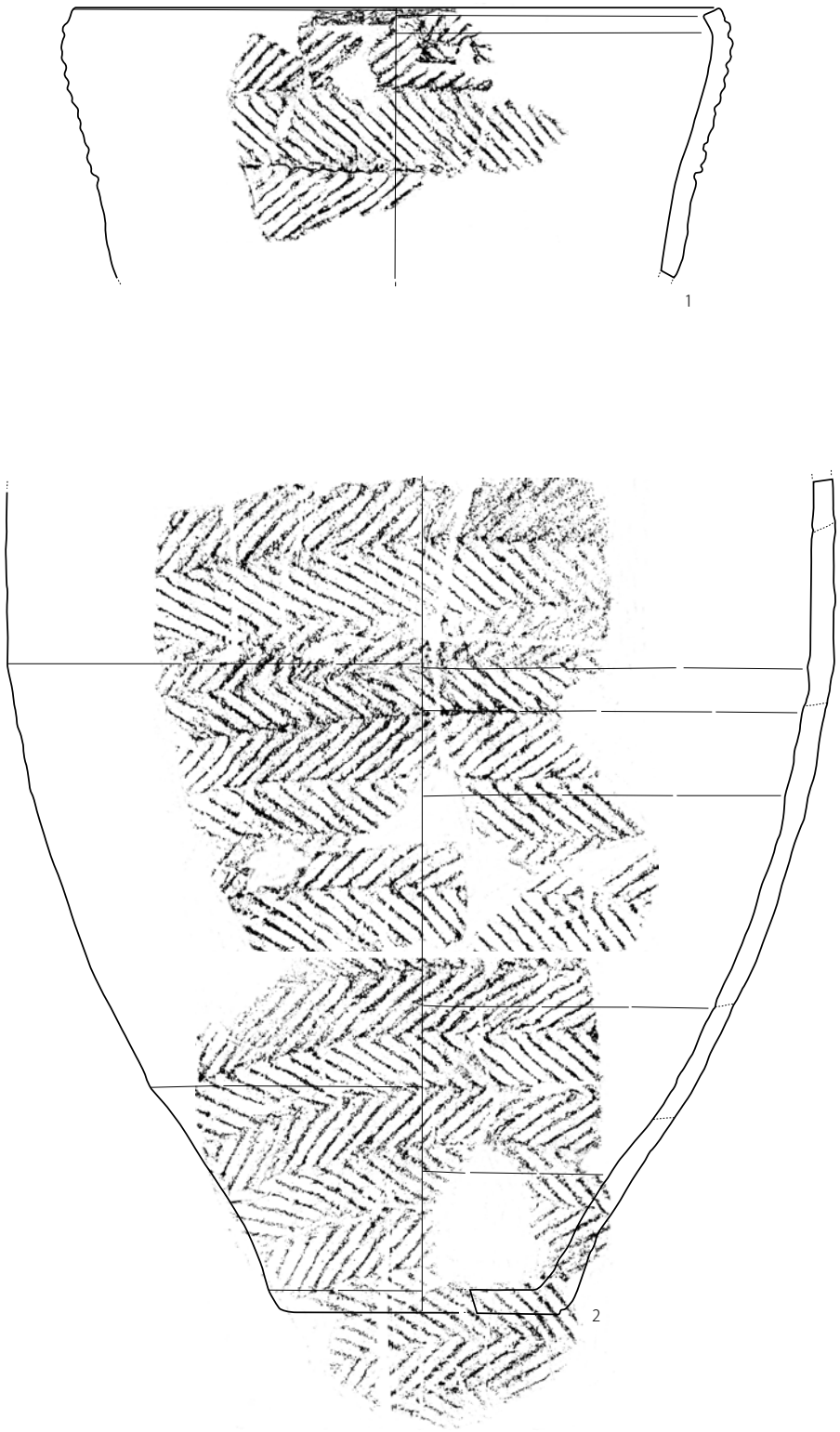


石ヶ窪Ｂ　塚状遺構

1	7.5YR 3/2 黒褐色	粘性あり　しまりなし
2	7.5YR 5/6 明褐色	粘性やや有　しまりやや有
3	7.5YR 6/8 橙色	粘性やや有　しまりやや有
4	7.5YR 4/6 褐色	粘性やや有　しまり有
5	7.5YR 7/8 黄橙色	粘性有　しまり有
6	5YR 4/8 赤褐色	しまりなし
7	5YR 4/6 赤褐色	しまりやや有　炭化物（径２～４ミリ）含む
8	5YR 5/8 明赤褐色	しまりやや有　炭化物多く含む
9	7.5YR 5/8 明褐色	しまりなし　炭化物細粒含む
10	7.5YR 6/6 橙色	しまりやや有　若干含む
11	7.5YR 4/6 褐色	しまりなし　細粒含む
12	2.5YR 4/8 赤褐色	しまり有　炭化物多く含む　2.5YR 4/6 赤褐色焼土小ブロック多い
13	5YR 3/6 暗赤褐色	しまりなし　2.5YR 4/6 赤褐色焼土多い
14	5YR 4/8 赤褐色	しまり有　炭化物含む



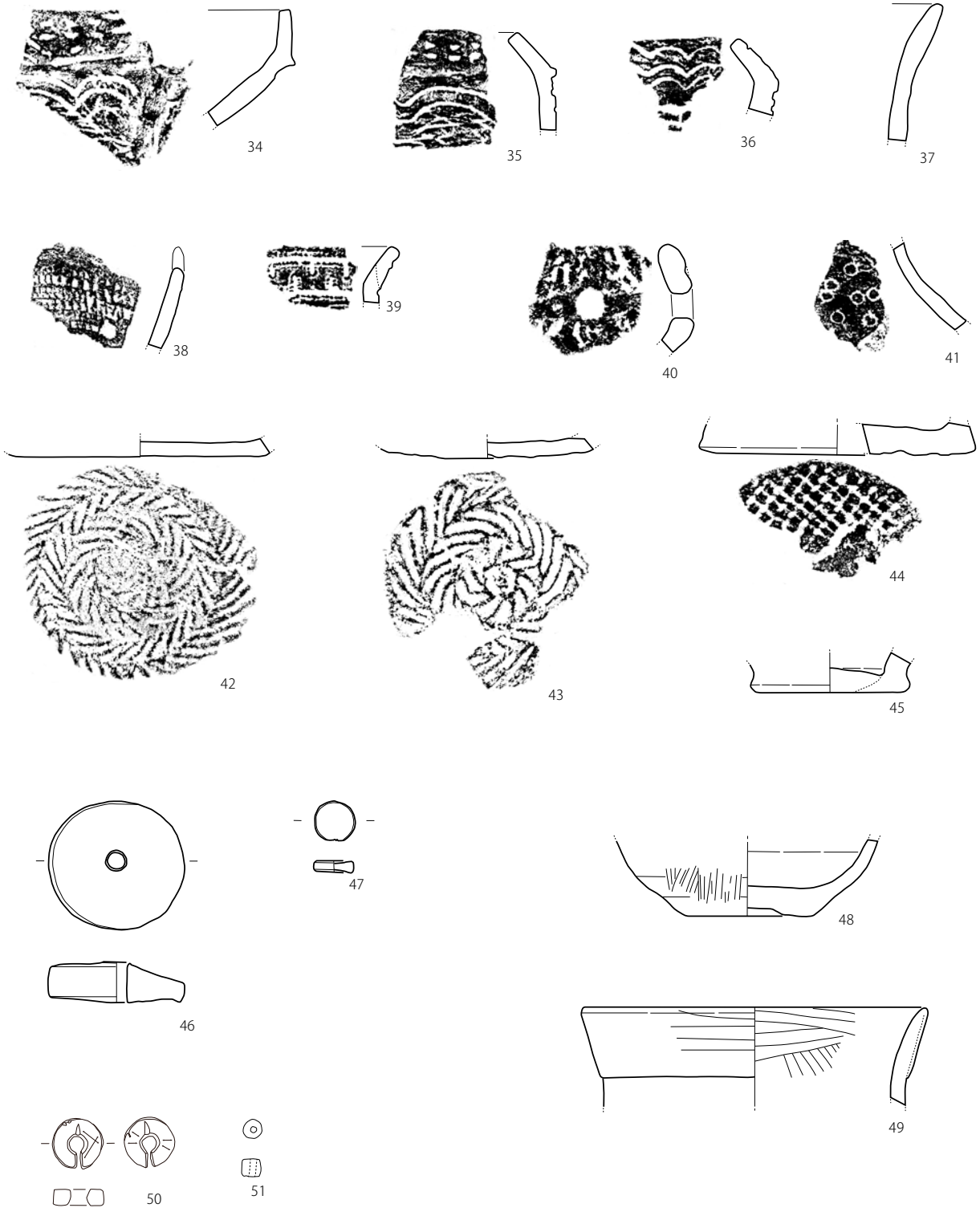
第 40 図　石ヶ窪Ｂ遺跡　遺構配置図



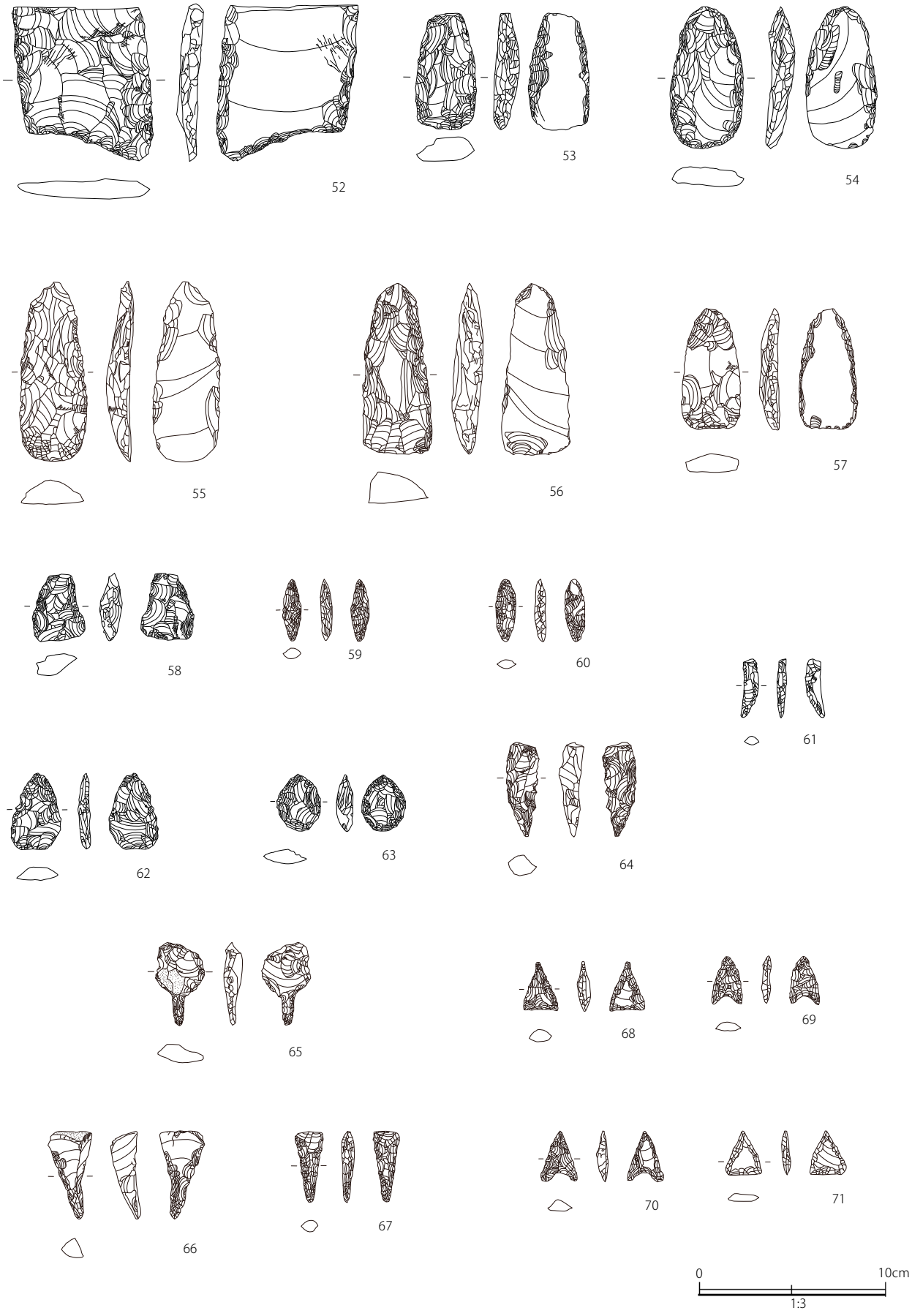
第 41 図　遺物実測図　石ヶ窪遺跡 (1)

第 42 図　遺物実測図　石ヶ窪遺跡 (2)

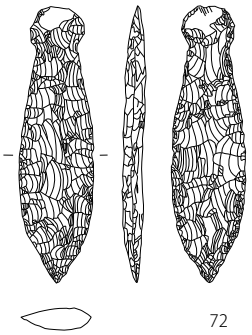
第 43 図　遺物実測図　石ヶ窪遺跡 (3)

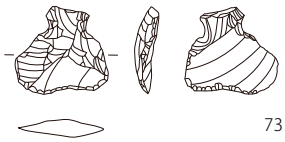


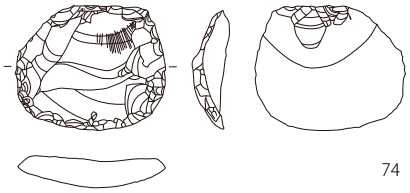
第 44 図　遺物実測図　石ヶ窪遺跡 (4)

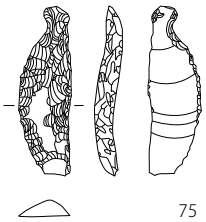


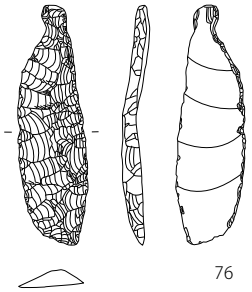
第 45 図　遺物実測図　石ヶ窪遺跡 (5)

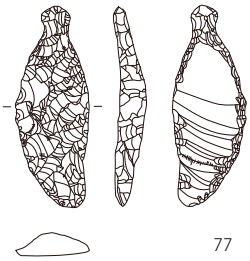


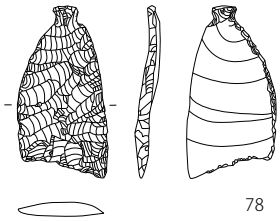


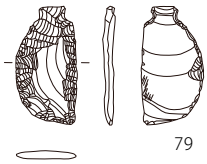


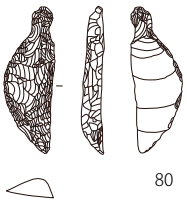


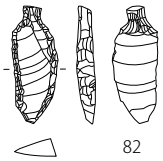


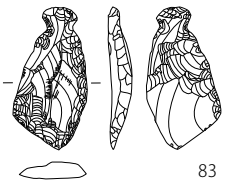


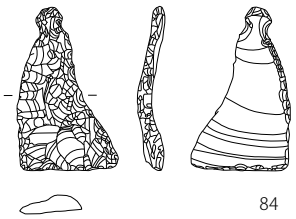


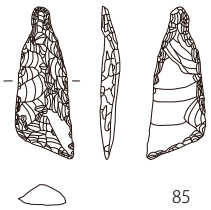


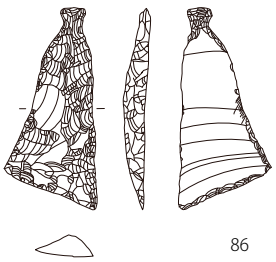


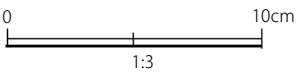




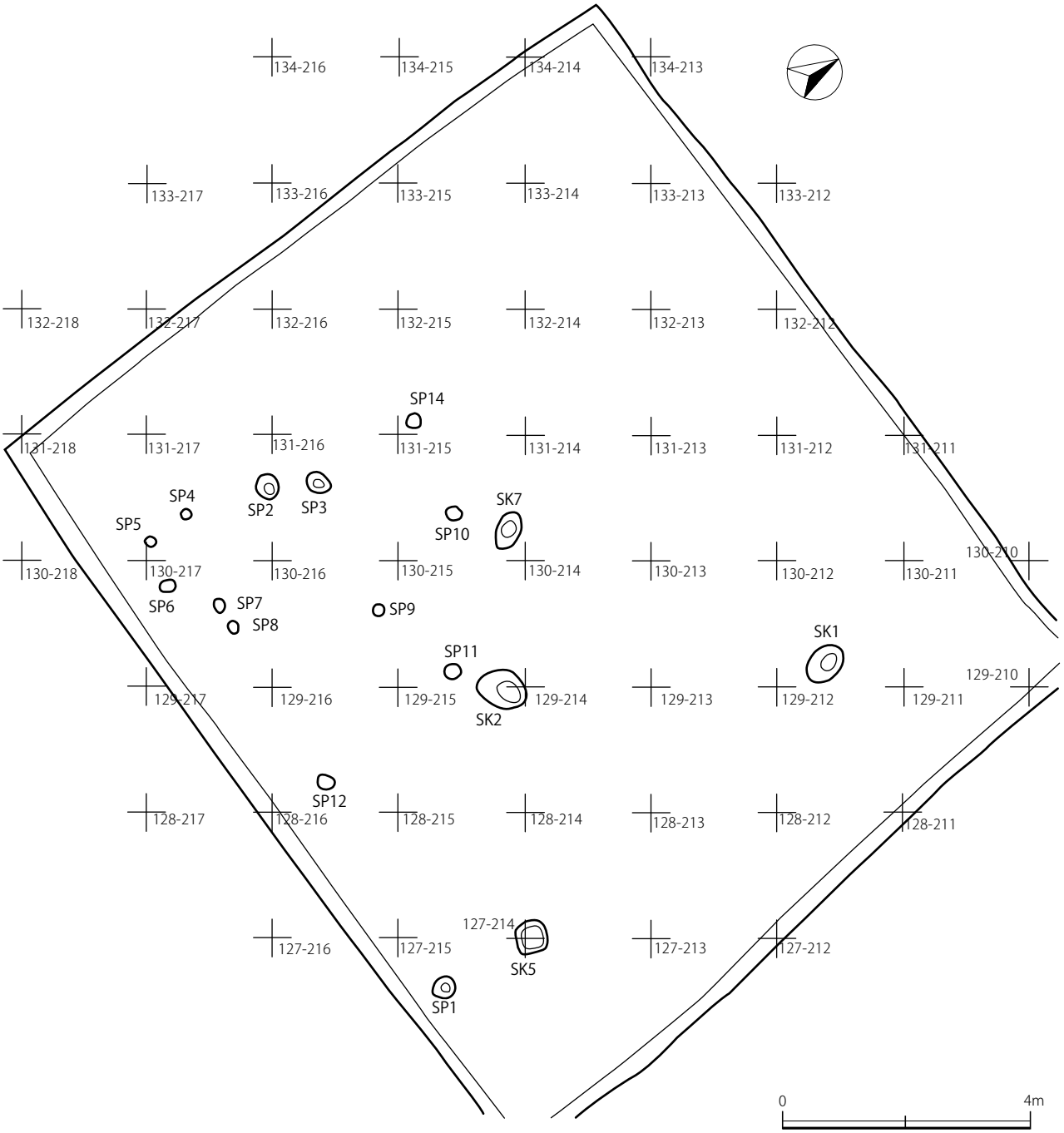


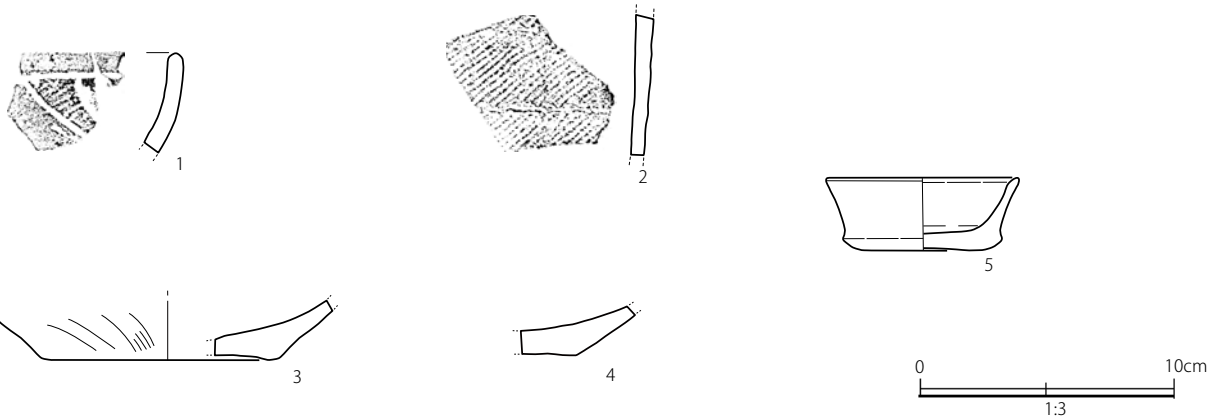




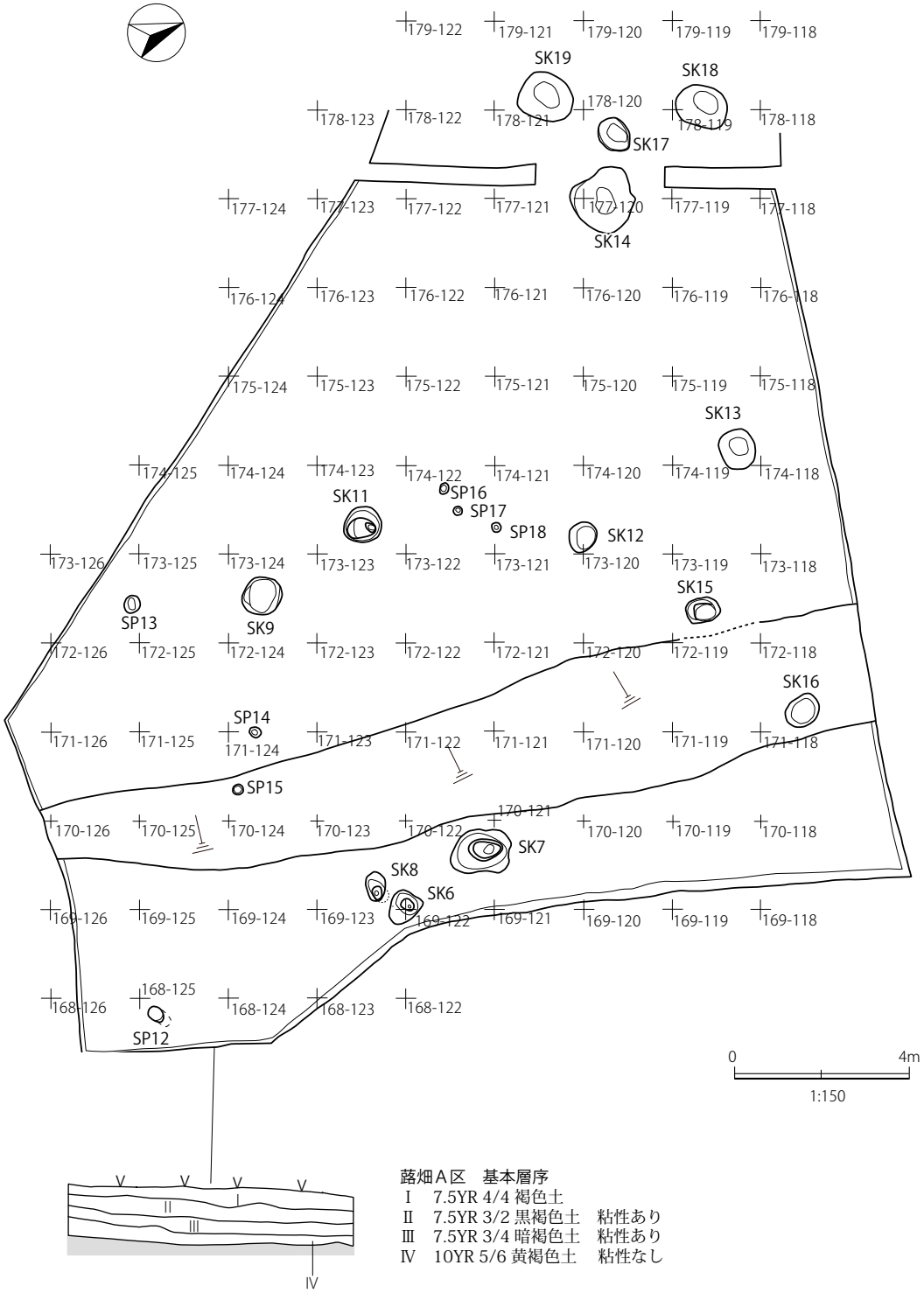


第 46 図　遺物実測図　石ヶ窪遺跡（６）



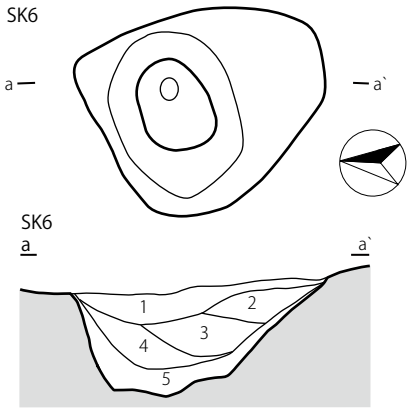


第 47 図　雨沼遺跡　遺構配置図　遺物実測図

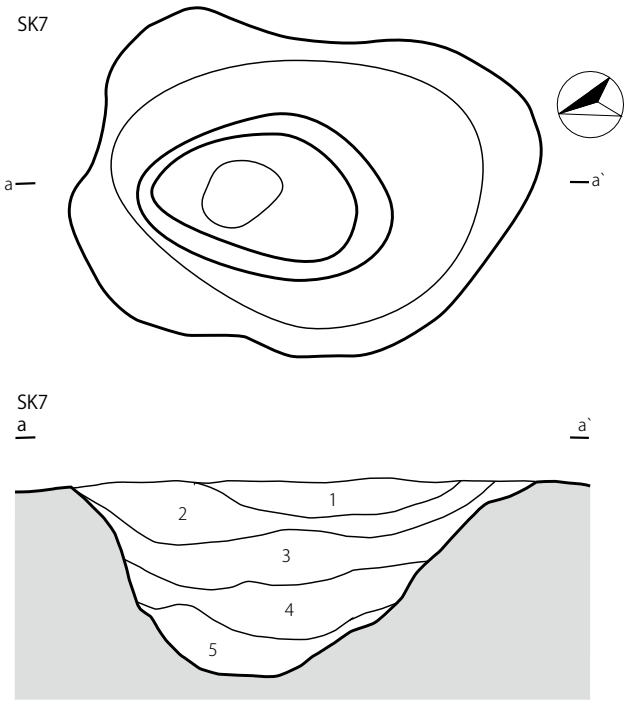


蕗畑Ａ区　基本層序
Ⅰ　7.5YR 4/4 褐色土
Ⅱ　7.5YR 3/2 黒褐色土　粘性あり
Ⅲ　7.5YR 3/4 暗褐色土　粘性あり
Ⅳ　10YR 5/6 黄褐色土　粘性なし

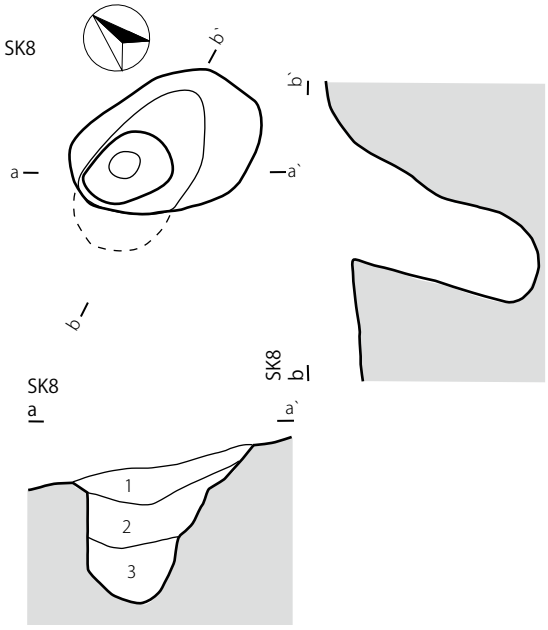
第 48 図　蕗畑遺跡Ａ区　遺構配置図・基本層序



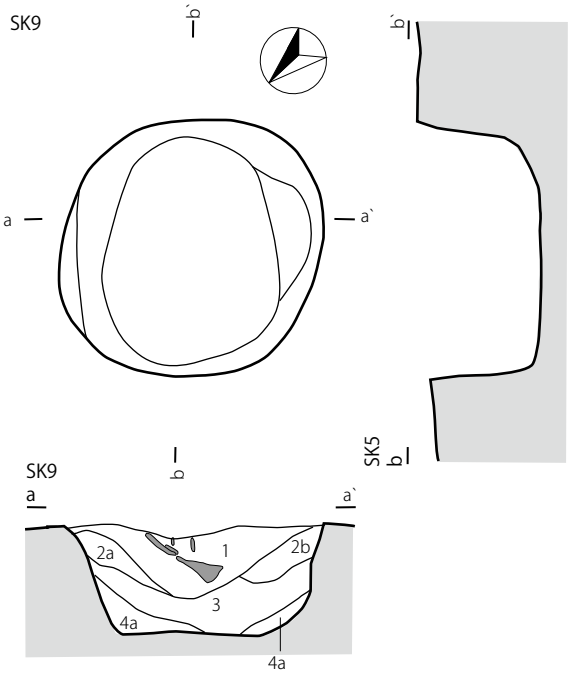
土坑 SK6
1　7.5YR 2/2 黒褐色土
2　7.5YR 2/2 黒褐色土　黄色土小ブロック含む
3　7.5YR 3/4 暗褐色土
4　7.5YR 3/4 暗褐色土　黄褐色小ブロック含む
5　7.5YR 3/3 暗褐色土



土坑 SK7
1　7.5YR 4/3 褐色土
2　7.5YR 3/4 暗褐色土
3　7.5YR 3/3 暗褐色土
4　7.5YR 3/2 黒褐色土
5　7.5YR 2/2 黒褐色土



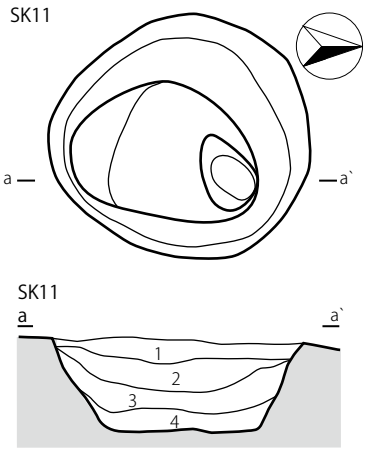
土坑 SK8
1　7.5YR 2/2 黒褐色砂
2　7.5YR 3/4 暗褐色砂
3　7.5YR 3/3 暗褐色砂



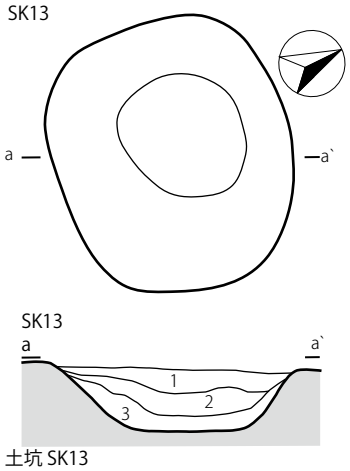
土坑 SK9
1　　7.5YR 2/2 黒褐色土
2a　　7.5YR 4/6 褐色土
2b　　7.5YR 3/4 暗褐色土
3　　7.5YR 3/3 暗褐色土
4a　　7.5YR 8/6 浅黄橙色土
4b　　7.5YR 3/3 暗褐色土

石
炭化物
0　2m
1：40

第 49 図　蕗畑遺跡Ａ区　土坑

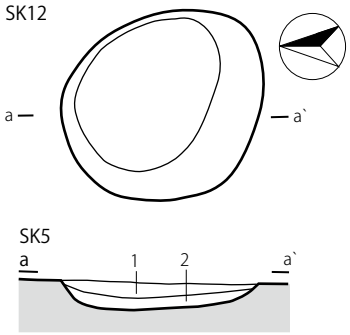


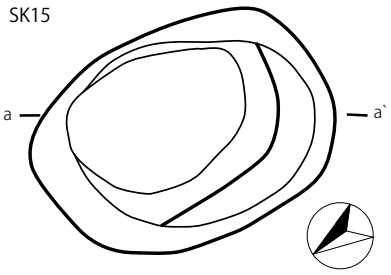
土坑 SK11
1　10YR 3/4 暗褐色土
2　10YR 3/3 暗褐色土
3　10YR 4/6 褐色土
4　10YR 4/4 褐色土

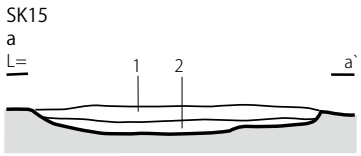


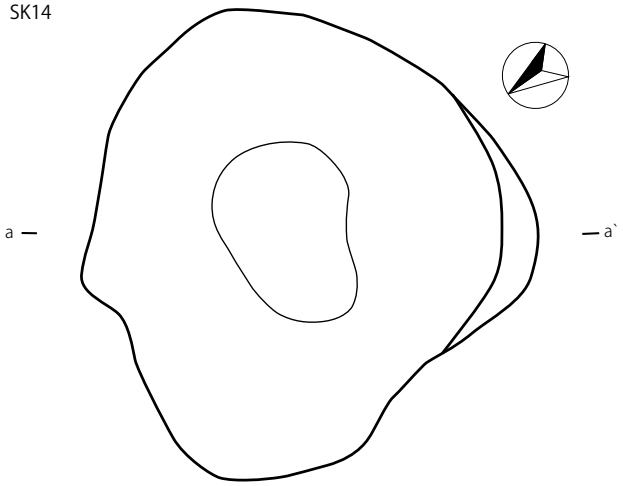
土坑 SK13
1　10YR 4/6 褐色土
2　10YR 3/4 暗褐色土
3　10YR 3/3 暗褐色土

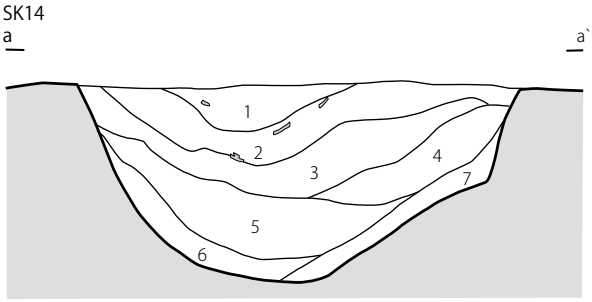
土坑 SK12
1　10YR 2/2 黒褐色砂　　小礫含む
2　10YR 2/3 黒褐色砂

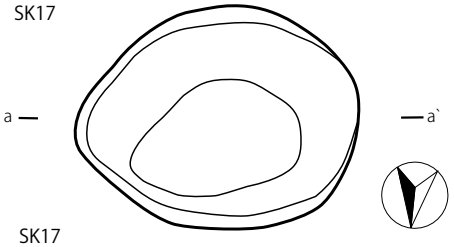


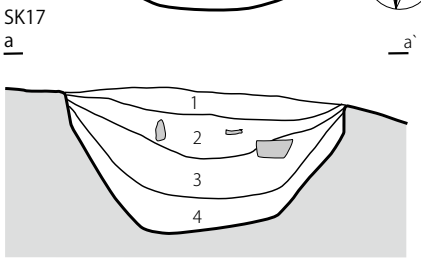








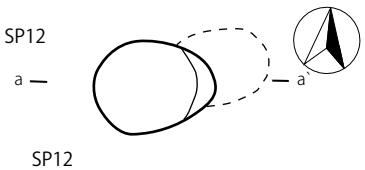


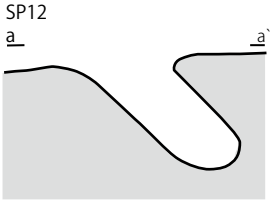


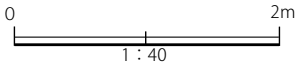
土坑 SK14
1　7.5YR 4/4 褐色粘土　　粘性あり
2　7.5YR 3/4 暗褐色粘土　粘性あり　炭化物含む
3　7.5YR 3/3 暗褐色土
4　7.5YR 4/3 褐色粘土
5　7.5YR 4/6 褐色粘土　　粘性あり
6　7.5YR 3/4 暗褐色土
7　7.5YR 5/6 明褐色土　　粘性なし

土坑 SK15
1　7.5YR 3/2 黒褐色土
2　7.5YR 3/3 暗褐色土　　黄色小ブロック含む

土坑 SK17
1　7.5YR 3/3 暗褐色土
2　7.5YR 3/4 暗褐色土
3　7.5YR 3/3 暗褐色土
4　7.5YR 4/4 褐色土

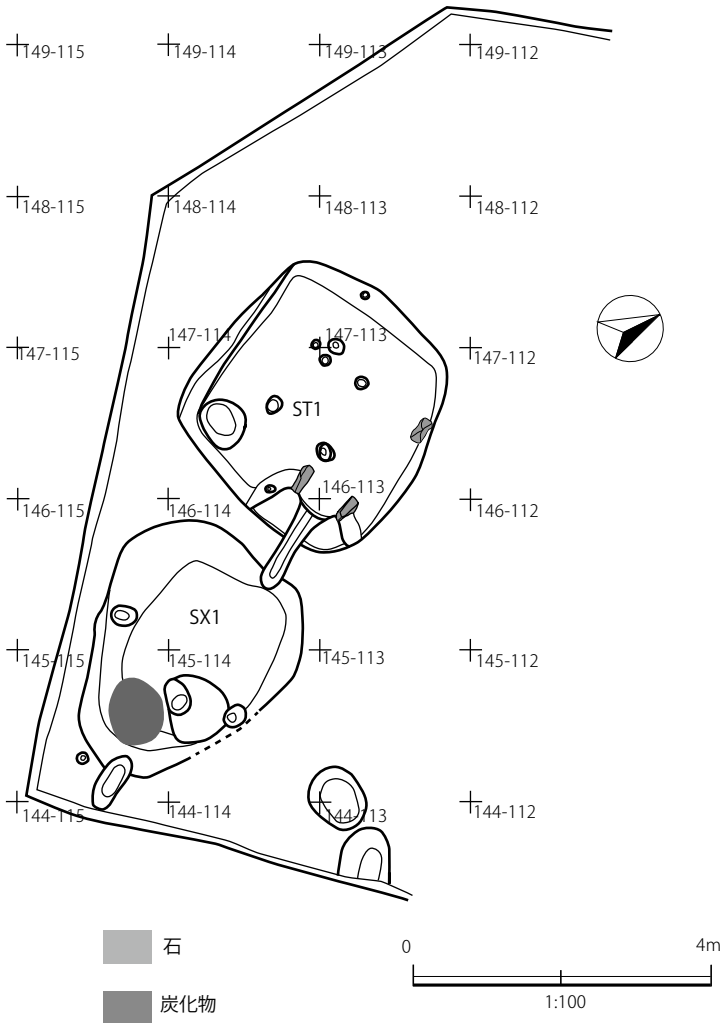


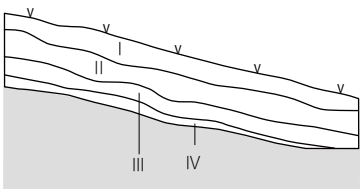


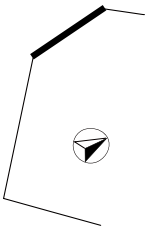


土器片

第 50 図　蕗畑遺跡Ａ区　土坑・柱穴

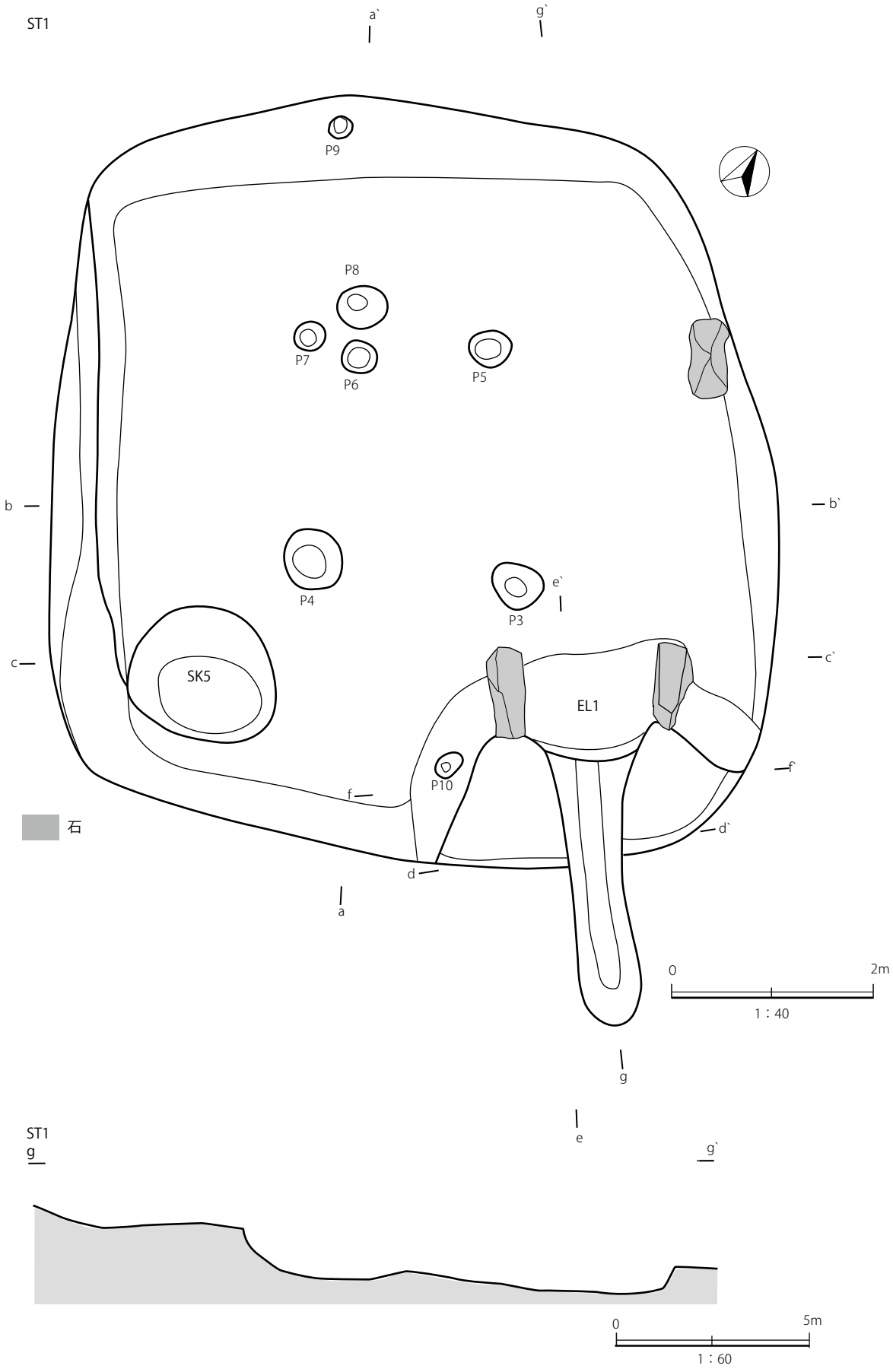




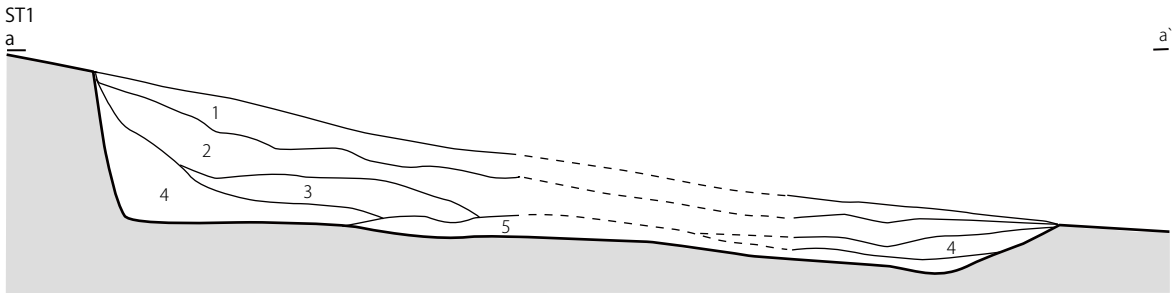


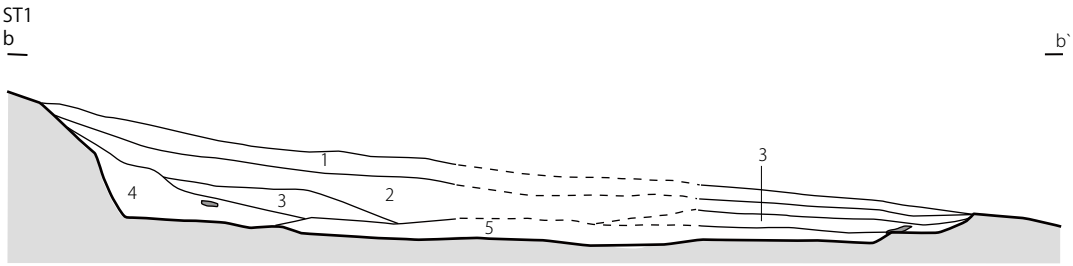
蕗畑Ｂ区　基本層序
Ⅰ　7.5YR 3/4 暗褐色砂　表土
Ⅱ　10YR 2/1 黒色砂　粘性あり
Ⅲ　10YR 2/3 黒褐色砂　小礫含む
Ⅳ　10YR 4/6 褐色砂　礫含む

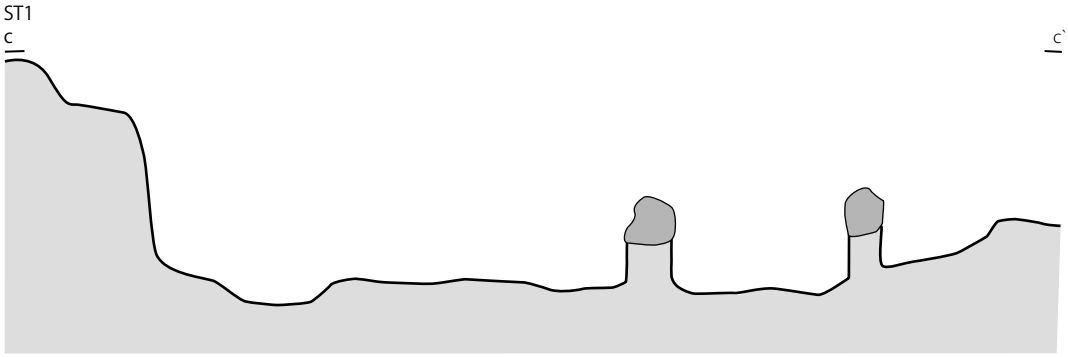
第 51 図　蕗畑遺跡Ｂ区　遺構配置図・基本層序

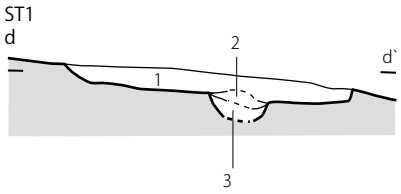


第 52 図　蕗畑遺跡Ｂ区　竪穴住居 ST1(1)

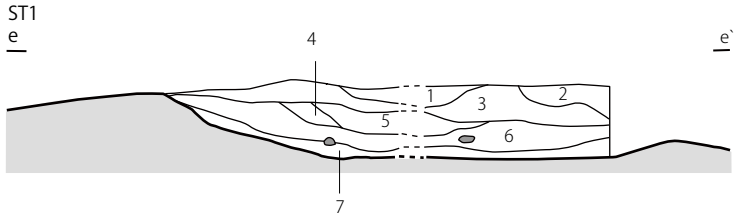


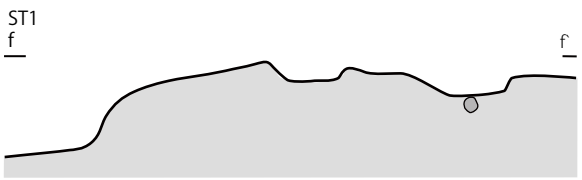






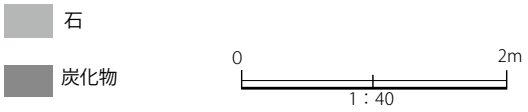
竪穴住居　ST1　a-a`　b-b`
1　7.5YR 2/1 黒色砂
2　7.5YR 2/3 黒褐色砂　　黄色土小ブロックやや含む
3　7.5YR 3/4 暗褐色砂　　黄色土小ブロック多く含む
4　10YR 3/4 暗褐色砂　　黄色土小ブロック多く含む
5　10YR 5/8 黄褐色砂　　黒色ブロック含む



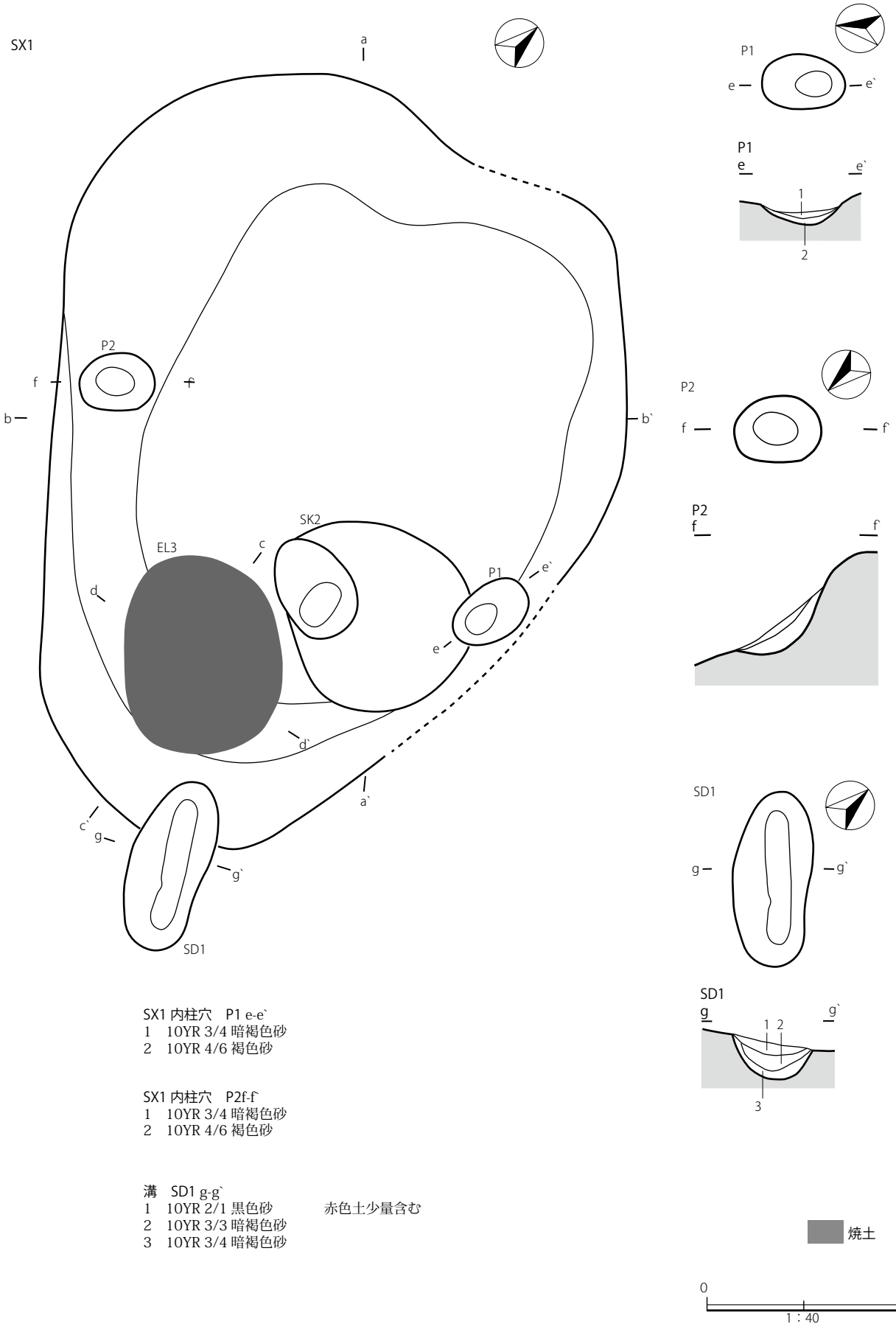


竪穴住居　ST1　d-d`
1　5YR 3/1 黒褐色砂　　焼土小ブロック含む
2　5YR 3/2 暗赤褐色砂　　焼土小ブロック含む
3　5YR 2/3 極暗赤褐色砂　　炭化物含む

竪穴住居　ST1　e-e`
1　5YR 3/2 暗赤褐色砂　　炭化物、焼土ブロック含む
2　5YR 4/2 灰褐色砂　　灰色土小ブロック含む
3　10YR 2/3 黒褐色砂　　黄色土ブロック含む
4　10YR 2/1 黒色砂
5　7.5YR 5/8 明褐色砂　　焼土ブロック少量含む
6　7.5YR 4/6 褐色砂
7　10YR 2/1 黒色砂



第 53 図　蕗畑遺跡Ｂ区　竪穴住居 ST1(2)

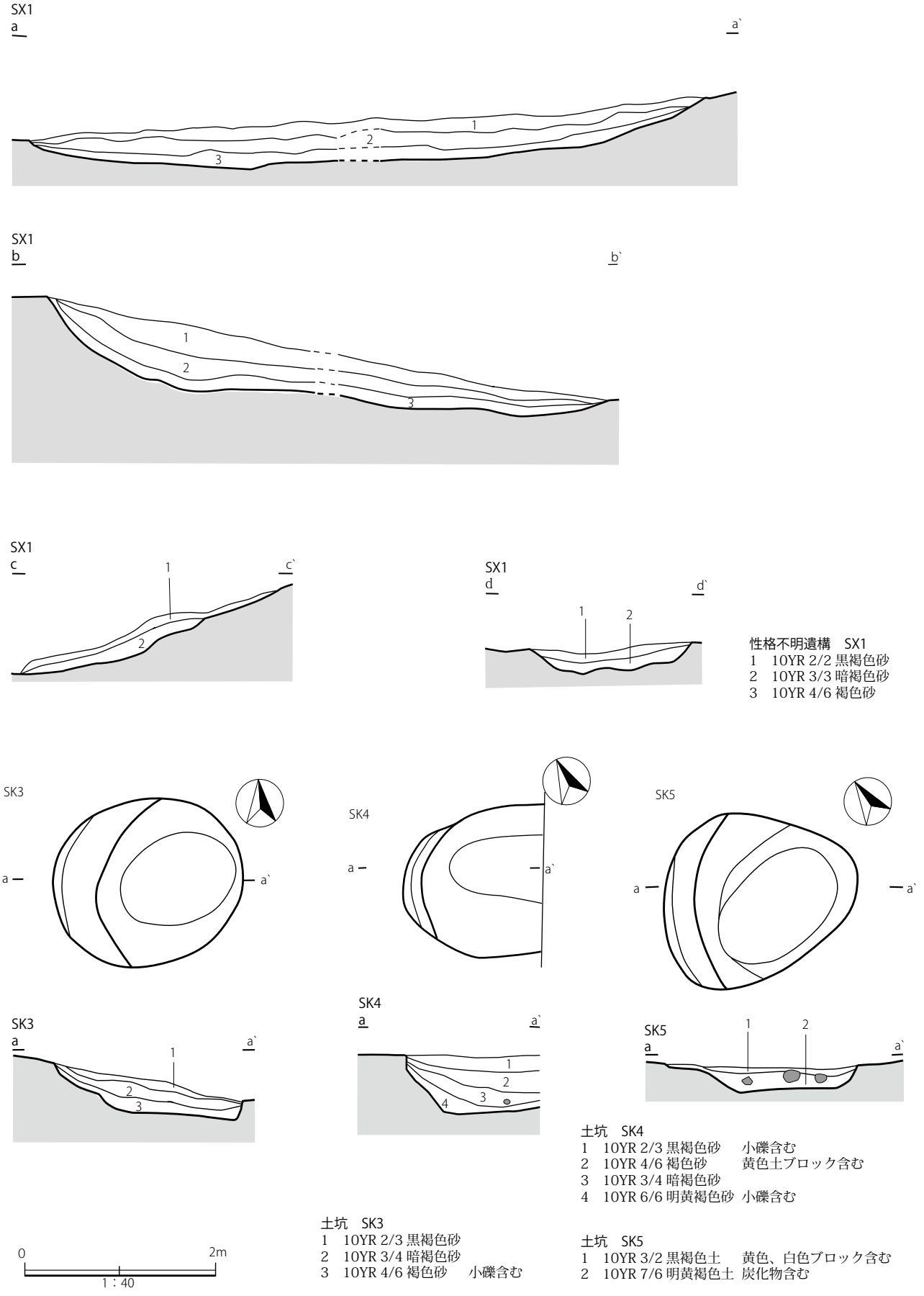


SX1 内柱穴　P1 e-e`
1　10YR 3/4 暗褐色砂
2　10YR 4/6 褐色砂

SX1 内柱穴　P2f-f`
1　10YR 3/4 暗褐色砂
2　10YR 4/6 褐色砂

溝　SD1 g-g`
1　10YR 2/1 黒色砂　　赤色土少量含む
2　10YR 3/3 暗褐色砂
3　10YR 3/4 暗褐色砂

第 54 図　蕗畑遺跡Ｂ区　性格不明遺構ＳＸ 1(1)



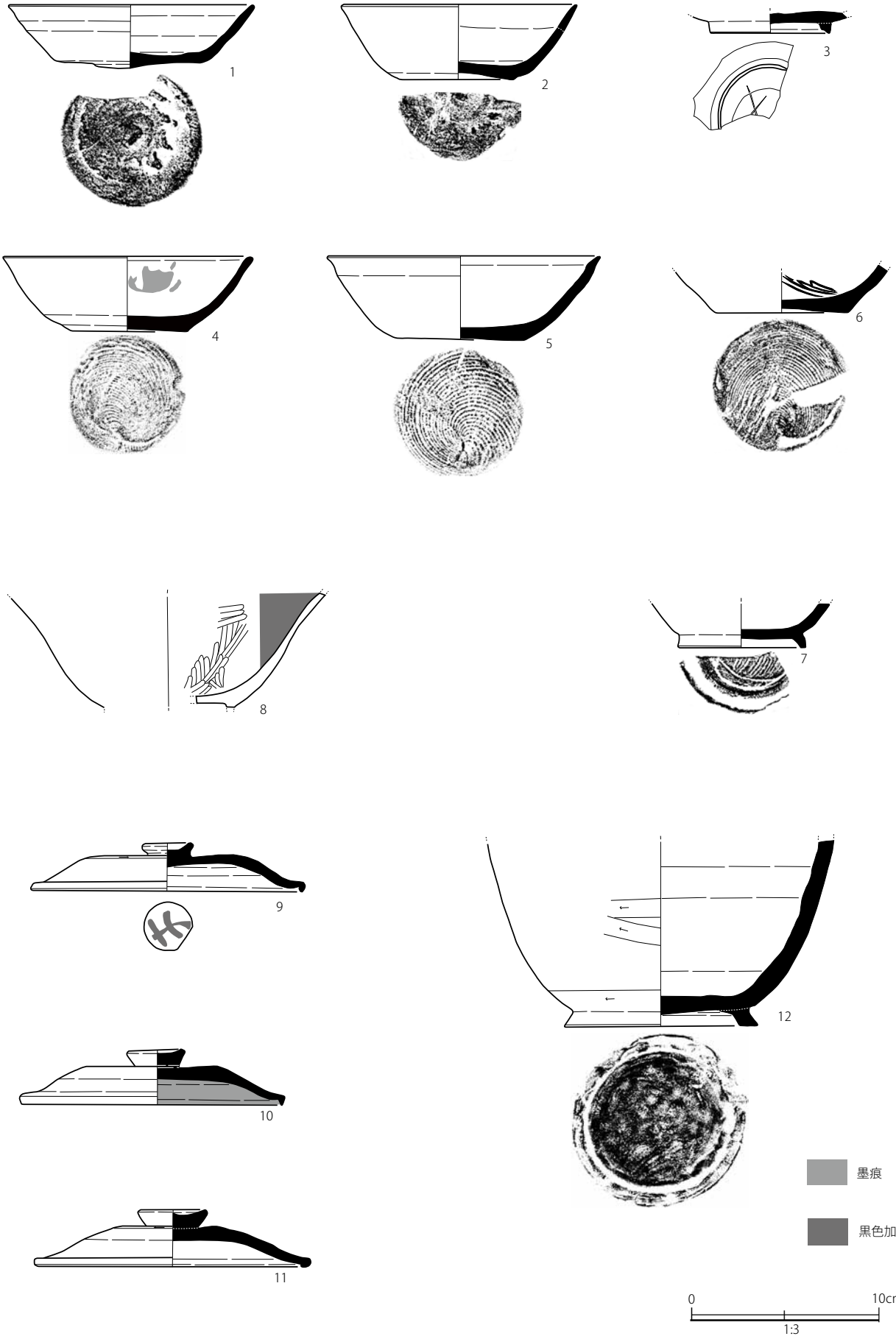
性格不明遺構　SX1
1　10YR 2/2 黒褐色砂
2　10YR 3/3 暗褐色砂
3　10YR 4/6 褐色砂

土坑　SK3
1　10YR 2/3 黒褐色砂
2　10YR 3/4 暗褐色砂
3　10YR 4/6 褐色砂　　小礫含む

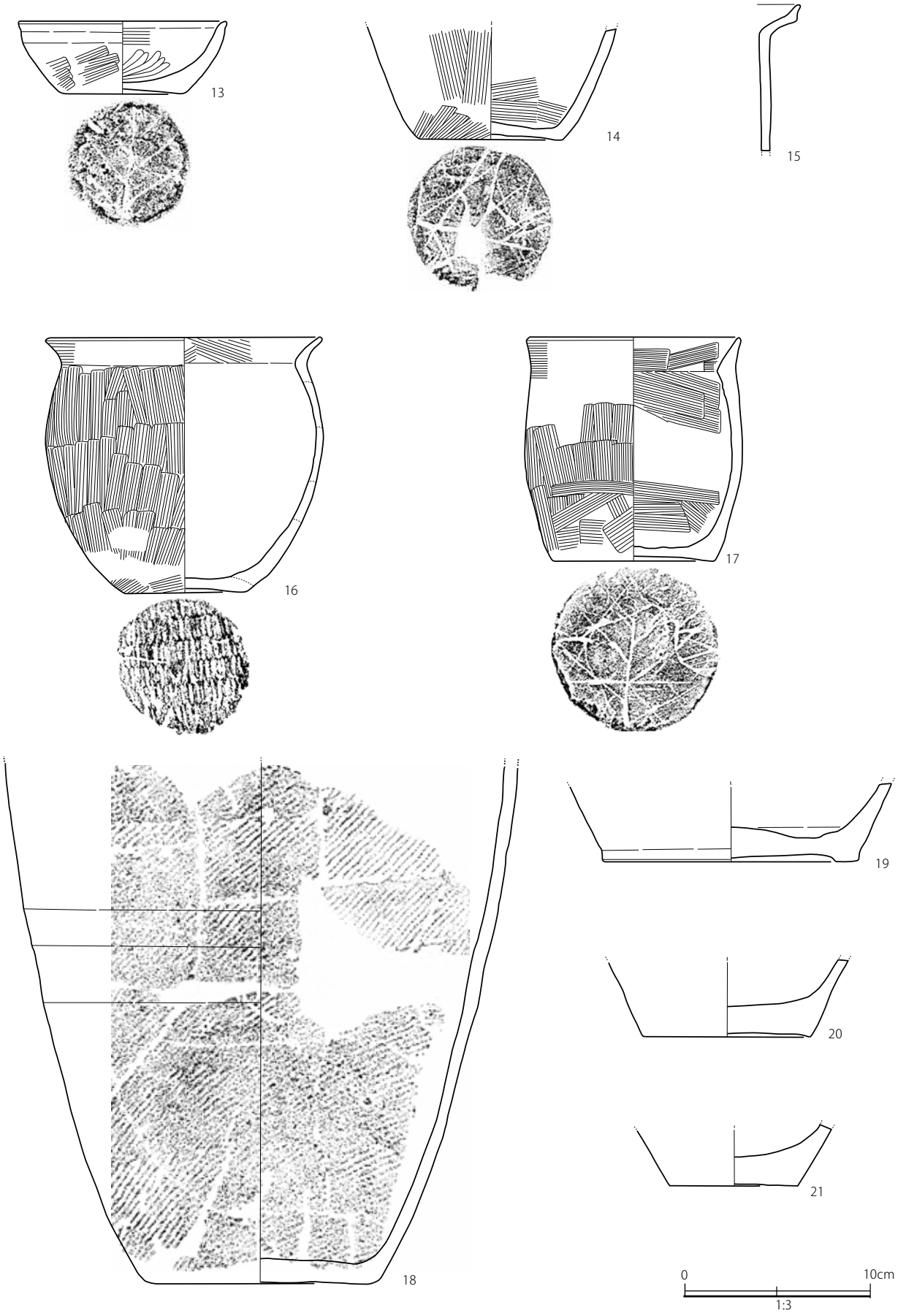
土坑　SK4
1　10YR 2/3 黒褐色砂　　小礫含む
2　10YR 4/6 褐色砂　　黄色土ブロック含む
3　10YR 3/4 暗褐色砂
4　10YR 6/6 明黄褐色砂　小礫含む

土坑　SK5
1　10YR 3/2 黒褐色土　　黄色、白色ブロック含む
2　10YR 7/6 明黄褐色土　炭化物含む

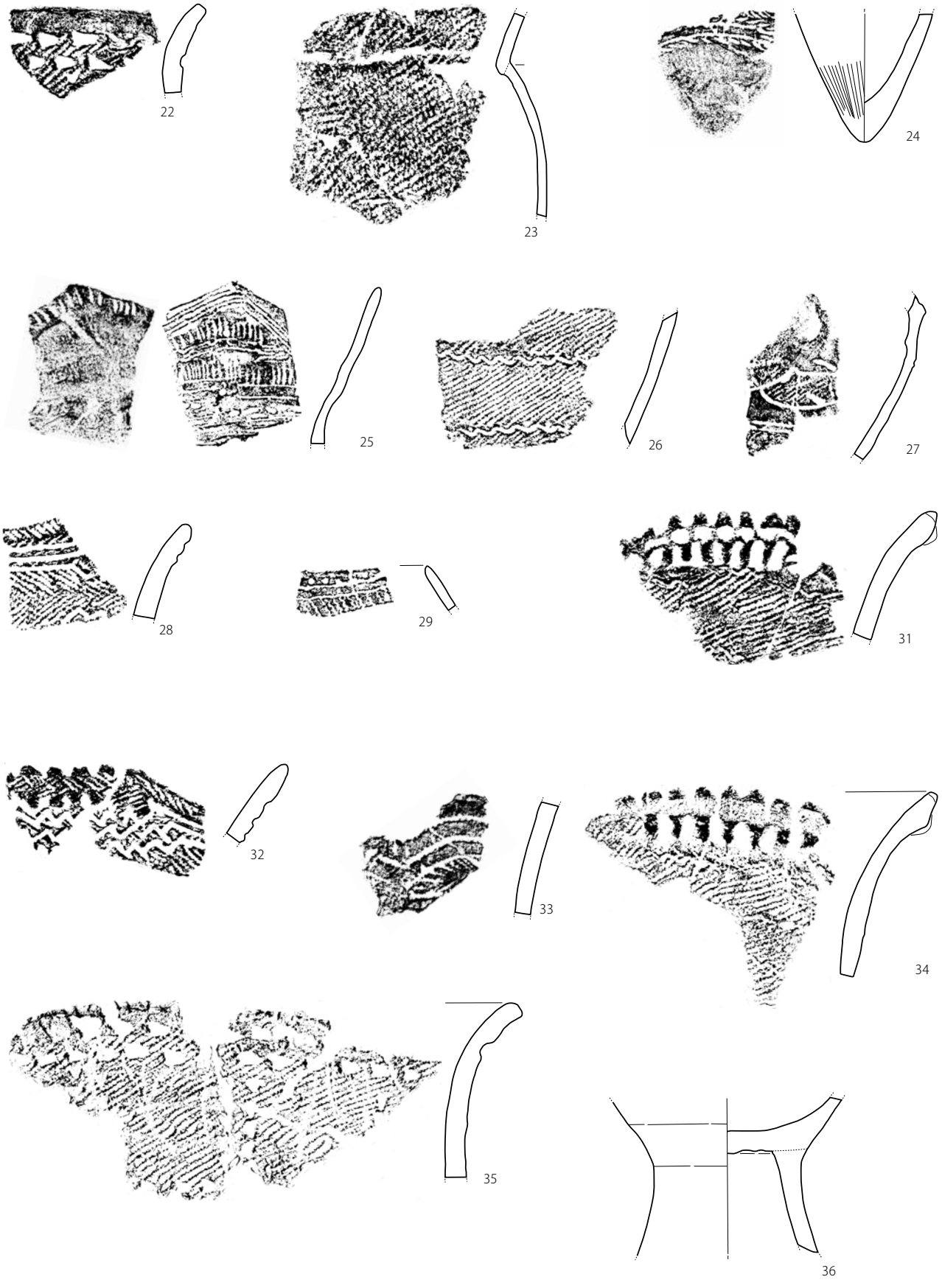
第 55 図　蕗畑遺跡Ｂ区　性格不明遺構ＳＸ 1(2)



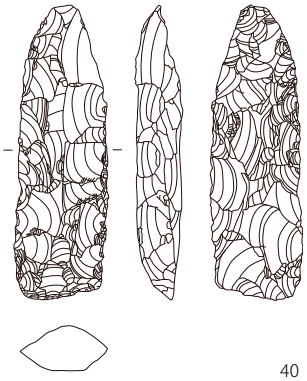
第 56 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (1)

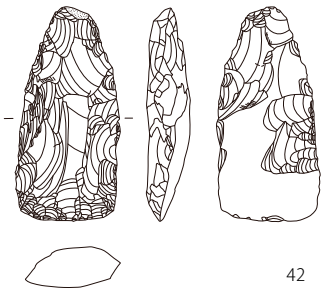


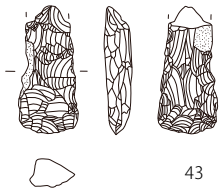
第 57 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (2)

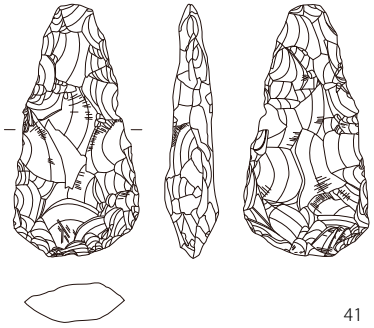


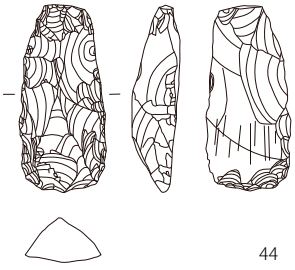
第 58 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (3)

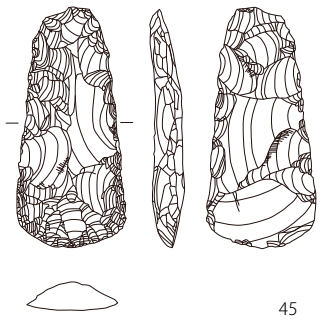


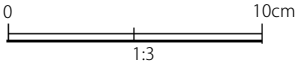




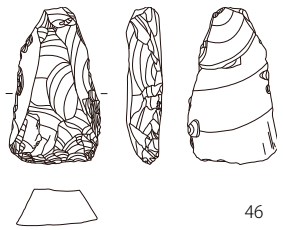


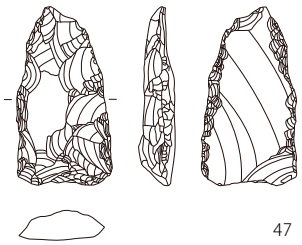


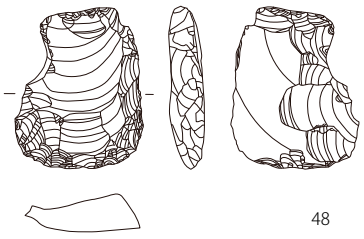


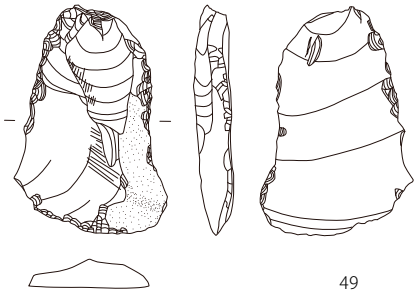


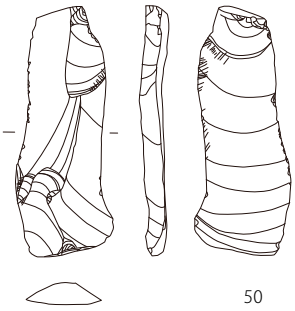
第 59 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (4)

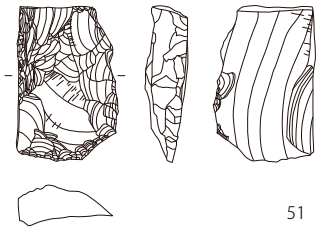


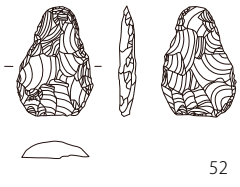


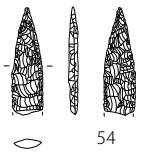


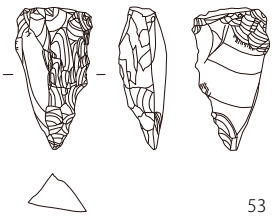


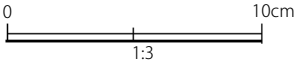












第 60 図　遺物実測図　蕗畑遺跡 (5)

表 4　牛ヶ首遺跡　遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	調整技法 外面	内面	底面	出土地点	備考
1	34	須恵器	坏	(76)	-	-	ロクロ	ロクロ	回転糸切	75 － 36G	
2	34	須恵器	坏	-	(60)	-	ロクロ	ロクロ	回転糸切	75 － 36G	胎土に海面骨針混入
3	34	須恵器	坏	(152)	67	55	ロクロ	ロクロ	回転糸切	74 － 36 G	
4	34	須恵器	坏	(140)	(66)	38	ロクロ	ロクロ	回転糸切	SK10	
5	34	土師器	坏	(143)	60	43	ロクロ	ロクロ	回転糸切	75 － 37G	胎土に土器粒混入
6	34	土師器	高台付坏	-	62	-	ロクロ	ロクロ	回転糸切	75 － 38G	
7	34	黒色土器	坏	-	(62)	-	ロクロ	ミガキ	回転糸切	75 － 36G	胎土に海面骨針混入
8	34	黒色土器	高台付坏	-	52	-	ロクロ	ミガキ	回転糸切	75 － 37G	
9	34	黒色土器	坏	(136)	66	45	ロクロ	ミガキ	回転糸切	74 － 37G	
10	34	黒色土器	坏	-	54	-	ロクロ	ミガキ	回転糸切	74 － 37G	胎土に土器粒混入
11	34	黒色土器	高台付坏	(144)	72	57.5	ロクロ	ミガキ	回転糸切	74 － 35G	胎土に海面骨針混入、内外面黒色加工
12	35	土師器	甕	-	(200)	-	ハケメ	ハケメ	布痕	74 － 37G	外面に火はね痕
13	35	土師器	甕	-	(76)	-	ハケメ	ハケメ	布痕	75 － 39G	胎土に海面骨針混入、内部底面に火はね痕
14	35	土師器	甕	(104)	(62)	78				74 － 31G	胎土に海面骨針混入、全面磨滅
15	35	土師器	甕	(140)	-	17	ロクロ	ロクロ		74 － 37G	外面下方部分に火はね痕
16	35	縄文土器	鉢							表採	沈線紋

遺物番号	挿図番号	器種	計測値 (mm) 長さ	幅	厚さ	重量 (g)	出土地点
17	35	?	49.5	15.5	8.2	5.1	SK4
18	35	掻器	39.5	61	9	19	92-22G

表 5　雨沼遺跡　遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	調整技法 外面	内面	底面	出土地点	備考
1	47	縄文土器	浅鉢？	-	-	-			-	表採	LR 沈線紋
2	47	縄文土器	深鉢？	-	-	-				Dトレンチ	LR
3	47	土師器	壺？甕？	-	(90)	-	ケズリ・ハケメ	-	ケズリ	Aトレンチ	内面マメツ　胎土緻密
4	47	土師器	壺？甕？	-	-	-	ハケ	ハケ	ケズリ	表採	胎土緻密
5	47	土師器	かわらけ	(78)	(48)	29	ロクロ	ロクロ	回転糸切	Dトレンチ	胎土海面骨針混入

表６　石ヶ窪遺跡　土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	縄文	出土地点	備考
1	41	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR RL	表採一括	
2	41	縄文土器	深鉢	-	(120)	-	LR RL	表採一括	
3	42	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR RL	55 － 135G	
4	42	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR RL	56 － 134G	
5	42	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR RL	表採一括	
6	42	縄文土器	鉢		-	-		表採	
7	42	縄文土器	深鉢	-	-	-		60 － 136G	
8	42	縄文土器	鉢	-	-	-		131 － 133G	
9	42	縄文土器	鉢	-	-	-		57 － 137G	
10	42	縄文土器	鉢	-	-	-		57 － 137G	
11	42	縄文土器	深鉢	-	-	-		表採	
12	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		57 － 136G	
13	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		55 － 138G	
14	43	縄文土器	鉢	-	-	-		59 － 137G	
15	43	縄文土器	鉢	-	-	-		58 － 135G	
16	43	縄文土器	鉢	-	-	-		表採	
17	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		表採	
18	43	縄文土器	鉢	-	-	-		59 － 137G	
19	43	縄文土器	鉢	-	-	-		59 － 137G	
20	43	縄文土器	深鉢	-	-	-	RL	58 － 140G	
21	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		59 － 137G	
22	43	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR	57 － 136G	
23	43	縄文土器	鉢	-	-	-		55 － 137G	
24	43	縄文土器	鉢	-	-	-		表採	
25	43	縄文土器	鉢	-	-	-		表採	
26	43	縄文土器	鉢	-	-	-		61 － 135G	
27	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		表採	
28	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		表採	
29	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		58 － 137G	
30	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		表採	
31	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		58 － 137G	
32	43	縄文土器	深鉢	-	-	-		58 － 137G	
33	43	縄文土器	鉢	-	-	-	LR	55 － 135G	
34	44	縄文土器	深鉢	-	-	-		60 － 137G	
35	44	縄文土器	深鉢	-	-	-		60 － 137G	
36	44	縄文土器	不明	-	-	-		59 － 137G	口縁部にスス付着
37	44	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR	55 － 135G	
38	44	縄文土器	鉢	-	-	-		59 － 135G	
39	44	縄文土器	不明	-	-	-		表採	
40	44	縄文土器	鉢	-	-	-		表採	
41	44	縄文土器	不明	-	-	-		56 － 134 G	竹管紋
42	44	縄文土器	不明	-	122	-		表採	底部縄文圧痕
43	44	縄文土器	不明	-	-	-		表採	底部縄文圧痕
44	44	縄文土器	不明	-	(138)	-		表採	底部編布圧痕
45	44	縄文土器	鉢	-	74	-		54 － 136G	
46	44	縄文土器	紡錘車	68	-	20		表採	表面ユビナデ
47	44	縄文土器	小型土製品	20	-	60		表採	表面ユビナデ
48	44	土師器	壺		68			表採	外面ハケメ、内面ナデ調整
49	44	土師器	甕	(172)	-	-		表採	内外面ハケメ調整、スス付着

表 7　石ヶ窪遺跡　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	計測値 (mm) 長さ	幅	厚さ	重量 (g)	出土地点	備考
50	44	玦状耳飾り	25.5	25.5	8.2	19.1	RQ59　61-133G	
51	44	臼玉	9.7	9.5	9.2	1	RQ60　61-134G	
52	45	削器？	85	78.6	11.2	96.2	RQ48　59-137G	
53	45	箆状石器	64	33.7	13.4	34.5	RQ61　58-136G	
54	45	箆状石器	78	40.2	11	42.3	RQ122　56-135G	
55	45	箆状石器	98.3	37.2	13.4	52.3	RQ140　SL2	
56	45	箆状石器	93.7	38.2	17.2	60.2	No.12 せ	
57	45	箆状石器	66.5	32.4	10.3	26	No.8 に	
58	45	箆状石器	37.2	29	12.1	9.4	RQ45　59-134G	
59	45	石錐	33.7	10.3	5.9	2	No.18 ぬ	
60	45	石錐	34.3	11.3	5	1.9	RQ67　60-135G	
61	45	尖頭器	32.2	9.9	5	1.4	56-135G	
62	45	箆状石器	41.5	27.5	7.4	7.1	RQ35　59-136G	
63	45	尖頭器	31.5	24.1	8	5.9	RQ8　61-134G	
64	45	石錐	51.8	18.2	11.4	8.8	55-137G	
65	45	石錐	45.7	27.1	10.2	18.5	RQ22 60-134G	
66	45	石錐	48.3	24.1	10.7	10	RQ38　61-134G	
67	45	石錐	38.8	15.5	6.4	3.2	55-133G	
68	45	石鏃	26.7	19	6.9	2.3	RQ7　62-164G	
69	45	石鏃	26.2	16.8	5	2	59-137G	
70	45	石鏃	27.6	19.9	6.5	2	No.11 す	
71	45	石鏃	24.4	19.9	4.5	2.1	RQ119　55-134G	
72	46	縦型石匙	111	30	9	28	53 ～ 54-136 ～ 140G	
73	46	横型石匙	35.4	37.6	7.4	8.1	58-133G	
74	46	掻器	50.2	60.3	13	39	RQ17　55-137G	
75	46	縦型石匙	65.6	40.6	7.7	13.5	表採	
76	46	縦型石匙	96.3	28.2	7.3	18	RQ34　60-136G	
77	46	縦型石匙	80.8	29.7	9.5	19.4	RQ147　58-134G	
78	46	縦型石匙	69	36.5	5.9	15	RQ54　58-137G	
79	46	縦型石匙	47.6	24.8	3.5	4.8	No.25 せ	
80	46	縦型石匙	59	20.7	8	8.9	No.13 そ	
81	46	縦型石匙	68.5	24.5	8.6	8.5	RQ14　59-137	
82	46	縦型石匙	47.3	18.6	7	5.2	RQ30　38-139G	
83	46	縦型石匙	57.2	30	7	11.9	RQ19　57-139G	
84	46	縦型石匙	68	21.3	6.9	10.1	RQ105　56-135G	
85	46	縦型石匙	61	23.5	8.4	18.2	SK5	
86	46	縦型石匙	81.3	37.5	9	17	No.12 せ	

表 8　蕗畑遺跡　土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	調整技法 外面	内面	底部	出土地点	備考
1	56	須恵器	坏	74	134	45	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	表採	
2	56	須恵器	坏	(130)	(63)	41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	168 － 126G	
3	56	須恵器	高台付坏	-	(65)	-	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	表採	底部にヘラ書き有り
4	56	須恵器	坏	165	64	41	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ST1 RP2	底部に墨痕、内面にスス付着
5	56	須恵器	坏	147	70	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切	ST1 RP1	底部に墨書 (文字不明)
6	56	須恵器	坏	-	72	-	ロクロ	ロクロ	回転糸切	168 － 125G	内面に墨痕
7	56	須恵器	高台付坏	-	(70)	-	ロクロ	ロクロ	回転糸切	168 － 125G	
8	56	黒色土器	高台付坏	-	-	-	ロクロ	ミガキ	回転糸切	168 － 124G	外面に火はね痕
9	56	須恵器	蓋	150		27	ロクロ、ケズリ	ロクロ	回転ヘラ切	113 － 125G	つまみ内部に墨書（文字不明）
10	56	須恵器	蓋	163		31	ロクロ、ケズリ	ロクロ	回転糸切	RP8	転用硯としての使用痕有り
11	56	須恵器	蓋	(150)		31	ロクロ、ケズリ	ロクロ	回転糸切	表採	
12	56	須恵器	壺	-	106	-	ロクロ	ロクロ	押圧痕	170 － 123G	
13	57	土師器	埦	(114)	68	40	ハケメ	ミガキ・ハケメ	木葉痕	ST1	胎土に海面骨針混入
14	57	土師器	甕	-	-	-	ロクロ	ロクロ		168 － 124G	
15	57	土師器	甕		78		ハケメ	ハケメ	木葉痕	表採	
16	57	土師器	甕	(152)	(66)	140	ハケメ	ハケメ	布痕	ST1	
17	57	土師器	甕	(118)	(88)	122	ハケメ	ハケメ	木葉痕	表採	

遺物番号	挿図番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	縄文	出土地点	備考
18	57	縄文土器	深鉢	(282)	120	291	LR	SK9	
19	57	縄文土器	鉢	-	-	-	LR	SK7	
20	57	縄文土器	鉢	-	(140)	-		SK1	
21	57	縄文土器	鉢	-	92	-		SK17	
22	58	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR	RP9	
23	58	縄文土器	深鉢	-	-	-		176 － 123G	
24	58	縄文土器	穿底土器		(72)		LR	176 － 119G	
25	58	縄文土器	深鉢	-	-	-		173 － 122G	
26	58	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR	表採	
27	58	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR	171 － 118G	
28	58	縄文土器	鉢	-	-	-	LR RL	SK7	
29	58	縄文土器	鉢	-	-	-		176 － 121G	
31	58	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR	170 － 122G	
32	58	縄文土器	鉢	-	-	-	LR RL	171 － 121G	
33	58	縄文土器	深鉢	-	-	-		174 － 122G	
34	58	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR	171 － 121G	
35	58	縄文土器	深鉢	-	-	-	LR	171 － 121G	
36	58	縄文土器	台付甕	-	-	-		171 － 118G	

表 9　蕗畑遺跡　石器観察表

遺物番号	挿図番号	器種	計測値 (mm) 長さ	幅	厚さ	重量 (g)	出土地点	備考
37	59	箆状石器	175	59.8	23.4	246	-	
38	59	箆状石器	174.3	60.8	26.6	255	-	
39	59	箆状石器	189.4	56.1	24	280	-	
40	59	箆状石器	118.4	38.1	18.3	84.6	173-121G	
41	59	箆状石器	101.5	50.5	16	94.9	171-122G	
42	59	箆状石器	86.3	42.4	16.5	59.2	171-123G	
43	59	石箆状石器	51.5	24.2	11.7	13	-	上部欠損
44	59	箆状石器	75.5	35.2	18.1	43.8	-	
45	59	箆状石器	96.5	44.1	11.7	54.2	-	
46	60	箆状石器	63.3	36.7	14.6	38.9	174-121G	
47	60	箆状石器	71.8	38.6	12.3	38	遺構外	
48	60	箆状石器	64.8	51.6	15.6	51.2	A トレンチ	
49	60	箆状石器	92.1	61.9	11.8	58	A トレンチ	
50	60	削器	100.5	39.6	9.2	36	A トレンチ	
51	60	削器？	62.4	40.9	16.4	41.8	172-120G	
52	60	箆状石器	44.1	30.7	7.3	9.2	172-119G	
53	60	石錐？	57.5	31	15.5	23.4	173-122G	
54	60	石鏃	43.3	12.7	4	2	C トレンチ　173-119G	下部欠損
55	60	石鏃	24.7	17.5	8.2	2.9	G トレンチ　178-122G	
56	60	石鏃	21	14.5	4.3	1	H トレンチ　178-119G	上部欠損

2　まとめ

総合公園内遺跡群が所在する竹原地区から、その南西方向の梨郷地区にかけての山地や山麓では、縄文時代から各時代にわたって遺跡が見られ、縄文時代早期から鎌倉時代まで断続した形で遺跡が営まれていたと思われる。

まとめでは、石ヶ窪Ａ遺跡と蕗畑遺跡で出土した、主に縄文時代の土器と石器の考察と比較、牛ヶ首Ａ遺跡と蕗畑遺跡で出土した須恵器の考察と梨郷平野古窯跡との関連性について述べる。

（１）縄文土器

石ヶ窪Ａ遺跡の縄文土器

第 41 図１・２は、口縁が平らな深鉢で、文様は羽状縄文のみで口縁まで覆われている。縄文原体の長さは短めである。第 42 図３～ 11 及び第 43 図 12 ～ 26 の土器片は、特徴として、口縁部の撚糸圧痕による渦巻き状と斜位の装飾があげられる。類似の土器は、山形・宮城・福島の各県に広く分布しており、同じ南陽市内では、漆山地区にある大野平遺跡で類例の出土が見られる（佐藤・吉野 1986）。これらの時期は縄文前期初頭の上川名Ⅱ式に比定できる。

第 43 図 27 ～ 32 は、器壁が薄手で、直線的に外傾する胴部が頸部で外反する中型の深鉢形土器である。なお 30 と 31 は同一個体であると思われる。27・28・32 は、口縁部から頸部にかけて２条の沈線で曲線が描かれている。29・30・32 は、隆帯に刻みがつけられ、その上下に格子目状沈線文と円形竹管文が施されている。これらに類似した土器は、福島市の獅子内遺跡の遺物包含層から出土している（鈴鹿・山内 1996）。同報告書ではこの土器を、縄文前期の大木１式・関山式並行期の土器としているが、縄文早期中葉の明神裏Ⅲ式並行期まで遡る可能性がある。

第 44 図 34 ～ 36 は、半截竹管状の工具による波状沈線文、38・40 には同じく半截竹管状の工具を用いた刺突文、41 には円形の刺突文が見られる。竹管文は、縄文時代前期前半に特徴的に認められるものであるが、石ヶ窪Ａ遺跡のこれらの土器群のうち、34 ～ 36 は縄文時代前期前葉の大木２ｂ式期、41 は大木３式期頃のものと思われる。

38 は、興津式並行頃（縄文前期後半）、39 は細い隆状帯の上下に細かい刺突文がある。朝日下層式に並行するものと考えられ、時代は縄文前期末である。40 は胎土に繊維を含み、鵜ヶ島台式に比定されるものと思われる。時期は他のものよりも古く、縄文時代早期後葉である。

42 と 43 は土器の底部に「ハ」の字状の半截竹管文が同心円状に施されており、縄文時代前期初頭に特徴的な土器である。[註１）]

蕗畑遺跡の縄文土器

第 58 図 22・31・32・34・35 は口縁部が強く外反する深鉢型の土器である。31・32・34 は口縁部に粘土紐を貼り付け、押圧を加えて鋸歯状にした、所謂「鋸歯状装飾帯」が大波状口縁の波頭部に施されている。32 は、口唇部の撚糸圧痕に山形の沈線文を施している。

22・35 は、口縁部に太めの工具による横位ないし縦位の連続刺突文を施している。これらの土器群は、縄文時代前期後半に属するもので、東北地方南半では大木５式にあたる。山形文は沈線によるもので、粘土紐による折り返しの山形文は認められない。

第 58 図 25 と 29 は、平行沈線文と円形刺突文、貝殻腹縁文が見られるが、出土点数はごく僅かである。前述した大野平遺跡で類例が出土している（佐藤・吉野 1986）。29 はシジミのような鋸歯状でない貝を用いたと思われる貝殻腹縁文で施文されている。この腹縁文は口縁の内面にもある。いずれも縄文時代早期中葉頃の田戸上層式に比定される。

27 は沈線で区画された磨消縄文が見られる。おそらく縄文時代後期中葉の加曽利Ｂ式に並行するものと思われる。

第 57 図 18 は、体部は斜縄文のみで施文されており、体部の縄文が比較的細かいことと、器厚が薄いこと、体部下方の膨らみかたなどから、縄文中期から後期初頭頃のものと考えられる。

（２）石器

石ヶ窪Ａ遺跡の石器群

石匙はほとんどが縦型（第 46 図 75 ～ 86）である。多くが片刃で、背面に打面となる調整剥離を施し、正面に丁寧な押圧剥離を有する。石匙は、早期・前期頃は縦型が多く、中期以降は横型が多くなる傾向がある。86 のようなものは「松原型石匙」に、77 のようなものは「バナナ型石匙」に分類される。時期は、早期末葉から前期初頭頃には「松原型」が主体で、その後、前期前葉から中葉にかけて「バナナ型」の形態に変化していく（秦 2009）。唯一両刃である 72 は、つまみ部分のえぐりが緩やかで、「押出型ポイント」に類似している。これは「バナナ型」に続く形態で、最上川流域の縄文前期の遺跡に散見され、特に米沢盆地に多い（佐藤ほか 2009）。横型石匙（73）と合わせて、大木５～６式期のものと考えられる。

箆状石器（第 45 図 53 ～ 58・62）も、正面に丁寧な調整剥離を施し、背面は縁辺部に荒い調整だけのものが多い。

石鏃は三角形や無茎のものが多く、ハート形に近い形をしているのは２点（69・70）のみである。こういったハート形のものは、前期中葉頃に発生したとされている（佐藤 2009）。

第 44 図の 50 の玦状耳飾と 51 の小玉の石材は共に滑石である。なお、山形県内には滑石の産地が無いため、他地域からの搬入品であると考えられる。可能性としては、岩手・新潟・群馬などがあげられる[註2)]。

写真図版 39 上側の３点の磨製石器は、左と中央が蛇紋岩、右が珪岩である。形状から、ミニチュアの磨製石斧と思われる。長さはいずれも 4.5 ㎝前後である。

打製石器の石材は、殆どが頁岩や珪質頁岩であるが、オレンジ色のメノウ製のもの（第 45 図 59）なども出土している。

蕗畑遺跡の石器群

蕗畑遺跡から出土した石器は、箆状石器・掻器・石鏃などで、石匙は認められない。

蕗畑遺跡の石器で特徴的なのは、大型の箆状石器である（第 59 図 37 ～ 39）。長さは 17.5 ㎝から 19 ㎝ほどで、両面に丁寧な調整剥離を施し、刃部に横方向からの直接打法による剥離を有する。その他の箆状石器も両面に丁寧な調整剥離を施すものが多い（40 ～ 45）。

石鏃は三角形の無茎に近いものが３点（第 60 図 54 ～ 56）出土している。

これらの石器群は概ね縄文時代前期後半の遺跡に特徴的なものである。

大型の箆状石器は庄内町の東興野Ｂ遺跡で 15 ㎝程のものが出土している（渋谷 1981）。時期は大木６式から大木７ａ式期にあたる。それ以外の箆状石器も全体的に大型であるが、こういった大型品優勢の傾向は、遺跡と原石の産地との距離が影響していることを考慮しなければならない。蕗畑遺跡の付近では、織機川の上流で流紋岩と珪質頁岩が産する（佐藤・吉野 1986）。

（３）総合公園内遺跡群出土須恵器と南陽市梨郷平野古窯跡の関連性

総合公園遺跡群の牛ヶ首Ａ遺跡と蕗畑遺跡からは、須恵器と土師器がややまとまって出土している。

梨郷平野古窯跡（以下、平野古窯と表記する）は、総合公園内遺跡群から西に直線距離で約１．５㎞の緩斜面に位置する、奈良・平安時代の窯跡である。

今回調出土した遺物と、平野古窯の須恵器の関連について考察する。

平野古窯は、昭和 40 年に梨郷村教育委員会によって１号窯跡の調査が行われ、発掘調査は山形大学教育学部考古学研究室が担当した。

調査の結果、半地下式の登り窯１基が確認された。遺物は窯跡前面の捨て場から出土しており、坏・蓋・高台付坏・甕・壺などである（第 61 図）。出土した須恵器の特徴として口径と底径が大きく、それに対して器高が低い。また、底部の切り離しがいずれもヘラ切り手法であることなどがあげられる（柏倉 1970）。このことから、この窯跡が使用されていた年代は、奈良時代の８世紀末頃から９世紀前半頃と考えられる（伊藤 2008）。

資料化されているものが少ないため、この窯で焼かれた須恵器がどこへ供給されたかなどについてはまだ不明な点が多い（佐藤鎭雄・佐藤庄一 1987）。

牛ヶ首Ａ遺跡の須恵器

須恵器坏底部の切り離しは糸切りである。平野１号窯と比較して、器高は高めで口縁部が外反しており、体部

はやや丸みを帯びている（第 34 図１～４）。これらのことから、牛ヶ首Ａ遺跡出土須恵器の年代は平安時代初頭９世紀中頃（第３四半期頃か）と思われ、平野１号窯の須恵器とは異なることになる。

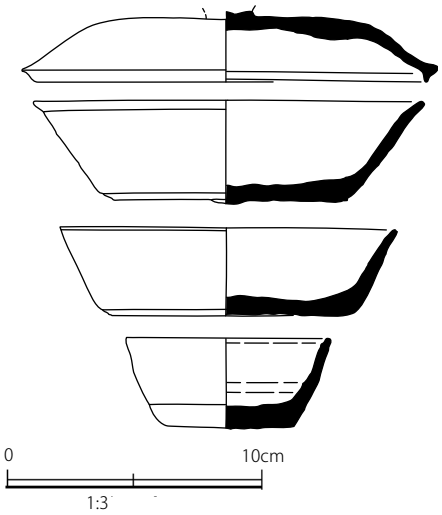
蕗畑遺跡の須恵器

蕗畑の須恵器底部の切り離しも、一部を除きほとんどが糸切りである。しかし、牛ヶ首のものと違って、こちらは口縁部が外反せず、器高が低めで口縁部がやや外に開く（第 56 図４～６）。時期は牛ヶ首Ａ遺跡の須恵器よりもやや古く、９世紀中頃（第２四半期頃か）と思われる。

第 56 図１・２の須恵器坏は、底部の切り離しがヘラ切りで、特に１は底径が大きく器形が逆台形に近くなっている。時期は、１が８世紀末、２が９世紀初め頃と推定される。

１だけは、年代や器形ともに平野１号窯の須恵器に近いが、胎土は蕗畑の須恵器の方が密であり、同じものとは考えにくい。

以上のように、現在確認できる資料からは、牛ヶ首Ａ遺跡や蕗畑遺跡は、平野古窯から供給されたものではないと推測される。しかし、平野古１号窯は、平成８年に、１号窯跡とは年代が違う新規の窯跡が見つかっており、未調査ながら他にも窯跡が存在する可能性があることから、牛ヶ首Ａ遺跡と蕗畑遺跡の須恵器がこの近くで焼かれた可能性については保留しておきたい。



第 61 図　梨郷平野古窯１号窯出土須恵器
（平野山古窯群　寒河江市教育委員会）

註

１）縄文土器の形式については、財団法人山形県埋蔵文化財センターの黒坂雅人氏にご教示頂いた。
２）山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館の秦昭繁氏のご教示による。なお秦氏からは、一部の石器の石材鑑定も行って頂いた。

引用文献

相原淳一 1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年ー仙台湾周辺の分層発掘資料を中心にー」『考古学雑誌』第 76 巻第 1 号　日本考古學會
阿部明彦 1983『いるかい遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 69 集 山形県教育委員会
安部　実 1985『にひゃく寺遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 92 集 山形県教育委員会
伊藤邦弘 2008「山形県における出羽建国前後の須恵器」『出羽国ができるころー出羽建国期における南出羽の考古学ー』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
柏倉亮吉・伊藤　忍 1970『平野山古窯跡群ー山形県における古代窯業遺跡の研究ー』寒河江市教育委員会
小林達夫・小川忠博 1989『縄文土器大観 1　草創期　早期　前期』小学館
佐藤禎宏・佐藤鎮雄ほか 1984『砂川 A 遺跡発掘調査報告書』朝日村埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集　朝日村教育委員会
佐藤鎮雄 2009『じょうもん天地人ーやまがた前期縄文文化の考古学ー』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐藤鎮雄・佐藤庄一ほか 1987『南陽市史考古資料編』南陽市
佐藤鎮雄・吉野一郎ほか 1986『南陽市須刈田大野平遺跡第 2 次発掘調査報告書』 山形県南陽市埋蔵文化財調査調査報告書第 2 集　南陽市教育委員会
佐藤庄一・黒坂広美 1994『松原遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 11 集　財団法人山形県埋蔵文化財センター
渋谷孝雄・黒坂雅人 1989『月ノ木 B 遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 135 集 山形県教育委員会
渋谷孝雄・黒坂雅人 1988『吹浦遺跡第 3 ・ 4 次緊急発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 120 集　山形県教育委員会
渋谷孝雄・竹田純子 2001『小山崎遺跡第 4 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 91 集　財団法人山形県埋蔵文化財センター
渋谷孝雄・佐藤正俊 1981『東興野 B 遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 44 集　山形県教育委員会
鈴鹿良一・山内幹夫ほか 1996『獅子内遺跡　摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅱ』福島県文化財調査報告書第 320 集　福島県教育委員会
戸沢充則編 1994『縄文時代研究辞典』東京堂出版
新潟県考古学会 1999『新潟県の考古学』
新海和広 2007「秋田県内の縄文前期初頭～前葉期土器群の様相再検討ー鳥野上岱遺跡Ⅱ群土器の再分類ー」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第 21 号　秋田県埋蔵文化財センター
橋爪　健・秦　昭繁 1977『松原』置賜考古学会
秦　昭繁 2009「やまがたの前期縄文石器と地域間交流」『じょうもん天地人ーやまがた前期縄文文化の考古学ー』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
早瀬亮介・菅野智則ほか 2006　東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵大木囲貝塚出土基準資料ー山内清男編年基準資料ー」『Bulletin oh Tohoku University Museum』No.5　東北大学総合学術博物館
水戸部秀樹 2003『かっぱ遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 114 集）財団法人山形県埋蔵文化財センター

写 真 図 版

調査作業風景

3 号墳調査前全景（南西より）

3 号墳調査前全景（北東より）

4 号墳調査前全景（南西より）

3 号墳 (左) ・4 号墳 (右) 空撮写真

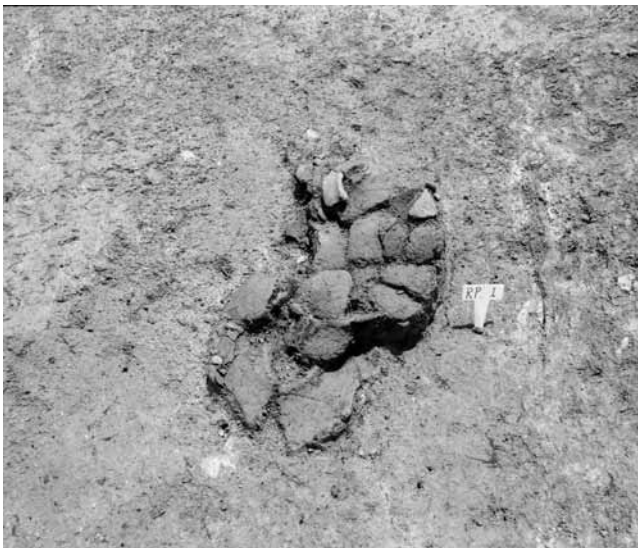
4 号墳 (左) ・ 2 号墳 (右) 空撮写真

3 号墳完堀状況（北東より）

3 号墳完堀状況　（南西より）

3 号墳前方部　（西より）

3 号墳くびれ部分　（南西より）



3 号墳　底部穿孔壺 1　出土状況 (北より)

3 号墳　底部穿孔壺 9 ～ 14　出土状況 (西より)

3 号墳　底部穿孔壺 3　出土状況

3 号墳　底部穿孔壺 9 ～ 14
出土状況 (西より)

3 号墳　底部穿孔壺 1　出土状況（西より）

4 号墳完堀状況
（北より）

4 号墳完堀状況 （南より）

4 号墳 （西より）

4号墳　後方部コーナー部分(西より)

4 号墳　d-d`(南より)

4 号墳　e-e`(東より)

4 号墳　f-f`(南より)

4 号墳　g-g`(東より)

4 号墳　h-h`（北より）

4 号墳周濠 （南より）

4 号墳周濠 （南より）

4 号墳周濠 （東より）

4 号墳　壺 19　出土状況 (西より)

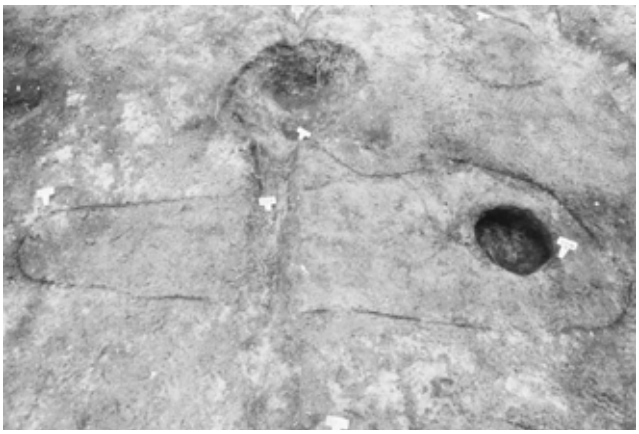
4 号墳　壺 19　出土状況 (西より)

4 号墳　底部穿孔壺 21　出土状況 (南東より)

4 号墳　底部穿孔壺 22　出土状況

4 号墳　RP17 ～ 27 出土状況（北より）

4 号墳　底部穿孔壺 21　出土状況（北より）



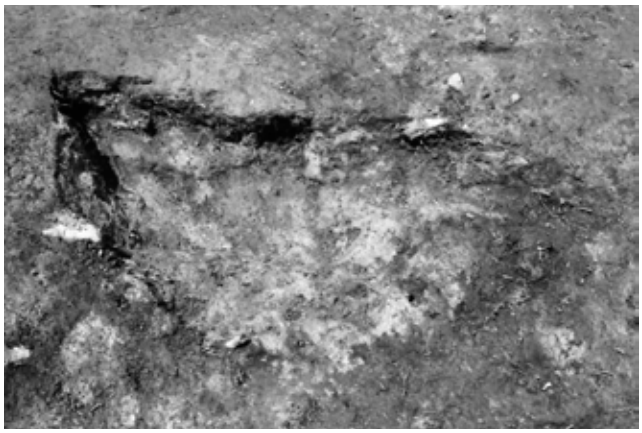
牛ヶ首 A 遺跡 B 区　SL5（南西より）

牛ヶ首 A 遺跡 B 区　SP9・SP10（南西より）

牛ヶ首 A 遺跡 C 区　調査前状況

牛ヶ首 A 遺跡 C 区　調査区近景（南より）

牛ヶ首 A 遺跡 C 区　SK2（北より）



牛ヶ首 A 遺跡 C 区　SK4（南東より）

牛ヶ首 A 遺跡 C 区　SL1（西より）

牛ヶ首 A 遺跡 C 区　SP2（東より）

牛ヶ首 A 遺跡 A 区　調査前

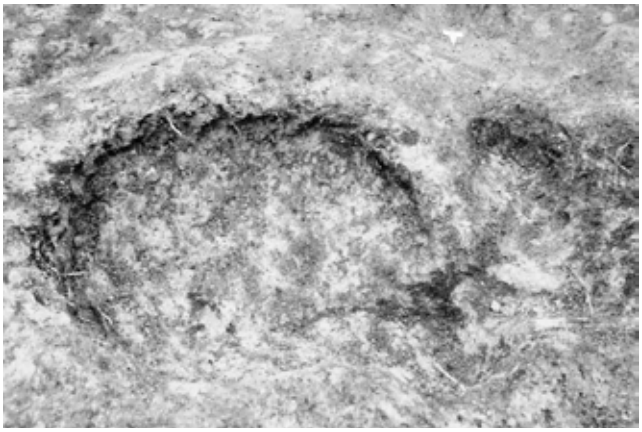
牛ヶ首 A 遺跡 A 区　調査区全景（南より）

牛ヶ首 A 遺跡 A 区　SD1（東より）

牛ヶ首 A 遺跡 A 区　SK4（南西より）

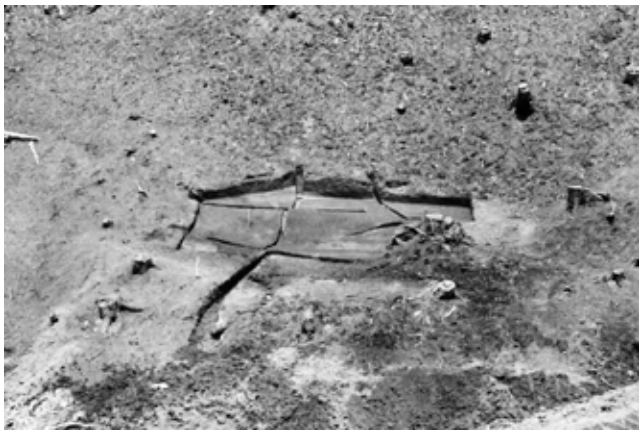
牛ヶ首 A 遺跡 A 区　SK5（北西より）

牛ヶ首 A 遺跡 B 区　完掘状況（南より）



牛ヶ首 A 遺跡 B 区　SK8（南西より）

牛ヶ首 A 遺跡 B 区　SK10 半裁（東より）



牛ヶ首 B 遺跡　調査区遠景（南より）

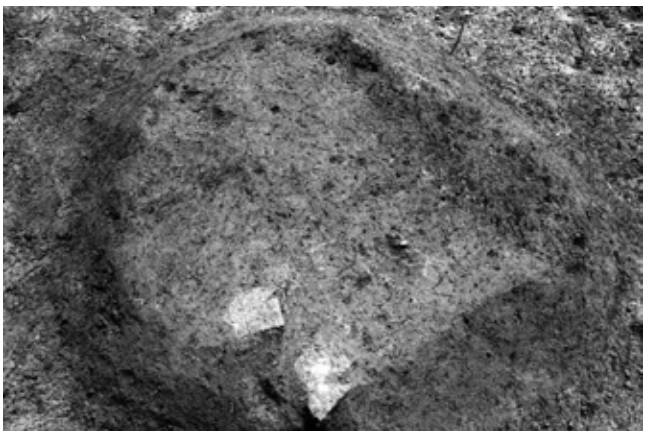
牛ヶ首 B 遺跡　調査区近景（北より）

石ヶ窪 A 遺跡　調査区全景（西より）

石ヶ窪 A 遺跡　調査区南側 SL 群（東より）

石ヶ窪 A 遺跡　SL1 完堀状況（西より）

石ヶ窪 A 遺跡　SL2 遺物出土状況（南西より）



石ヶ窪 A 遺跡　SL6 完堀状況（南東より）

石ヶ窪 A 遺跡　SL9 完堀状況（西より）

石ヶ窪 A 遺跡東区　SX1・SX2 完堀（西より）

石ヶ窪 A 遺跡東区　SX2 完堀（南より）

石ヶ窪 B 遺跡　調査区全景（東より）

石ヶ窪 B 遺跡　調査区南側・SL1（北東より）

雨沼遺跡 A 区　TM14

雨沼遺跡 A 区　TM20

雨沼遺跡 A 区　TM21

雨沼遺跡 A 区　TM22 完掘状況（東より）

雨沼遺跡 A 区　TM24 完堀状況

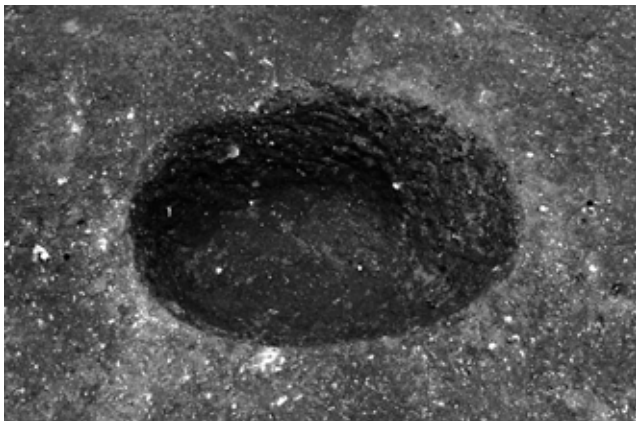
雨沼遺跡 A 区　TM27 完堀状況

雨沼遺跡 A 区　TM29 完堀状況

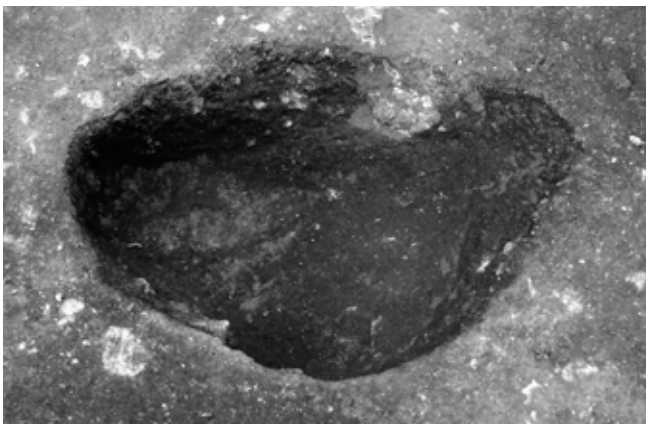
雨沼遺跡 A 区　TM34 完堀状況

雨沼遺跡 B 区　調査前状況

雨沼遺跡 B 区　完掘状況（北より）



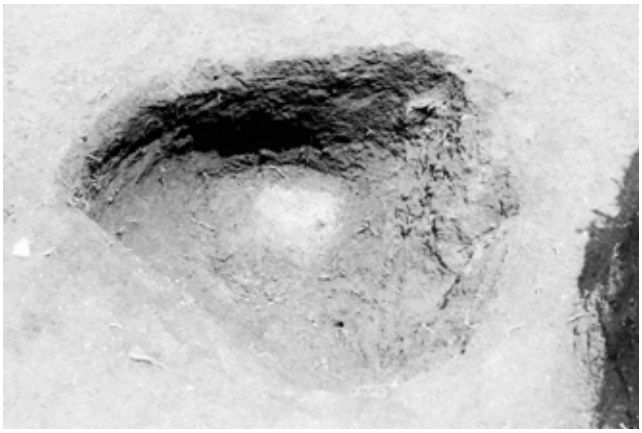
雨沼遺跡 B 区　SK1 完堀状況（西より）



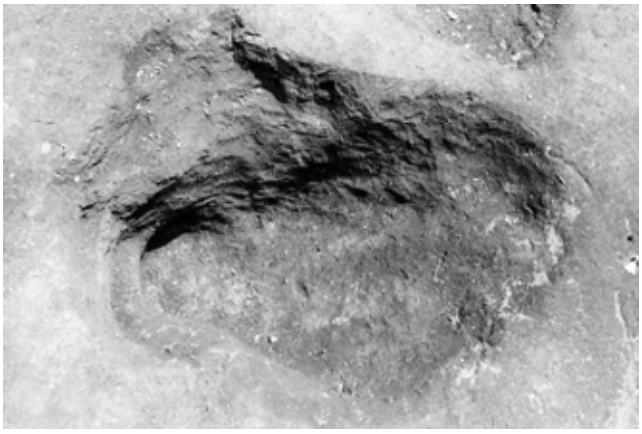
雨沼遺跡 B 区　SK2 完堀状況（西より）

蕗畑遺跡 A 区　トレンチ掘り

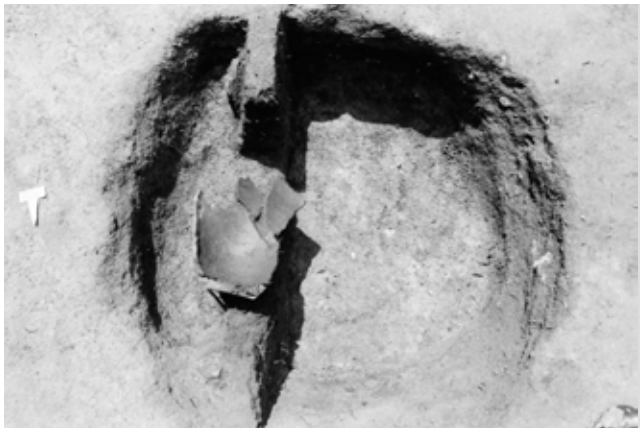
蕗畑遺跡 A 区　調査区全景（西より）



蕗畑遺跡 A 区　SK6 完堀（東より）



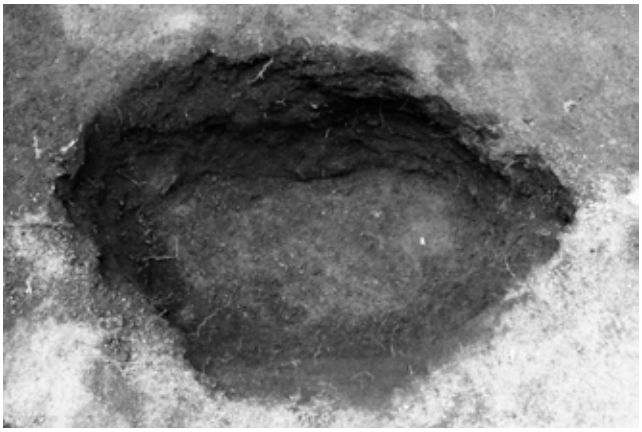
蕗畑遺跡 A 区　SK7 完堀（北西より）



蕗畑遺跡 A 区　SK9 遺物出土状況（東より）

蕗畑遺跡 A 区　SK11 完堀状況（西より）

蕗畑遺跡 A 区　SK15 調査状況（北東より）



蕗畑遺跡 A 区　SK17 完堀状況（南より）

蕗畑遺跡 B 区　調査区全景（東より）

蕗畑遺跡 B 区　ST1 遺物出土状況（南西より）

蕗畑遺跡 B 区　EL1 遺物出土状況（南より）

蕗畑遺跡 B 区　EL1 完堀状況（北西より）

蕗畑遺跡 B 区　SX1（西より）

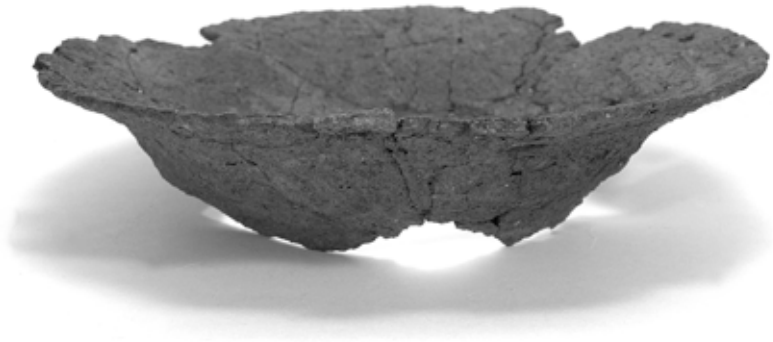
蕗畑遺跡　炭窯跡　遠景

蕗畑遺跡　炭窯跡　入口

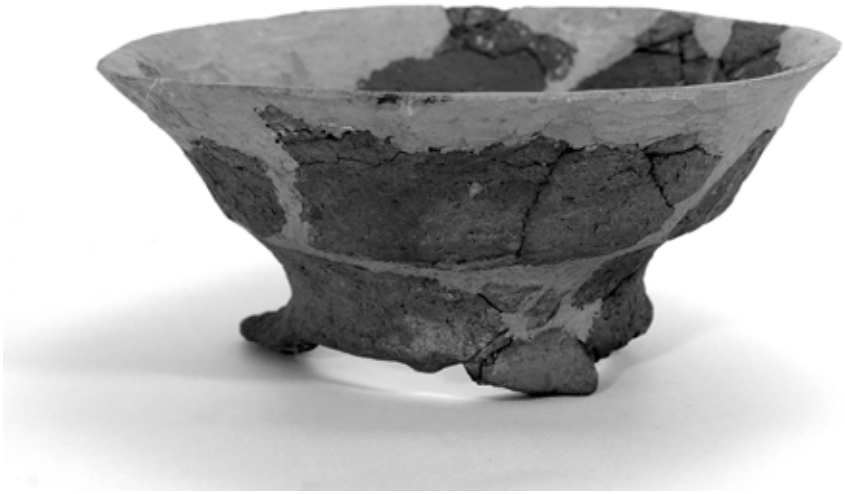
蕗畑遺跡　炭窯跡　内部

蒲生田山 3 号墳
19 土師器壺

蒲生田山古墳群　底部穿孔壺口縁部・器台



3　底部穿孔壺　口縁部



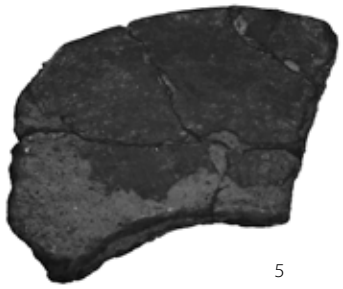
4　底部穿孔壺　口縁部

17　壺　口縁部

20　底部穿孔壺　口縁部
（口縁部を下にして撮影）

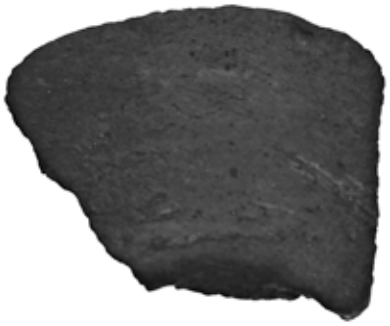
21　底部穿孔壺　口縁部
（口縁部を下にして撮影）

30　器台　脚部

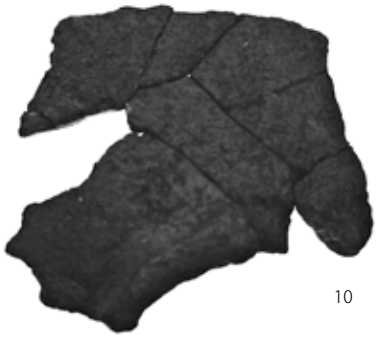

5

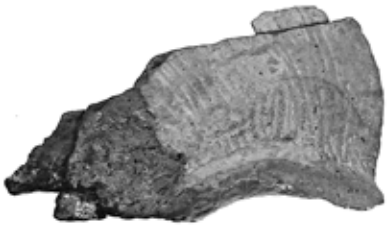
6

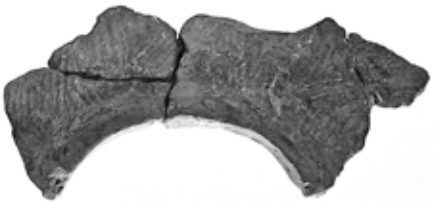
7


8

9


10

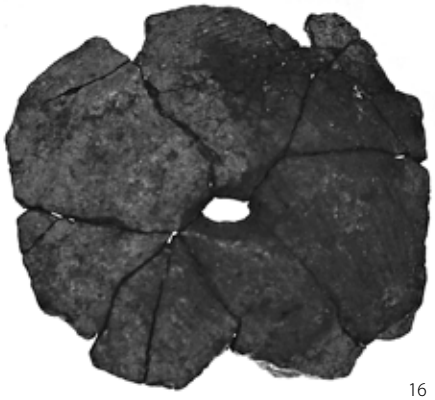

11


12

13

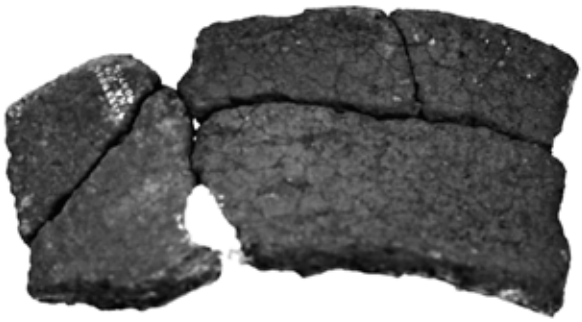
14

15

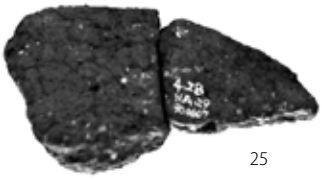

16

3号墳周壕出土　土師器底部穿孔壺・壺

23



24



25

26

27

28

29

4号墳周壕出土　底部穿孔壺・壺

3 号墳覆土出土　鉄製品（鉄刀・鉄斧・用途不明品）

3 号墳覆土出土　鉄刀 X 線写真

牛ヶ首遺跡　3　須恵器坏

牛ヶ首遺跡　5　土師器坏

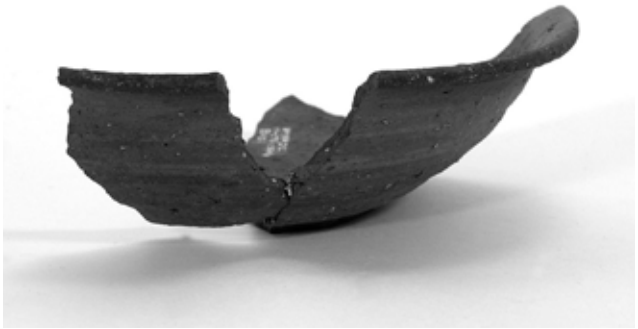
牛ヶ首遺跡　9　黒色土器坏

牛ヶ首遺跡　11　黒色土器高台坏

牛ヶ首遺跡　12　土師器甕

牛ヶ首遺跡　13　土師器甕

牛ヶ首遺跡　14　土師器小型甕



牛ヶ首遺跡　4　須恵器坏

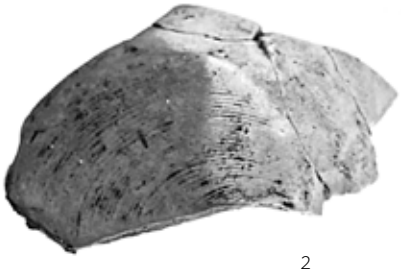
牛ヶ首遺跡　15　土師器甕

17

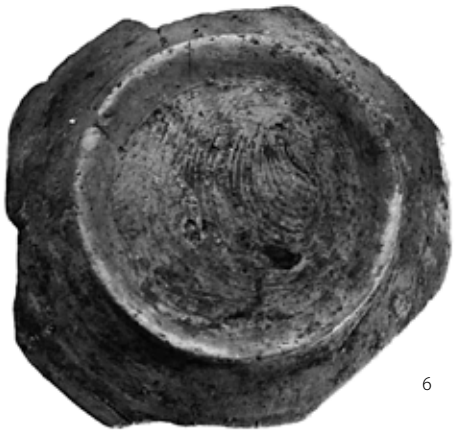
18

牛ヶ首遺跡　石器（掻器）

1



2



6

7

8

10

16

牛ヶ首遺跡　須恵器・土師器・縄文土器

石ヶ窪遺跡　2　縄文土器深鉢

石ヶ窪遺跡　縄文土器

4

8

9

10

11

12

13

石ヶ窪遺跡　縄文土器

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

石ヶ窪遺跡　縄文土器

26

27

28

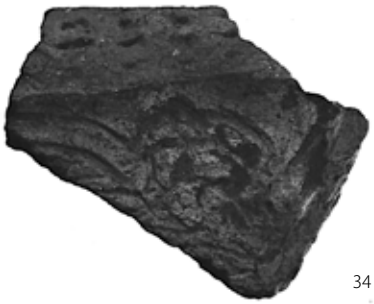
29

30

31

32

33



34

35

36

石ヶ窪遺跡　縄文土器

37

38

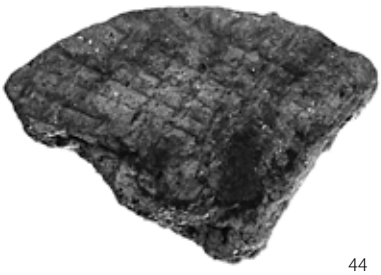
39

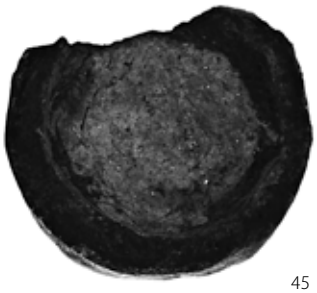
40

41

42

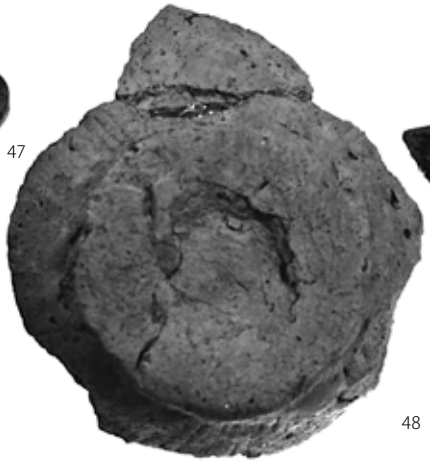
43


44


45

46

47


48

49

石ヶ窪遺跡　縄文土器・土師器

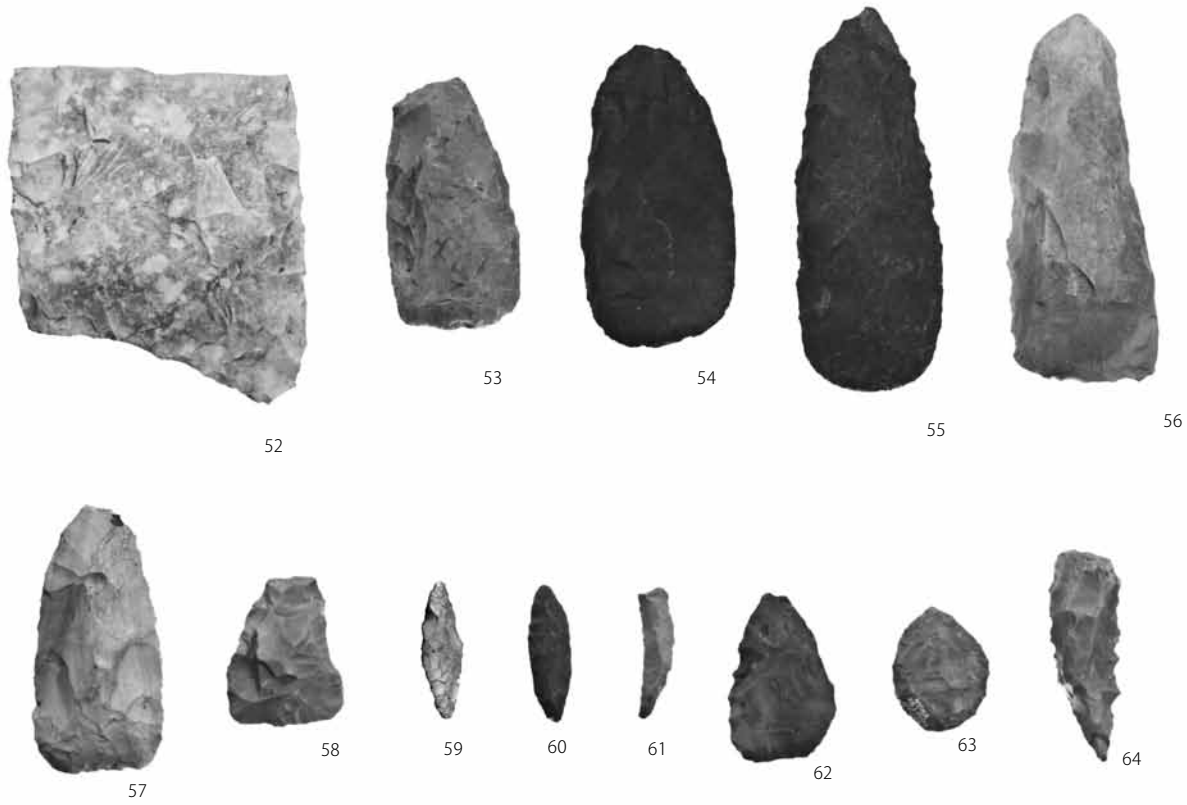
50

51

（表）

（裏）

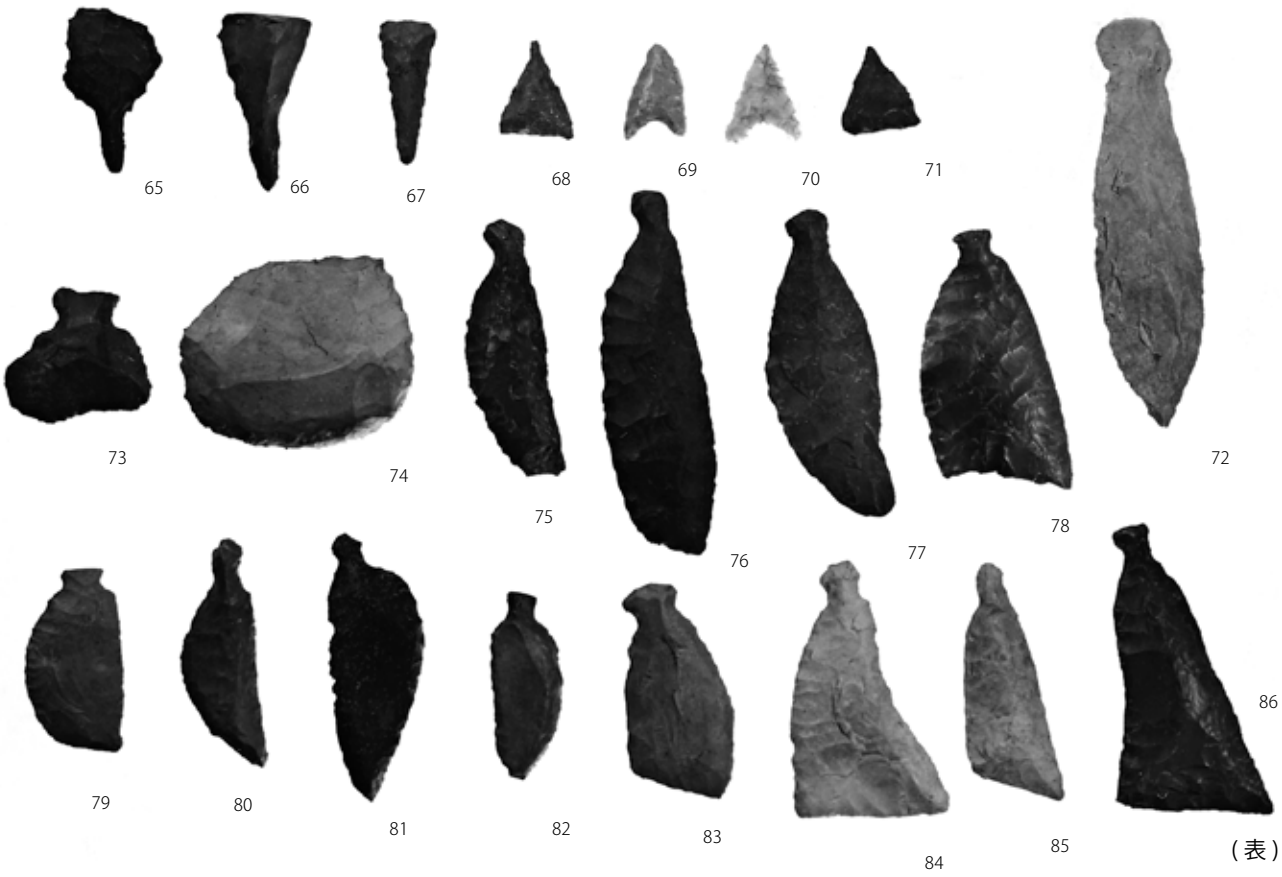
石ヶ窪遺跡　玦状耳飾・臼玉



（表）

（裏）

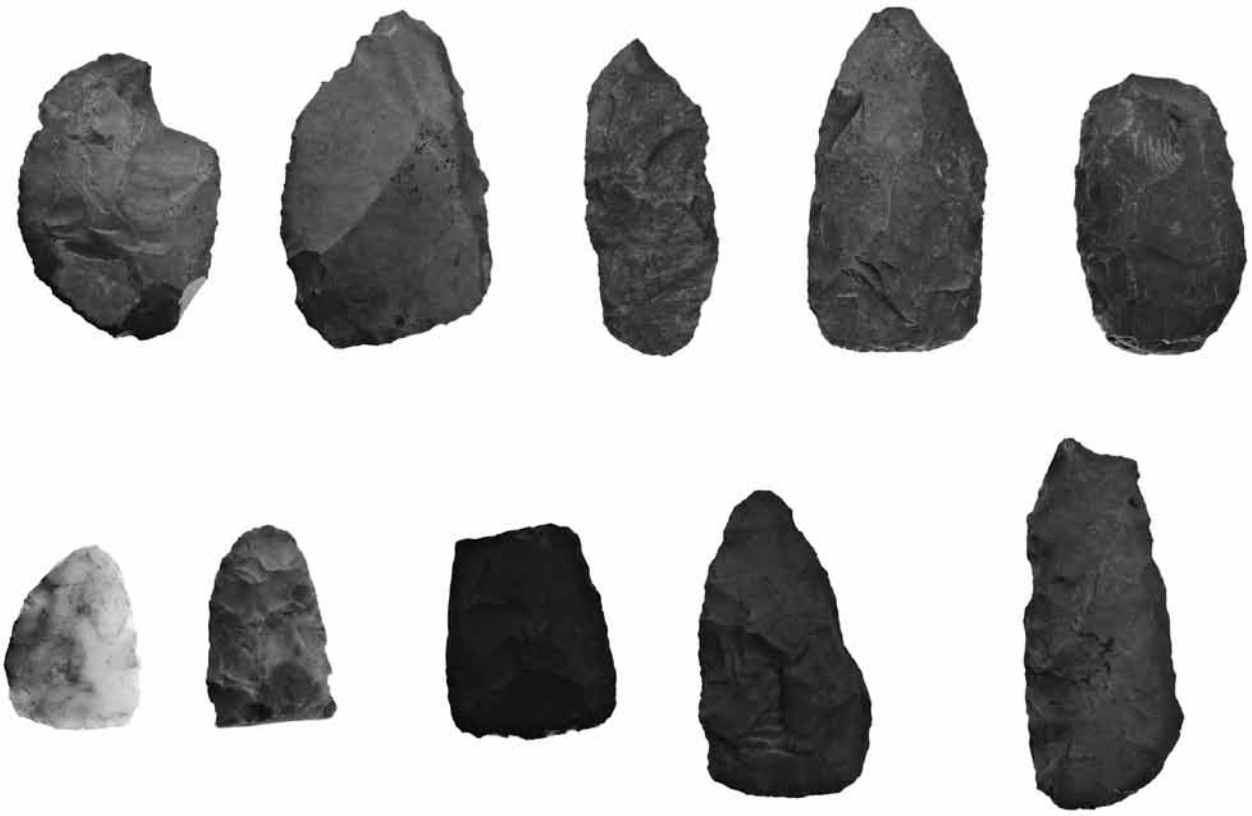
石ヶ窪遺跡　箆状石器



（表）

（裏）

石ヶ窪遺跡　石匙・石鏃・石錐

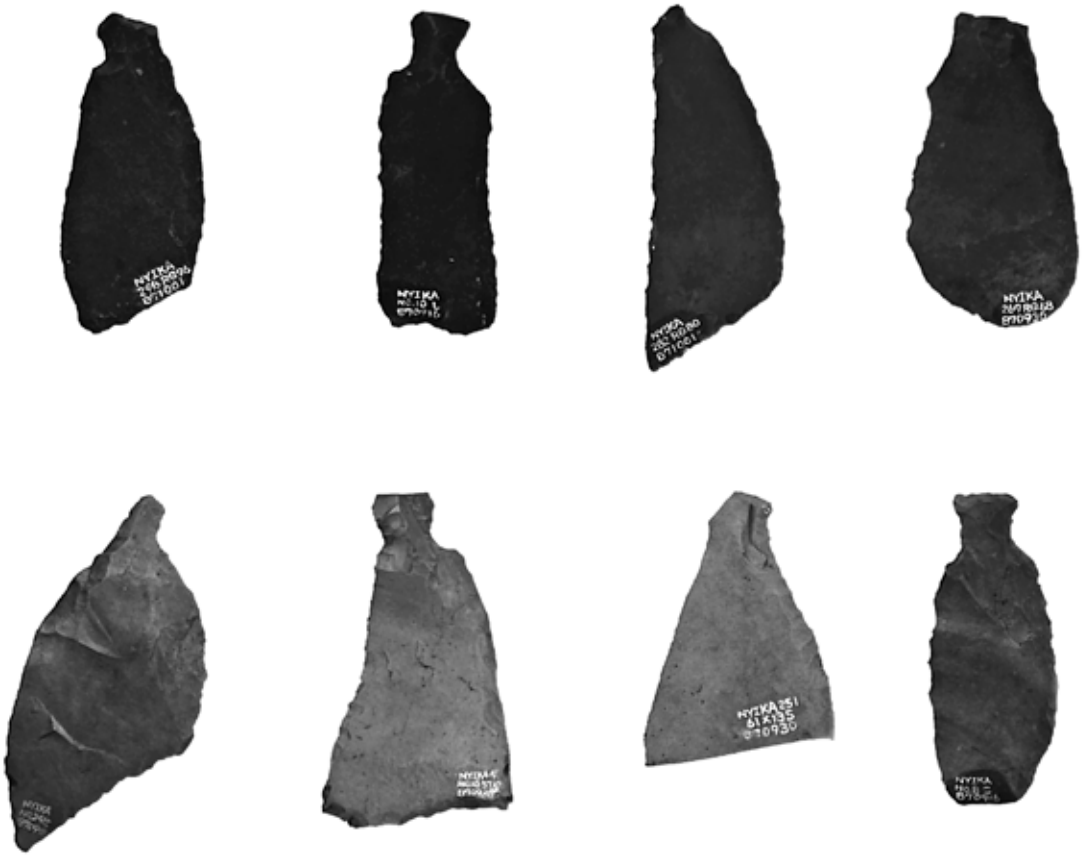


（表）

（裏）

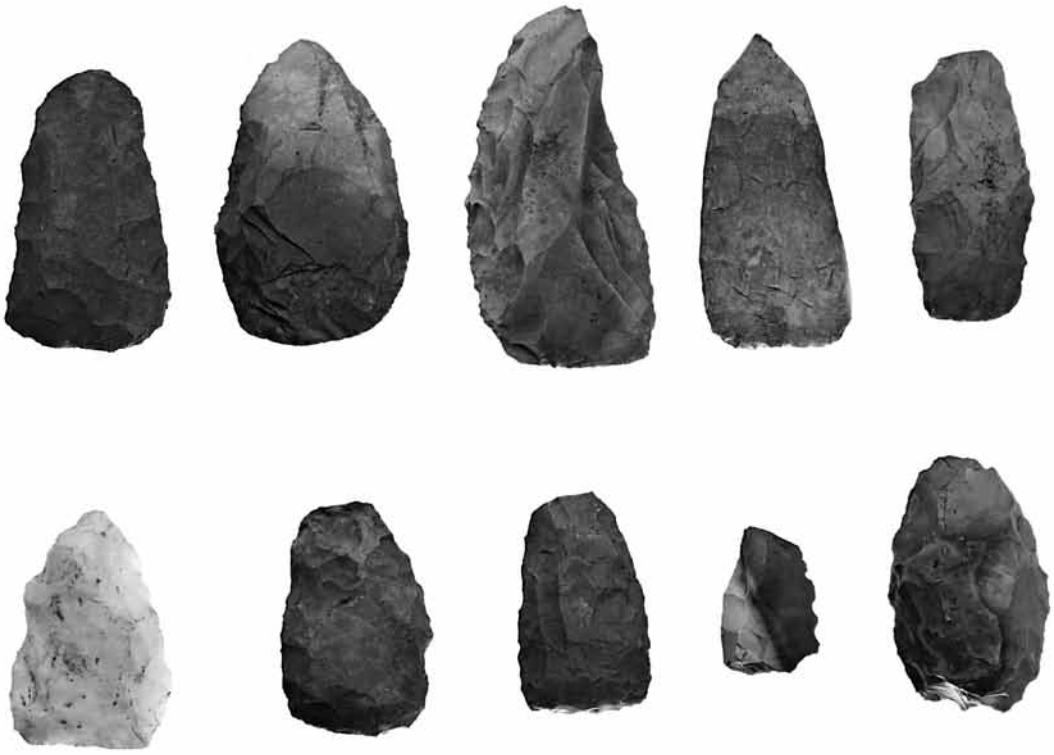
石ヶ窪遺跡　篦状石器

（表）



（裏）

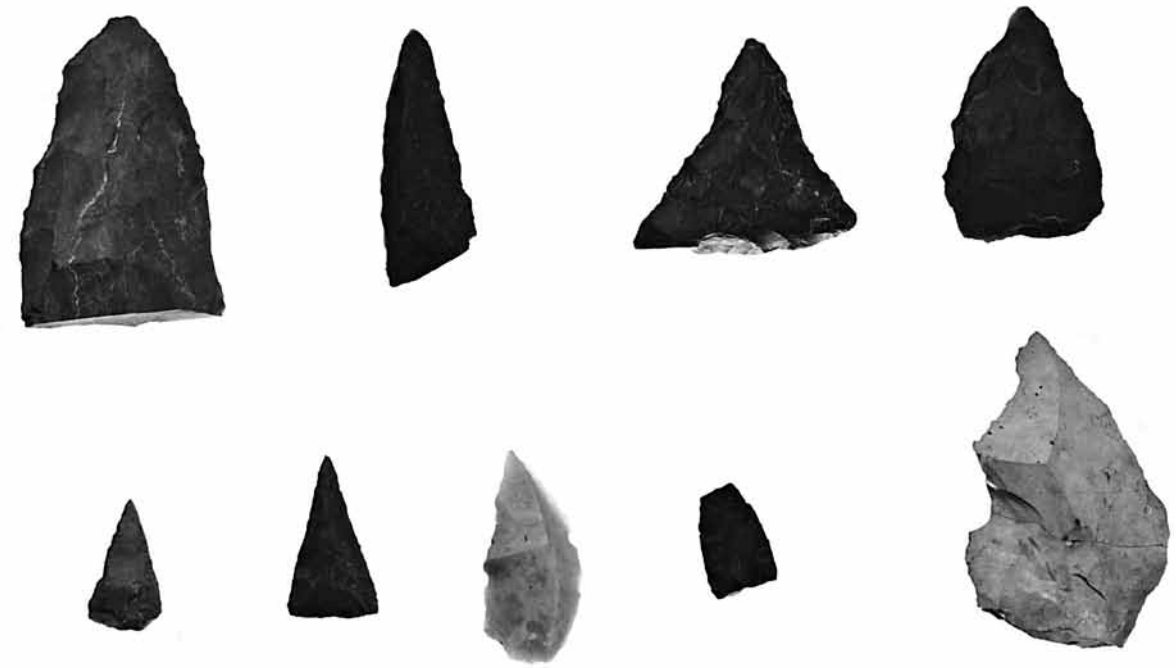
石ヶ窪遺跡　石匙



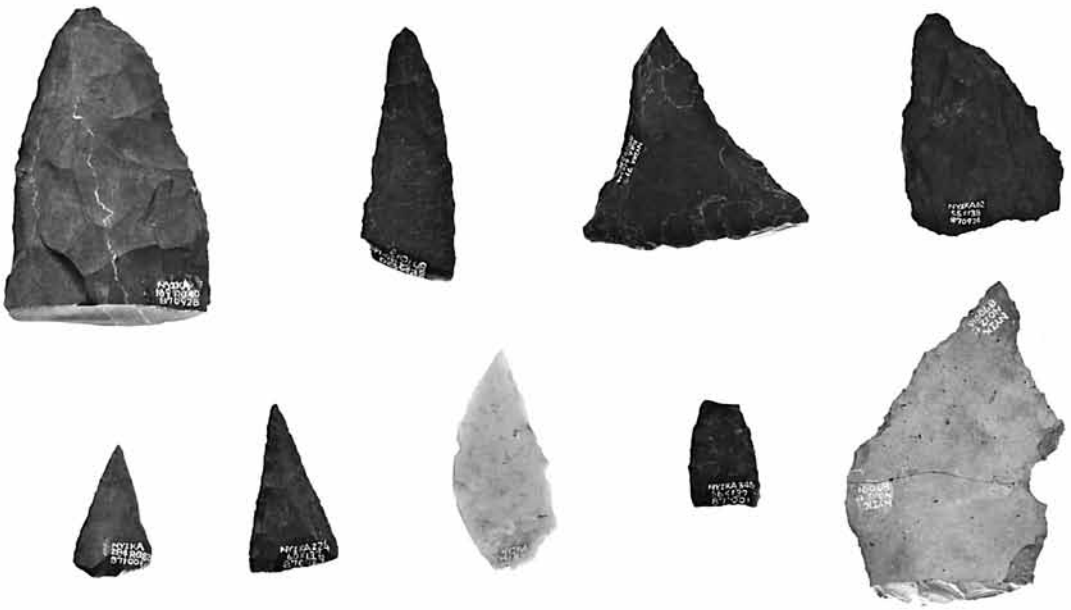
（表）

（裏）

石ヶ窪遺跡　箆状石器

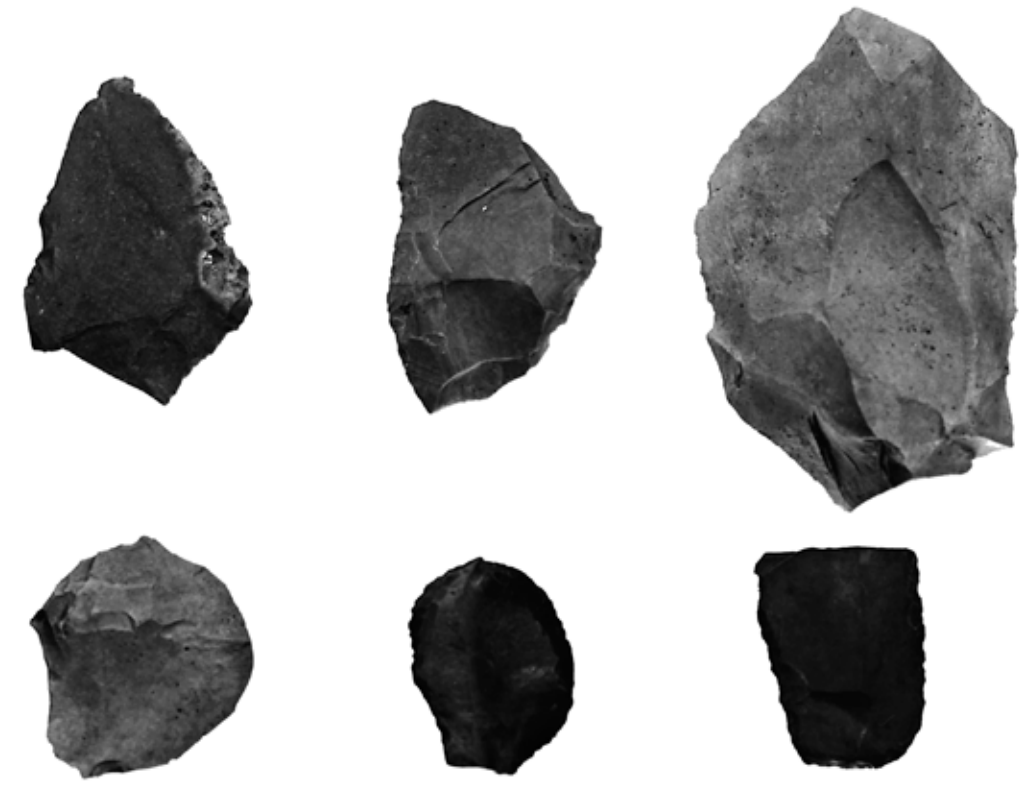


（表）

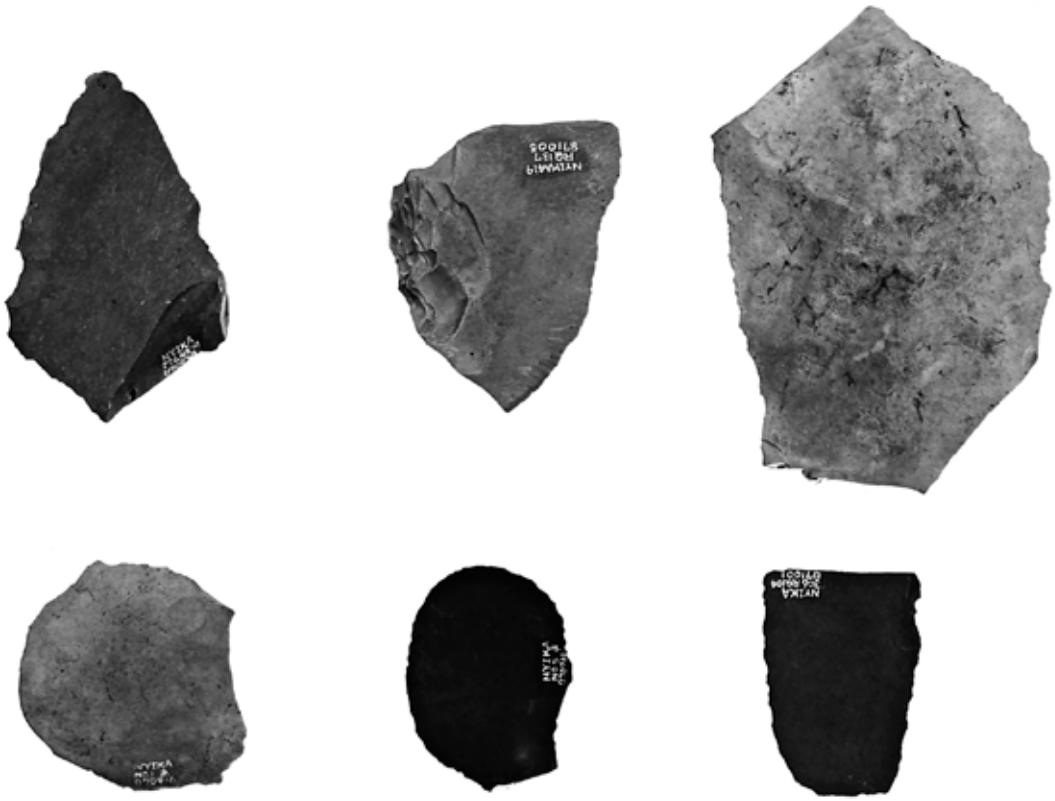


（裏）

石ヶ窪　尖頭器・石鏃

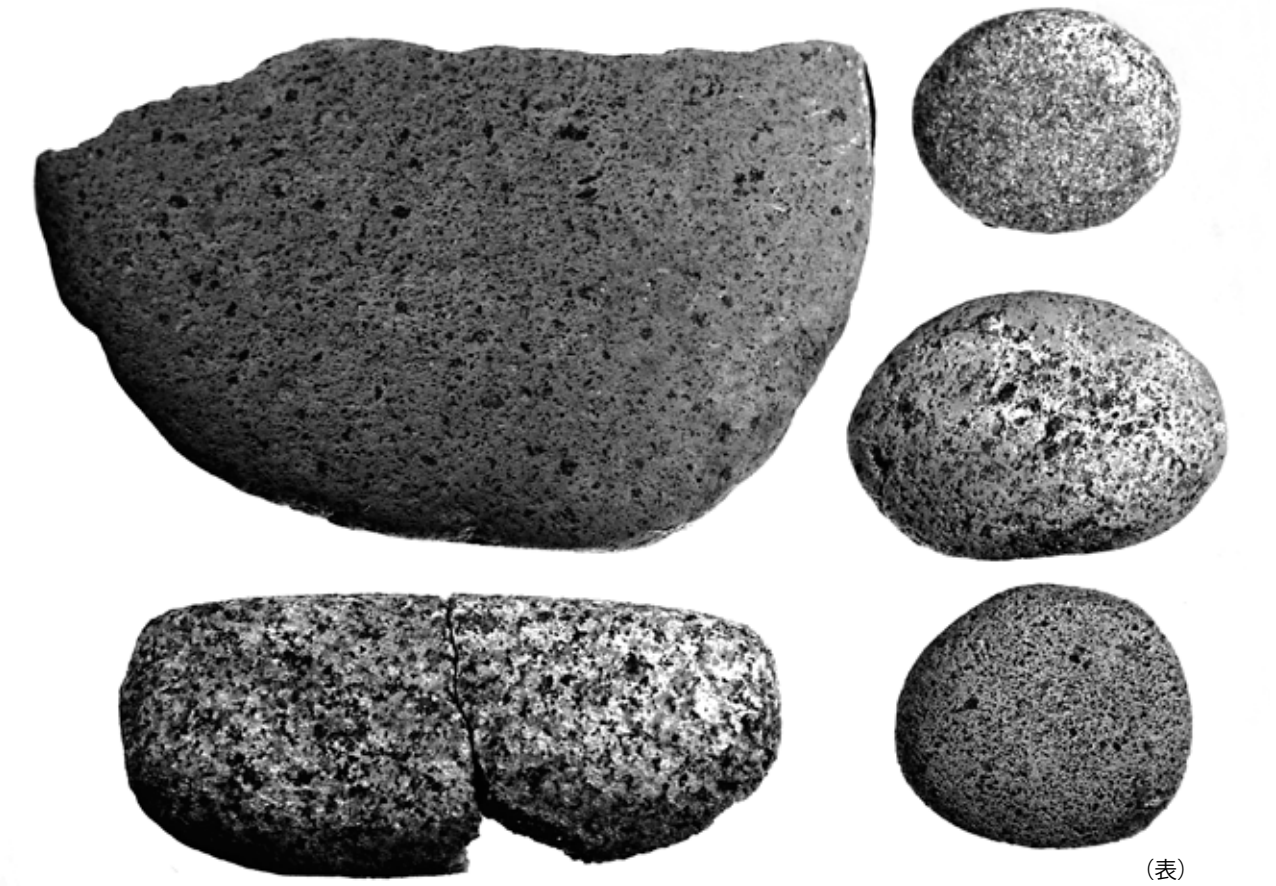


（表）

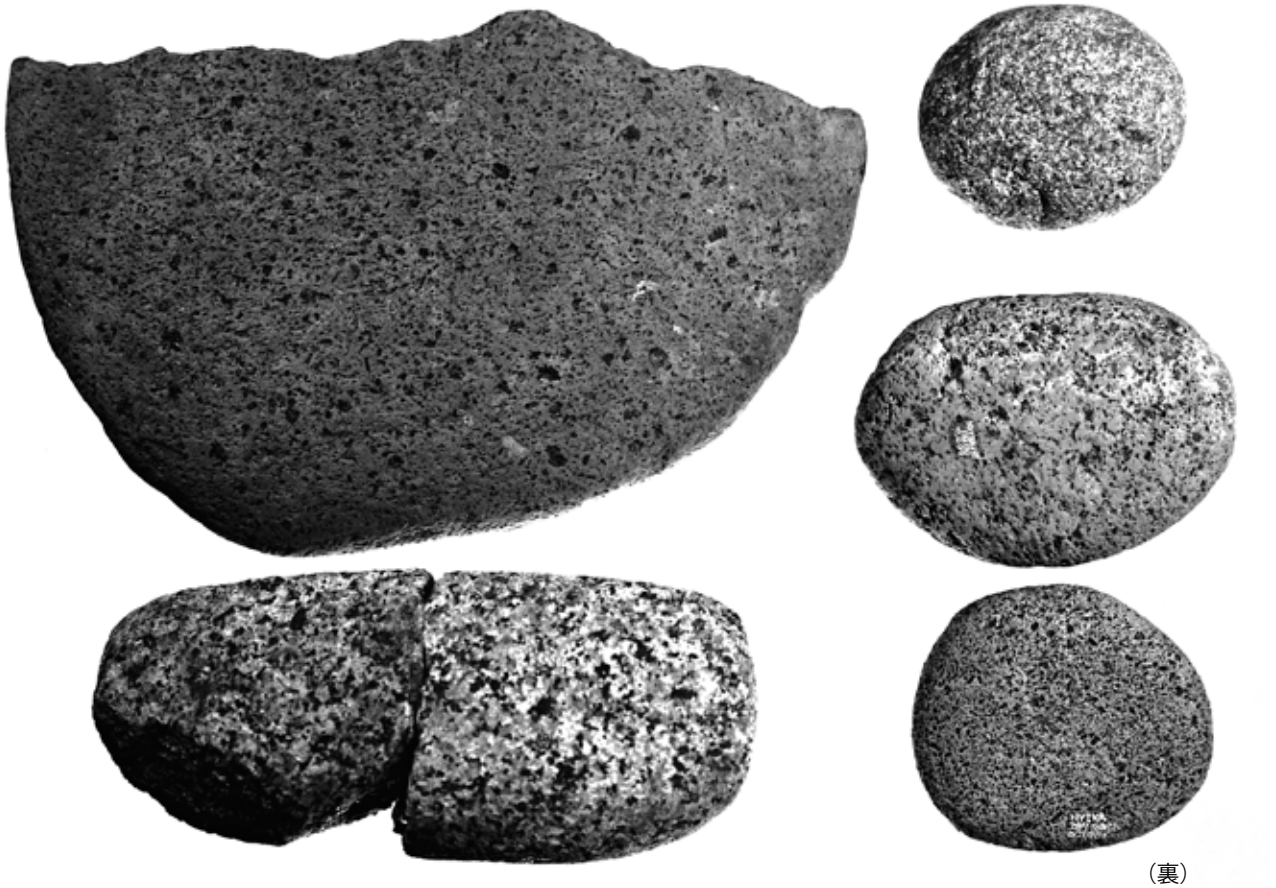


（裏）

石ヶ窪遺跡　打製石器



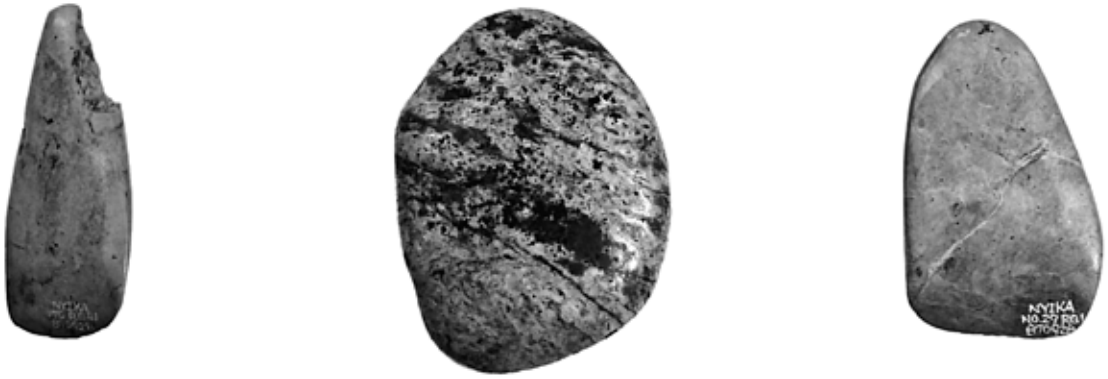
（表）



（裏）

石ヶ窪遺跡　石皿・磨石

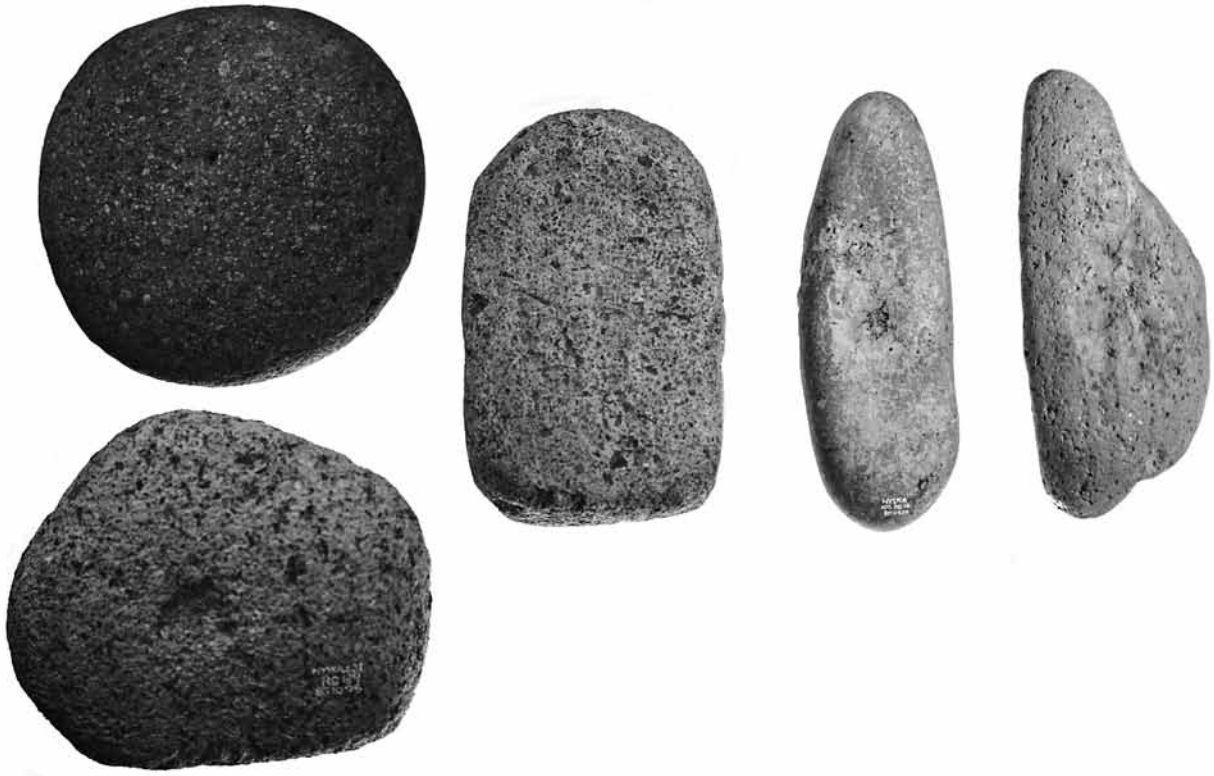
（表）



（裏）

石ヶ窪遺跡　磨製石器・凹石

（表）



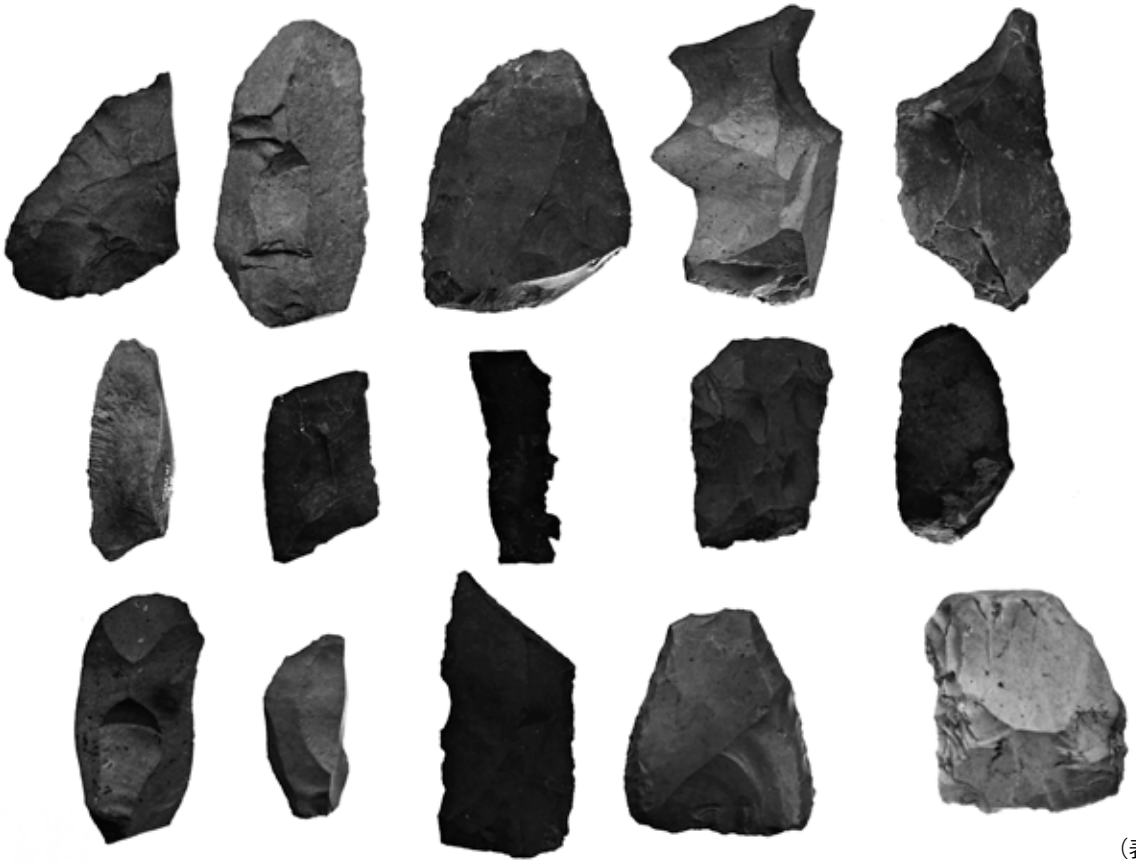
（裏）

石ヶ窪遺跡　凹石

（表）

（裏）

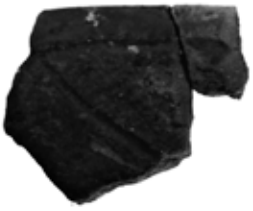
石ヶ窪遺跡　磨製石斧・敲石



（表）

（裏）

石ヶ窪遺跡　打製石器



1

2

3

4

5

雨沼遺跡　縄文土器・土師器

22

19

23

18

33

蕗畑遺跡　縄文土器

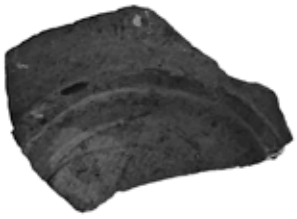
17　土師器甕

14　土師器甕

12　須恵器壺

7

6



3

14

3・6・7　須恵器坏　　14　土師器甕

蕗畑遺跡　土師器・須恵器

蕗畑遺跡　須恵器坏　墨書土器

蕗畑遺跡　須恵器蓋　墨書土器・転用硯

9　須恵器　蓋（墨書土器）

10　須恵器　蓋（転用硯）

34　土師器　小型甕

蕗畑遺跡　須恵器・土師器

1　須恵器坏

4　須恵器坏

2　須恵器坏

5　須恵器坏

11　須恵器蓋

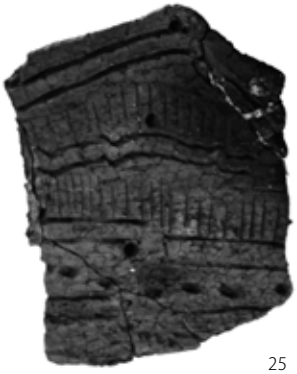
8　黒色土器坏

20　縄文土器鉢

14　土師器埦

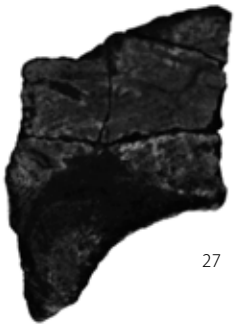
21　縄文土器鉢

蕗畑遺跡　須恵器・土師器・縄文土器



25

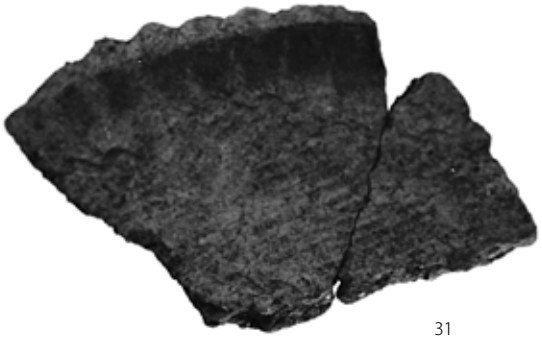
26



27

28

29



31

32

33

34

蕗畑遺跡　縄文土器

35

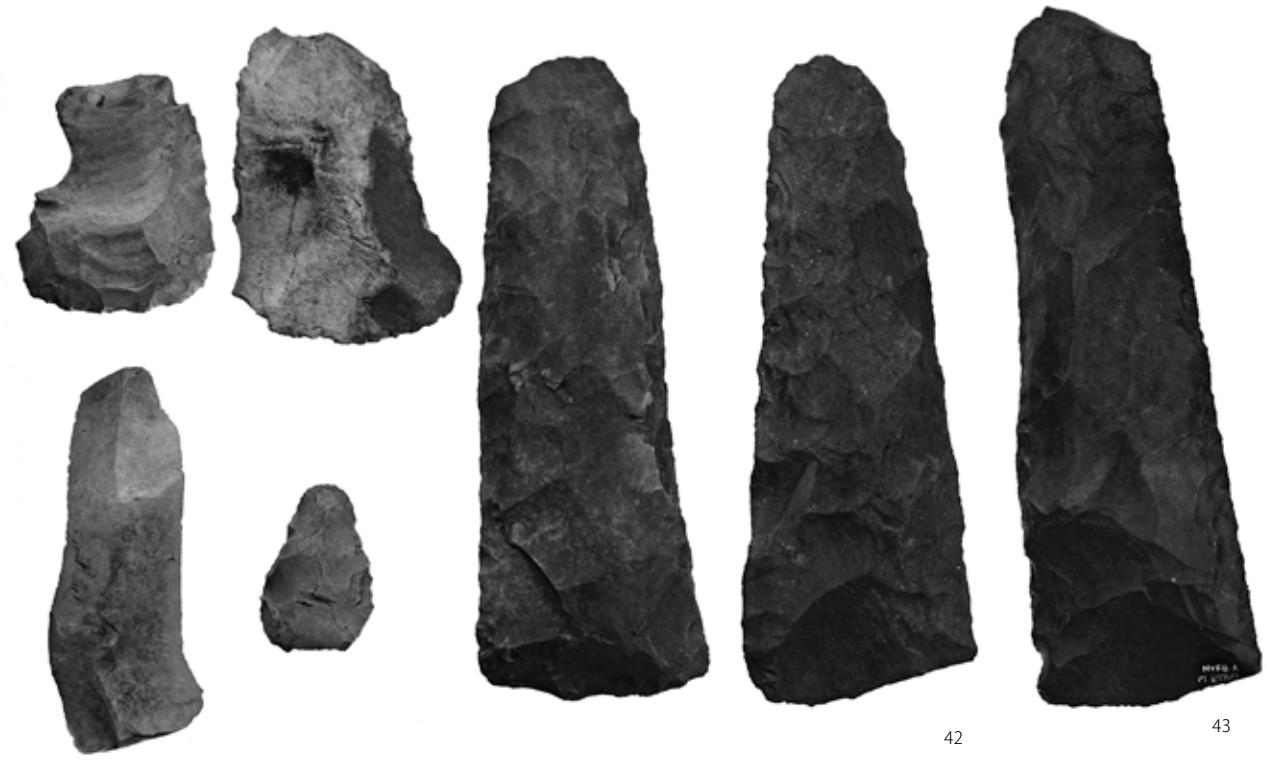
24

（表）

（裏）

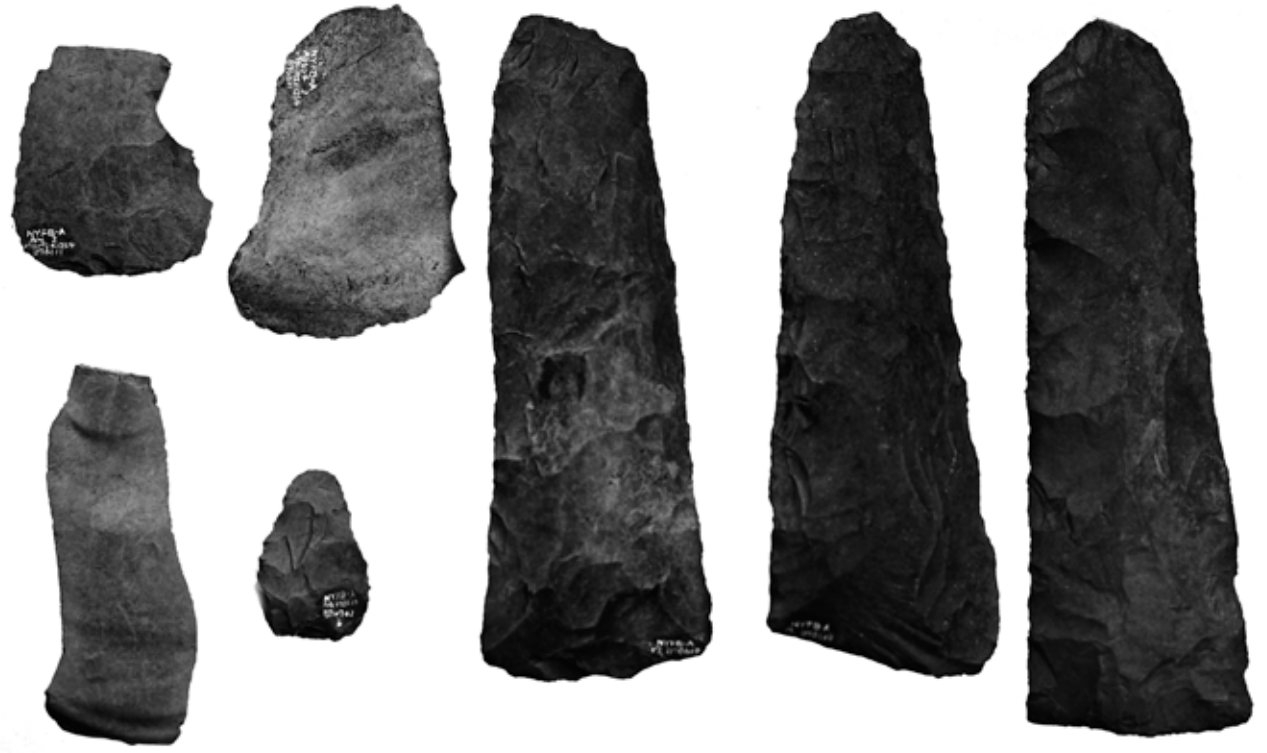
蕗畑遺跡　縄文土器

蕗畑遺跡　砥石



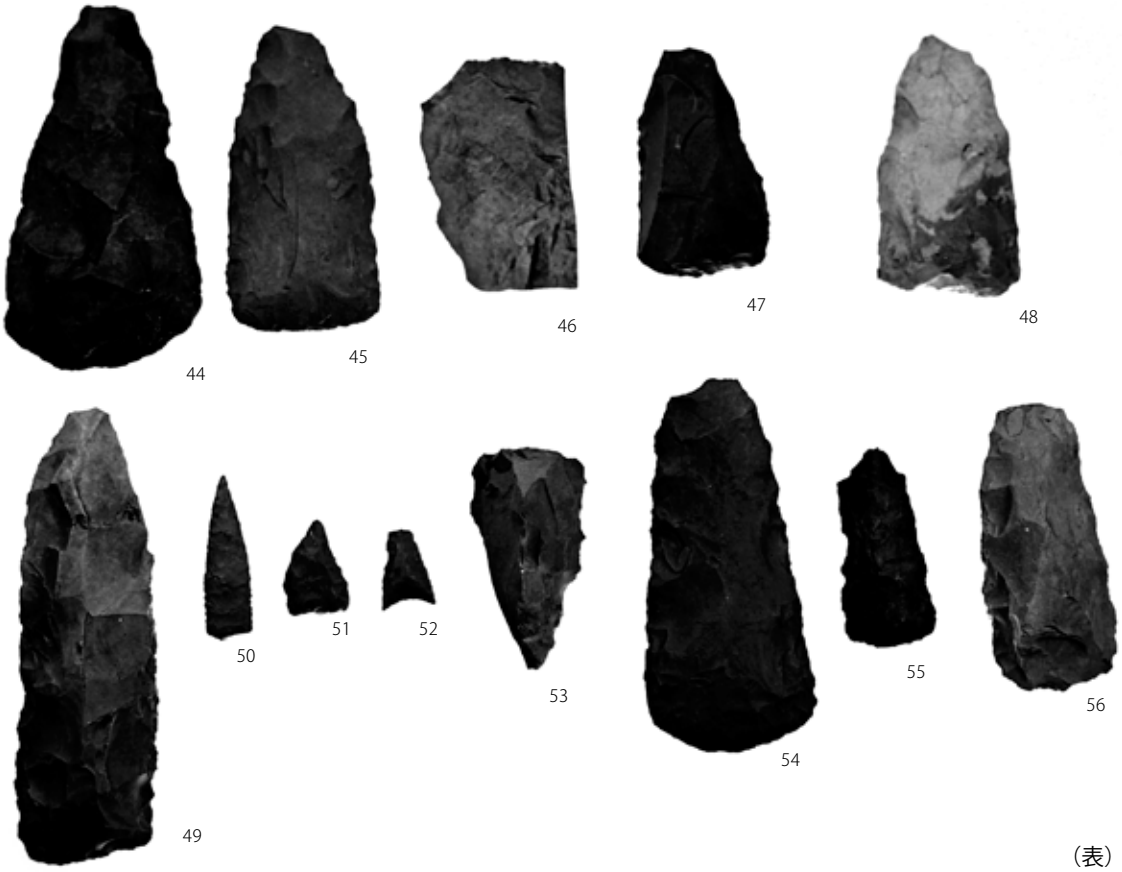
42　43

（表）



（裏）

蕗畑遺跡　箆状石器



（表）

（裏）

蕗畑遺跡　削器・筺状石器・石鏃

（表）

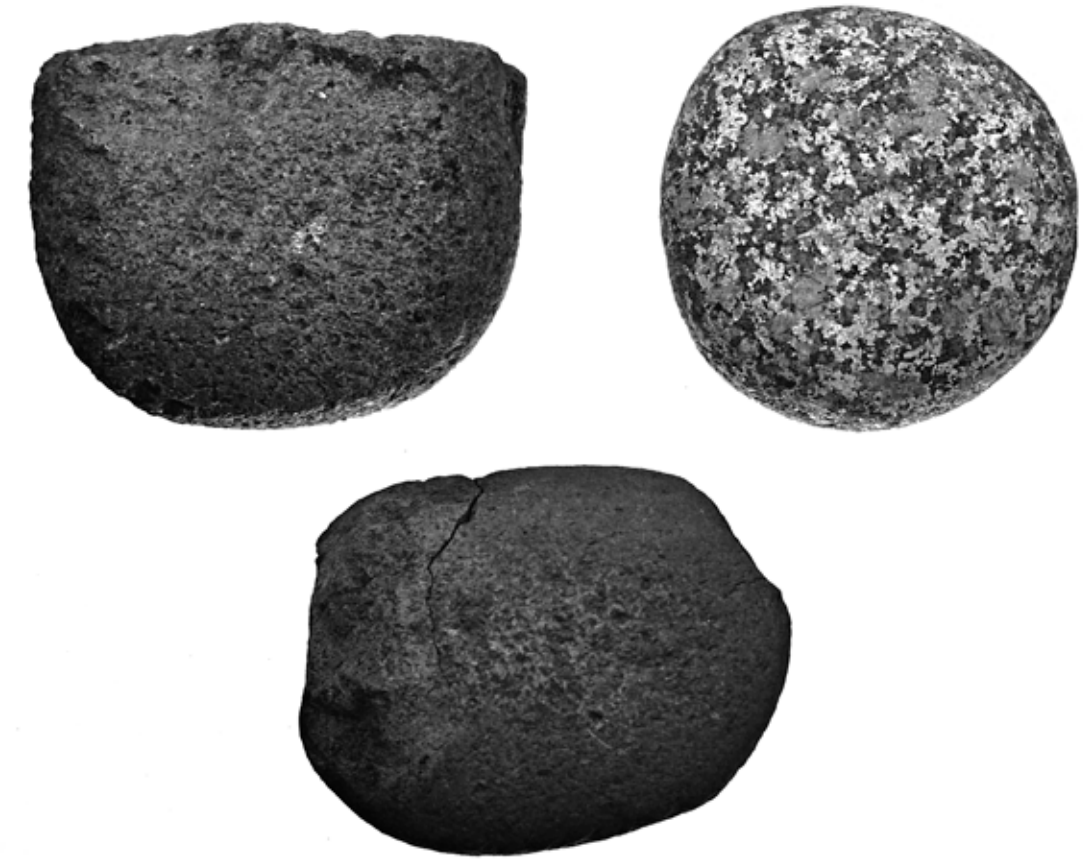
（裏）

蕗畑遺跡　打製石器

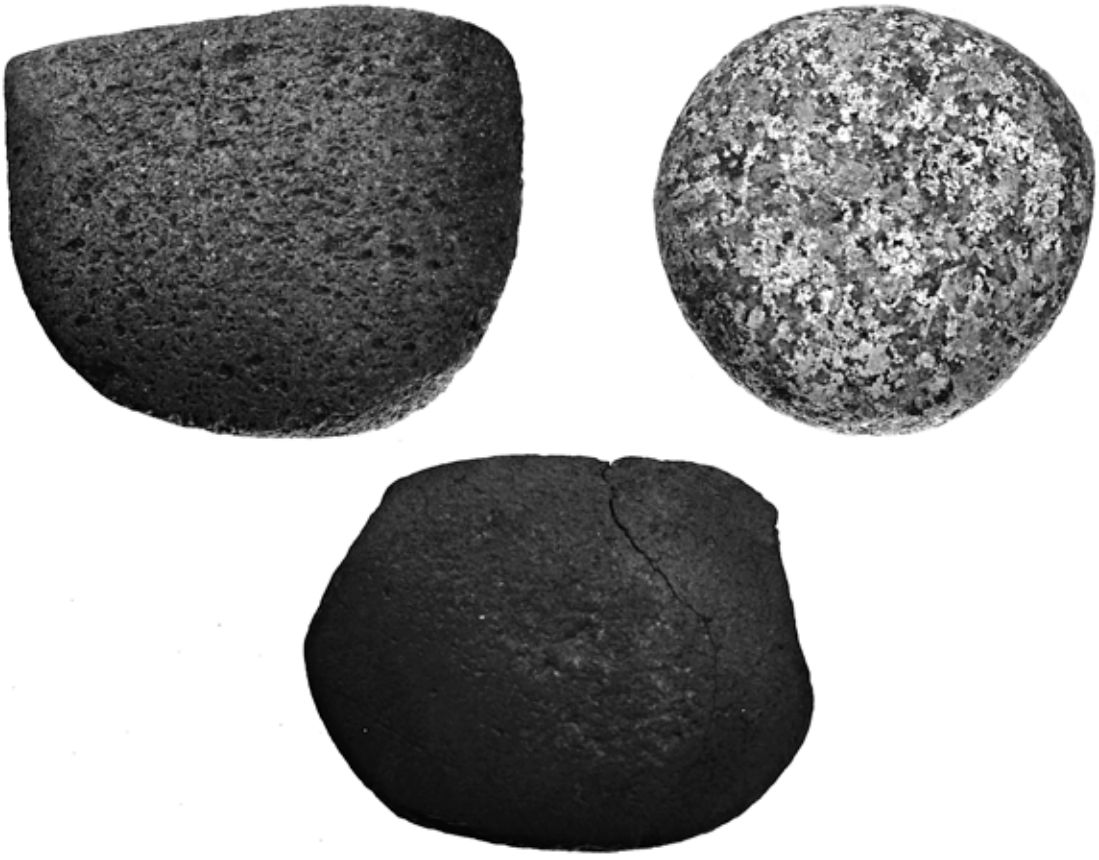
（表）

（裏）

蕗畑遺跡　凹石



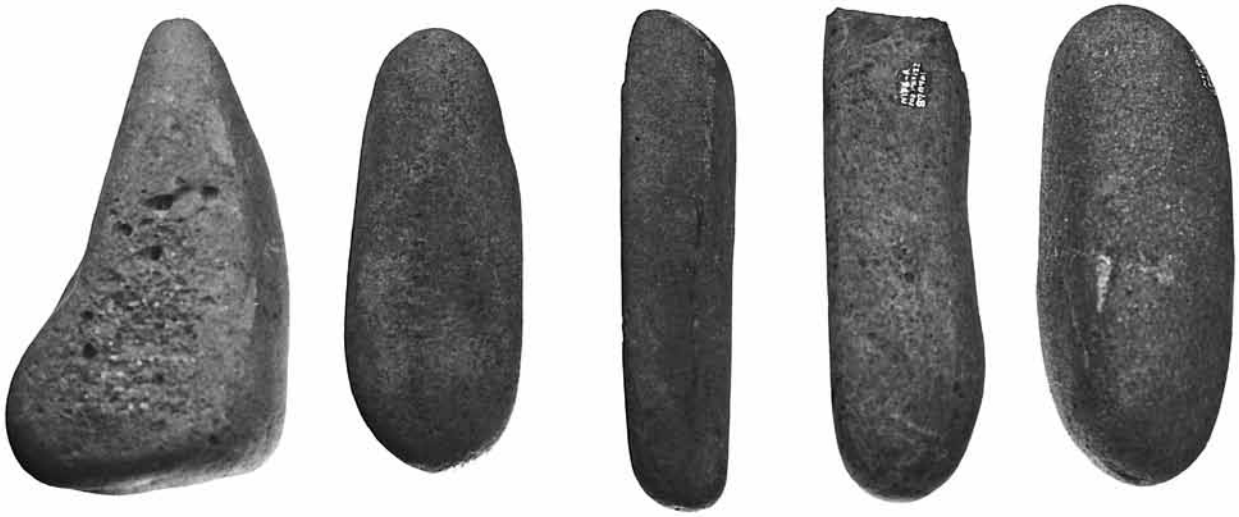
（表）



（裏）

蕗畑遺跡　凹石

（表）



（裏）

蕗畑遺跡　凹石・敲石

報告書抄録

ふりがな	かもうだやまこふんぐん・そうごうこうえんないいせきぐんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	蒲生田山古墳群・総合公園内遺跡群発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	南陽市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第５集
編著者名	鈴木義三　佐藤鎭雄　吉田江美子　山田　渚
編集機関	山形県南陽市教育委員会
所在地	〒999-2292　山形県南陽市三間通436番地１　ＴＥＬ　0238-40-3211
発行年月日	2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かもうだやま 蒲生田山 こふんぐん 古墳群	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 わの 上野	平成２年度 新規登録	38° 06′ 86″	140° 15′ 80″	19900509 ～ 19900908	2000㎡	ハイジアパーク建設事業
そうごうこうえんない 総合公園内 いせきぐん 遺跡群	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 たけはら 竹原	昭和60年度 新規登録	38° 06′ 35″	140° 09′ 58″	19861006 ～ 19890609	1810㎡	総合運動公園整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かもうだやま 蒲生田山 こふんぐん 古墳群	古　墳	古墳時代	前方後方墳　2	土師器 底部穿孔壺 鉄製品	丘陵の尾根上に古墳時代前期の前方後方墳が２基確認された。また古墳に供献する土師器の底部穿孔土器などが出土した。 （文化財認定箱数：27）
そうごうこうえんない 総合公園内 いせきぐん 遺跡群	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡 土坑・溝・柱穴	縄文土器 石器 土師器 須恵器	梨郷地区の山中にある遺跡群。縄文前期を中心とした土器や石器が数多く出土した。また平安時代の住居と土師器・須恵器も確認された。 （文化財認定箱数：27）

南陽市埋蔵文化財調査報告書第５集

蒲生田山古墳群・総合公園内遺跡群発掘調査報告書

2012 年３月 31 日発行

発行　山形県南陽市教育委員会
〒 999-2292　山形県南陽市三間通 436 番地 1
電話　0238-40-3211
印刷　有限会社あづまプリント
〒 999-2251　山形県南陽市高梨 415 番地
電話　0238-43-2909